
東方空想夢 ～Dreams of sky fantasia～

夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方空想夢 ｛Dreams of sky fantasia｝

【Nコード】

N8110R

【作者名】

夜斗

【あらすじ】

病室の窓から空を見上げる少女、『天春桜』

動かない足をぶらつかせながら、少女は目の前で自由に飛びまわる小鳥を見つめていた。

いつか、空を飛んでみたい。

叶わぬ夢を抱きながら桜は退屈な日々を過ごしていた。

そんな桜を、紫紺の瞳が“すき間”から覗いていた。

物語は、彼女の些細な気まぐれから始まった……

序章 黄昏のすき間

病室の窓から望むこの光景を、少女は何度見ただろうか。

同じ建物。

同じ人。

同じ世界

目に映る景色は毎日変わらぬ色をしていて、否が応でも飽きてしま
う。

黄昏時はいつもこう。

心にまで影が伸びてくる。

そして、少女は大きく息を吐いた。

そんな少女の目の前を、色鮮やかな小鳥がくると飛んでみせた。
自慢するように何度か窓の前を横切って、やがて夕焼けの向こうへ
仲間の小鳥とともに飛んで消えていった。

「……うらやましい」

手を伸ばして虚空をつかむ。

私も連れて行ってくれないだろうか。

少女はそんなことを心の中で願ってみた。

誰にも届かない。

そんなことは分かりきっているのに。

ベッドの上で腰掛けていた少女は、ふと視線を落とした。

包帯に包まれた、自分の両足。

もう二度と、動かない役立たずな両足。

「私も空が飛べたらいいのに。そうすれば、どこへだって自由に行
ける。そうすれば、こんな足なんて要らないのに」

手を伸ばして包帯に触れる。

感触など、まるでわからない。

今となつては、こんな両足はただのお飾りだった。

コン、コン。

小さなノックのあと、担当の看護師が少女のそばにやってきた。

少女の顔が少し歪む。

原因は看護師が運んできたあるもの。

「それじゃ桜さん、先生のところへ行きましょうか？」

桜と呼ばれた少女は看護師に振り返ると、軽く笑顔を作つてうなずいた。

車椅子。

これが大嫌いだ。

桜は他人に迷惑をかけるのを極端に嫌う。

とはいえ、さすがにこの年で反抗するのもなんだか気恥ずかしい。

桜はほんの少し前に十七になったばかりなのだ。

「それじゃ、手伝うね」

看護師の優しい言葉。

これも気に入らない。

まだ多少慣れてないとはいえ、桜はもう一人で車椅子ぐらい乗れる。子供じゃないのに、看護師は桜をまるで子供扱いだった。

車椅子に座った桜は車椅子を押されながら担当医師の待つ別室へと向かった。

そんな桜の姿を、一人の少女が“すき間”から見つめていた。

「素直じゃないわねえ。……ふふ、可愛い」

そのまま後を追ってみようかと思い、少女は“すき間”を閉ざすと今立っている不可思議な空間を優雅に歩き出した。

ゆったりとした、どことなく胡散臭そうな印象を与える怪しい衣服。腰まで伸びた金色の髪と鋭く光る紫紺の瞳。

意味があるのか無いのか、手にはふんわりとした形の日傘を握りしめていた。

「しかし、外の世界の人間もほとんど変わらないわねえ。それはやっぱり、結局は同じ『ヒト』だから、なのかしら」

クスクスと小さく笑いながら、桜の後を追いかける少女。

車椅子はそのまま部屋を出て右に曲がって、突き当たりの個室へと向かっていった。

部屋の扉には、恐らく医師の名前と思われる名前の書かれた表札が張ってあった。

「失礼します」

看護師が声をかけてから扉を開く。

桜は顔にこそ出さなかったものの、ものすごく嫌な気分になった。そして、少女はそれを見逃さない。

「……ふふっ、イイコトひらめいちゃった」

悪戯っぽく笑うと、少女はくると向きを変え、反対方向へ歩き出

した。

・
・
・

「……………はあ」

夜の病室。

桜はベッドの上で短く、けれど海の底ぐらい深いため息をついた。
空を見上げると、白く輝く満月が桜をピンポイントに照らしていた。
まるで劇場のスターのようだ。

もつとも、照らしているのは月明かりなのだけけれど。

空を見上げるのに飽きた桜はベッドの上に仰向けに倒れた。

質素な天井が見える。

ただ、それだけ。

「……………自由に、なりたい」

思わずそんなことをつぶやいた。

そういえば、最後に走ったのはいつだっただろうか？

小学生の時？ いや、中学生の時の体育祭……………だったような？

もう、とっくに忘れていた。

何もかもに疲れて、少女は瞳をゆっくりと閉じようとした。

「夢でもいいから、自由に走ったり飛んでみたい。夢でも……………いいから……………」

「その夢、私が叶えて差し上げましょうか」

まどろむ桜の視界に、突然不思議な少女が現れた。
誰、と声をかけようとしたときにはすでに遅く、桜の意識は彼方へと吸い込まれてしまった。

序章 黄昏のすき間（後書き）

長らくお待たせいたしました。

前作を書き終えてから約3週間、ようやくと新作が公開できました！
どういう展開を見せるのか、作者でも予測不可能なお話ですが、最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

ご意見、感想など、お待ちしております。

それでは、ヘタレな夜斗の紡ぐ新しいお話をお楽しみください……

第一話 舞い落ちた災厄？

幻想郷、最東端に位置する小さな神社。

はぐれいじんじや
『博麗神社』

その縁側で、一人の少女が日差しをいっぱいに浴びながら茶をすすっていた。

「平和ねえ……」

座布団の上に正座しながら、盆の上の茶菓子をかじる少女。

はぐれいれいむ
博麗霊夢。

赤と白を基調とした巫女服に、艶やかな黒髪を大きな赤いリボンで結わえていた。

呑気にひなたぼっこを楽しんでいる彼女だが、これでも歴とした『博麗の巫女』。

これまで幻想郷で起きた様々な怪異を解決してきたのも彼女だ。

「ここ最近は何変も起こらないしホントに平和……これが本来あるべき幻想郷の姿よね」

湯のみを置くと、今度は茶菓子をかじる香ばしい音が神社に響く。

春を迎えたばかりの幻想郷の風は穏やかでとても心地がいい。

このまま日向に当たり続けて風に吹かれていたら、今すぐにでも快適な昼寝が出来そうだ。

霊夢はもう一つ菓子を食べようと盆の上に手を伸ばして、

「あれ？ たしか雷おこしがもう一つあったような気がしたんだけど……」

「また年寄り臭いもの食べてるのねえ霊夢」

「!？」

いつ現れたのか霊夢の真横に少女が座っていた。
ゆったりとした、どことなく胡散臭そうな印象の衣服に身を包んだ少女。

紫紺の瞳は、今しがた霊夢が食べようとしていた雷おこしを手に取り見つめて、

「ぼく」

「ああ！ それ私のお菓子でしょ！ 勝手に食べないで！ ってか、年寄りくさいってなに!？」

「……薄味ね。外の世界の方が美味しいわよ」

「そんなコト聞いてなーい!？」

少女は言葉を見殺しにして砂糖のついた指を舐める。

……どことなく仕草が艶めかしい。

霊夢は顔をしかめながら少女に訊ねた。

「で、なんの用よ紫^{ゆかり}。今私はすごく『忙しい』のだけけれど？」

忙しい。

その霊夢の言葉に、紫と呼ばれた少女は真剣そうに眉をひそめた。

「……いったい今のあなたのどこから『忙しい』なんて言葉が出てきたのかしら？ 余生を持って余した年寄りみたいなコトしてたじゃない」

「失礼な。ひなたぼっこは体に良いのよ。それに、平和を一番に感じられるもの」

「あなたはもう少し、『博麗の巫女』としての自覚を持ちなさい。ひなたぼっこしてる余裕があるのなら、どこぞの神社のように信仰

を集めたり、いろいろと仕事があるでしょうに」

「アンタに言われたくない。……で、本当に何の用なの。正直、アンタがここに来る時ってのは、大抵ロクなコトがないんだけれど」

紫はぼんやり空を見上げながら、ぽつりとつぶやいた。

「異変ってほど大袈裟ではないけれど……ま、ただの気まぐれよ」

「はぁ？　気まぐれって」

紫は縁側に面した小さな庭に降りると、サッと右手を薙いだ。

すると、右手が触れた空間に小さな裂け目が現れる。

それは彼女の能力『境界を操る能力』によって開かれた次元の裂け目だった。

そして紫は霊夢に振り向くと愛らしく微笑んで見せた。

「外の世界を歩いていたら、ちょっと可愛い子見つけたの。で、連れてきちゃった。テヘッ？」

「テヘッ？　じゃないわよ。まったくどうしてそんなコトして……」

「だから気まぐれだって言ったでしょう？」

悪戯っぽくウインクしてみせた紫に、霊夢はげんなりとした様子でため息をついた。

「……ホント、なに考えてんだかわかんないわよアンタは」

「ふふふ、それでね霊夢」

「ん？　なによ」

「そろそろ……来るわよ？」

「へ？」

すると突然、裂け目の中から何かがガシャンと派手な音を立てて落

ちてきた。

それは椅子に車輪のついた、奇妙な物体だった。
慌てて霊夢は庭に飛びだすと、裂け目の真下に向かい、その物体を
まじまじと見つめた。

「何……これ？　椅子に車輪？　こんなもの落とすなんていったい
何考えて」

「あ、本命はその次ね」

「本命？　次は何がってきやああああ！？」

視線を上げた霊夢の前に、今度は裂け目から人が飛びこんできた。
重力に引かれ真っ逆さまに落下してくるソレを、霊夢は顔面から直
撃。

瞬間、花のような甘い香りがほんの少しだけ霊夢の周りに漂った。

「う、うぐぐ……な、何が落ちてきて……？」

体を起こしてみると、降ってきたのは薄い色の服を着た少女だった。
ほとんど無色で装飾も何もないとても質素な服装。

肩辺りで短く切りそろえられた黒髪に、少女とも少年にも見える綺
麗な容姿。

今は瞳を閉じて規則正しい寝息を立てている。
落ちてきたというのに何と呑気なことだろう。

「え、人間？　それに今の香りは……」

「霊夢、布団を用意なさい。そこで寝かせっぱなしにするわけには
いかないでしょう」

「わ、わかってるわよ……んしょつと」

霊夢は少女を背に担ぐと、縁側から部屋へと上がっていった。

第一話 舞い落ちた災厄？（後書き）

今回の作品から、地の文と台詞の間隔を少し開けてみました。

どうでしょうか？ 読みやすくなったでしょうか？

それと、早速お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。
います。

一日一話をモットーに、また頑張っていきますので、これからもよろしく願います。

第二話 その名、桜

少女が目を覚ますと、見覚えのない古びた木造の天井が見えた。

「……え？　ここ、どこ？」

とりあえず、体を起こしてみる。

さっきまで病院のベッドで眠っていたはずなのに、今は何故か布団。所々継ぎ接ぎが見えるようなオンボロ布団。

なんだか、ちよっぴりカビ臭い。

次に、少女は周りをぐるりと見回した。

全然見覚えのない場所だった。

床は全面薄緑色の畳。

窓、ではなく襖だったり、達筆過ぎて何て書いてあるんだか分からない古めかしい掛け軸が壁に掛けてあったり。

それはまるで、教科書にでも載ってそうな古い日本家屋のお手本みたいな場所だった。

……しかし、どうして私はここにいるのだろうか。

少女は寝る前に聞こえたあの不思議な声を思い出した。

「何か、すごく怪しい声だったけど……たしか『夢を叶える』だとか言ってたような……」

あまりハッキリと思いつけない。

これ以上考えるのは止めた。

少女はとりあえず動こうとして、もう一度周りを見回した。

とはいえ、もちろん少女は“アレ”がないと動けない。

しかし、

「あれ、車椅子……」

車椅子は見当たらなかった。

ふと、少女の頭の中に一つの考えが浮かんだ。

……もしかしたら、これは夢なのでは？ と。

夢だとしたらこの足も動くのかもしれない。

試しに、少女は大きく息を吸い込んで、

「……ふん！」

まるで反応がなかった。

体力テストでやる柔軟みたいな姿勢で固まってしまい、少し恥ずかしくなった。

一応、周囲に視線を動かす。

……誰もいない。

こんなダサイ姿、誰かに見られなくてよかった、と安堵の息をもらすと、突然少女の脳天に声が響いた。

「可愛いお目覚めね？」

「……だ、誰だ!？」

声は聞こえても姿が見えない。

右を見ても、左を振り返っても、声の主は見当たらない。

「そんな場所探したって無駄よ。私は」

ココ、と背後からいきなり肩をポンと叩かれ振り向くと、紫紺の瞳が突然覗きこんできた。

「わ!　　っわわわ!？」

「なによ、大袈裟ねえ。まるでお化けでも見たような顔をして」

目の前に、金の髪をなびかせ微笑む少女がいつの間にか座していた。その声を聞いて、思わずハツとなる少女。この声、たしか寝るときに聞こえた……？

「霊夢ー？ この子、気が付いたわよー」

恐らく誰かの名前であろう名を呼ぶと、今度は忙しそうな足音が響いてきた。

部屋の戸が乱暴に開け放たれ、そこには赤と白の巫女服姿の少女が不機嫌そうに立っていた。

「気が付いたのね。それじゃ、さっさと帰ってもらいましょうか」

「は？ 帰る……って？」

「もう。少し落ち着きなさい。まずは自己紹介をするのが礼節ってものでしょう？」

「……まったくめんどくさいわねえ」

霊夢と呼ばれた少女は顔をしかめながら部屋の戸を閉め、布団の上の未だ事情の呑み込めない少女の前に正座した。

そして、金髪の少女がコホンと軽く咳払いをすると布団の上の少女に向かいあう。

「初めまして、私は八雲紫^{やくもゆかり}。そしてあっちでふて腐れてるのが」

「自己紹介ぐらいするわよ。……博麗^{はくれいれいむ}霊夢よ」

そっぽ向きながら霊夢は答えた。
紫はその様子を見て口元を扇子で覆いながらクスクスと微笑んでいる。

「は、はあ……？ はくれい、れいむさんに、やくも、ゆかり……さん」

「紫でいいわ。もちろんあの子も」

「ええ。霊夢でけっこう」

相変わらず霊夢の機嫌は悪い。

菓子を食べられたうえに、厄介事を持ちこまれたのだから当然だろう。

「で、アンタの名前は？」

「……桜さくら、です。天春あまがす、桜……」

布団の上だったが、桜は一応二人に向かって丁寧に頭を下げた。

「へえ……？ 珍しい字あざなね」

「あざな？」

「名字のことよ」

説明する口調がキツイ。

何がそこまで不満なのだろうか、桜はムッとなって霊夢を見た。

「……なによ」

「いえ、別に」

桜は静かに視線を反らして紫に向き直った。

「それである、自己紹介はいいんですが……ここは？」
「ここは幻想郷よ」

その言葉に、思わず桜は自分の耳を疑った。

「……すいません、今何と？」

「幻想郷。あなたにわかりやすく説明するなら……おとぎばなし御伽噺の世界と言ったところかしら？」

「おとぎ話……え、ここは夢の世界とかじゃ……」

「プッ、夢の世界ですって？ アンタずいぶん面白いコト言うじゃない」

ケラケラ笑いだす霊夢。

桜は頬が熱くなるのが嫌でも分かった。

しかし、桜はそれで黙っているほど淑やかな性格じゃなかった。しとや

「可笑しくはないでしょ。いきなり知らない場所で寝かされて、知らない人たちが目の前に出てきてこっちはまるで訳が分からないのに。……霊夢さんって、少し失礼じゃありませんか？」

「失礼……？ 私が？」

すっと立ち上がると、霊夢は桜を見下した。

「ただの人間のくせに随分と生意気ね」

「あなただって同じ人間でしょ。偉そうにしないでください」

二人の間にバチバチと激しい電流が走る。

一触即発な二人の姿を見て、紫は楽しそうに微笑んだ。

「なあんだ。けっこう気が合うじゃない」

『はあ!?! いったい誰と誰が!?!』

見事にハモった二人の声が、狭い神社に一室に響いた。

第二話 その名、桜（後書き）

少し遅れた；

原因はお風呂に入るのが少し遅れたせいです……

第三話 幻想飛行

「まったく、どうして私がこんなことに……」

霊夢はぶつくさ文句を言いながら食器の片付けをしていた。

紫は気がついたらどこかへと消えていた。

よりによって、あの忌々しい女を残したまま。

腕を掴む手に思わず力が入る。

思い込ただけで腹立たしい。

「あの子、桜だったかしら？ いったいアイツをどうしろってのよ。元の世界に戻そうとしたら結界は何でか開かないし……」

先ほど、神社の裏手にある現世の門に行ってみたが、門は閉ざされたままで力を込めても何にも反応しなかった。

紫が何かしたのだろうか。

何だか余計に腹が立ってきた。

乱暴に腕を拭き終えると、先ほどまでひなたぼっこをしていた縁側へと向かった。

「……ん？ アイツはどこ行っただのよ」

桜の姿が見当たらない。

さっきまで、ここでぼんやりしていたような気がしたのだけれど……？

「ほんつとめんどくさ……」

仕方なく神社の適当な場所を探してみる。

意外と、あっさり見つかった。

桜は縁側とは反対側にある小さな丘の上にいた。

先ほど車椅子とやらを返してやったので多少は自力で移動したのだろう。

「……………」

桜は無言で、目の前に広がる景色を見つめていた。

霊夢は毎日毎日見続けて見飽きた景色だが桜は初見。

驚いているのか、それともこっそり投身自殺でも考えてるのか……
霊夢にとってはどうでもよかった。

「いや、さすがに自殺はマズイか。神社が自殺の名所だなんて広まったらお賽銭どころじゃ……」

仕方なく、霊夢は桜の元へと歩き出した。

緩やかな傾斜の道を歩いていくと、見慣れた幻想郷の景色が広がる。
ふもとには、わずかながら人間が生活する小さな村里。

真正面にはうっそうと広がる森林地帯。

その中には小さな湖と紅い洋館。

森の奥には妖怪の山と呼ばれている、文字通り妖怪の住処となっている
広大な山がそびえている。

「そんなトコで何してるの？ うっかり転んで落ちたら、もれなく
死ねるわよ？」

「巫女さんが簡単に死ぬとかどうとか言っていていいの？ なんだか
すごく不謹慎」

少し、いやかなり桜の態度が変わっていた。

さっきは警戒して素性を隠していたのか、どうやらこっちが本性ら

しい。

口調は荒い、というよりは逆に冷めていて少しトゲのある言い回し。

「本当のコトなんだからいいでしょ。不謹慎とかそんなの興味なし」
「ふうん」

霊夢の言葉をたいして気にも留めずに、桜は景色を眺め続けていた。
何がそんなに面白いのか、霊夢にはさっぱりわからなかった。

「……ねえ、霊夢」

ふと、桜が霊夢の名を呼んだ。

「なに？ 何か聞きたいことでも？」

霊夢はそれに応じて一応足を止めた。

「紫さんは私に、『夢を叶えてあげる』って言ってたんだけど……」
「アイツ、そんなこと言ったの……って何で紫には『さん』が付く
のよ。私は？」

「……私の夢、こんな場所で叶うのかな」
「ちよっと、私の話聞いてる？」

桜は沈んだ声でつぶやくと、どこか虚ろな目をしていた。

絶望……とまではいかないが、どうせ上手くいかないと諦めた子供
みたいな顔をしていた。

とりあえず、霊夢は訊ねた。

「アンタの夢って何？ 大金持ちになりたいとか、満漢全席楽し
みたいとか？」

「それ、霊夢の夢でしょ」

「な、なんでわかったのよ？」

「何となく。……くすっ」

桜は、ほんの少しだけ笑った。

可愛らしい声音で、一瞬だけだったが笑顔も見えた。

「……教えなさいよ。アンタの夢」

霊夢は桜のそばに歩み寄って、桜と視線を合わせるようにちよんとしゃがみ込んだ。

一度霊夢を見てから、桜は遠い空を見上げて、

「空を……空を自由に飛ぶこと。それが私の夢かな」

「ふうん……」

やや沈黙。

霊夢と桜の間に春特有の少し肌寒い風が吹き抜ける。

それでも、霊夢と桜はしばらく無言。

「ふうん……ってそれだけ？ てっきりものすごく笑われるか、バカにされるかと思ったのに」

「私はそこまでヒドイ人間じゃないわよ。それに、バカにもしないし笑いもしないわ。どんな夢を持とうが本人の勝手でしょ」

「それは、そうだけど……」

「……ふふん」

ここで霊夢はあることを思いつき、桜を乗せた車椅子の取っ手を握りしめた。

「それにね、私は」

「え、霊夢？ 別に押してくれなくても私は一人で……ッ!？」

しかし、霊夢は回れ右して神社に戻るのではなく、目の前の崖に向かって思いっきり車椅子を押しだした。

「霊夢!？ ちょ！ そんな押したらホントに落ちるって!？」

勢いを落とさず、そのまま一気に直進。

ガタガタ揺れる椅子の上で、桜は必死にしがみつながら霊夢の名を叫んだ。

「霊夢！ 止めて！ なんの冗談よ！ 早く止め!？ き、キャア
アアアアアア!？」

突然、車輪の音が止んだ。

もう間に合わない。

桜は死を覚悟して目をつぶり、ぎゅっと体を強張らせた。

このまま地面に真っ逆さまに落ちて、全身をぶつけてズタズタにして、こんな訳のわからない場所で死ぬなんて……

あれ？

何も、起こらない。

恐る恐る、桜は瞳を開くと、

「……なに、これ？ どういうこと……!？」

椅子に座ったまま、まっすぐに車椅子は進んでいた。

第三話 幻想飛行（後書き）

読んでくださる方、ありがとうございます。

感想、ご意見等、いつでもお待ちしております。

……今日は他に書くことないんでこれだけで；

あ、そういえば今作はあらすじを書いてません。

正直書いてて邪魔じゃないかなあって思ってたので、思い切って消しました。

第四話 無謀な夢

「いったい何なのアンタは！？ 空を飛びたがるくせに高所恐怖症！？ バツカじゃないの！？」

神社の一室で怒声連発の霊夢。

その前には桜が正座させられていた。

「……空は飛びたいの。でも、高い場所はイヤ」

「その夢矛盾してんじゃないの？」

もつともである。

桜は霊夢の説教にしゅんと小さくなってうつむいていた。

「ちょっと考えればわかりそうなものを。……でもま、とりあえず夢は叶ったでしょ？ だったらもう未練ないわね？」

「えッ、あいや、えっと……うん」

無理やり決めつけるような言い方であったが、空を飛べたことは事実。

桜はうなずくしかなかった。

霊夢は立ち上がると、静かに瞳を閉じて指先に力を込めた。

「霊夢、何やって……？」

霊夢の指先に小さな光が集まる。

ペンライト程度のほんの小さな光をそっと空間に踊らせると、そこに小さな歪みが出来た。

うにゃうにゃした、何とも名状し難い物体(?)はそのまま宙を漂

う。

桜には何をしているのかまったく意味が分からなかった。
しばらくすると、

「そうやって呼びつけるの止めてくれないかしら？ 修理するの大変なのよ？」

「うっわ!？」

何故か桜の背後から突然紫が飛び出してきた。

金の髪から流れる何とも言えぬ妖艶な香りが桜を包む。

「呼んでないわよ。ただちょっと結界を悪戯しただけ」

「今どきツンデレなんて。……さすがにちょっと飽きたわよ？」

「だ、誰がツンデレか!？」

頬を真っ赤にしながら反論する霊夢。

どうやら紫を呼び出す儀式のようなものだったらしい。

少なくとも、桜はそう判断した。

「それで、何の御用かしら？ 私今もの凄く忙しいのだけれど」

「ほう。なら具体的に言ってみなさいよ？」

「白玉楼へお茶会に」

「十分ヒマね。わかったわ」

「ああ、私の抹茶羊羹が……」

「うっさいわ!」

霊夢は桜をビシッと指差して、

「さあ！ 夢は叶えてやったわよ？ もうコイツを元の世界に帰してちょうだい」

「あらあら。あれで夢を叶えたとか豪語するのねえ……?」
「見てたの。なら話が早いじゃない」

紫は瞳を閉じて首を横に振った。

「ダメダメ。あれは霊夢が空を飛んだのであって、彼女自身が飛んだわけではないわ」

「高所恐怖症のヤツを飛ばせて? しかもただの人間を? 冗談きつすぎるわよ」

「ただの人間ならね?」

「……………」

急に二人の視線が集まって、思わず緊張してしまう桜。

「彼女、少し能力チカラがあるみたいじゃない? 霊夢は何も感じなかったのかしら?」

「はあ? 能力って……」

しかし、霊夢には一つだけ心当たりがあった。

それは桜とぶつかったときに感じた不思議な香り。

一瞬だけ漂った、あの花のように優しく甘い香り。

「思い当たる節があるみたいね」

「……どんな能力よ。歩けなくて、高所恐怖症の人間が持つ能力なんて」

「さあ? それは分からないわ」

紫は桜の方へ近づくと、そっと頭を撫でた。

「……その、私子供じゃないんですけど」

「ふふふ、そうね。あなたはこういう風にされるの好きじゃなかったわね」

「……………」

でも、紫に撫でられるのはちょっと嬉しい。
お姉さんの感じで照れくさい。

「でも、私は少しくらいなら他人にも甘えていいと思うわ。例えば、そこにいる霊夢に空の飛び方を教えてもらうとか」

「はぁ？ 何言ってるの紫？ そんなめんどくさいこと私がするわけ」

「じゃあ、こうしましょう。あなたがこの子を飛べるようにしたら、現世の門の結界を解除するわ」

「……今ここでノーと言ったら？」

「明日の朝日が拝めなくなるかもしれないわね？」

何だか恐ろしいことになっている。

不敵に微笑む紫の笑顔がなんだか怖い。

対峙する霊夢は顔色一つ変えず、やがて観念したように嘆息した。

「はいはいわかりました。飛ばせばいいんでしょ飛ばせば」

「よろしい。そういうことだから桜ちゃん。霊夢を存分にこき使ってちょうだいな」

「はぁ……」

紫は右手をスツと薙いで空間を切り裂き奥へと進む。

途中、一度霊夢の方を振り向いて、

「そうそう。その子の服、どうにかしなさいよ？ そんな恰好のまま出歩いたら目立つわ」

「言われなくとも何とかするわよ。さ、用が済んだらとっとと消えた消えた」

「……あなたに呼びつけられたのだけどねえ？」

そして紫はすき間の奥へと消えていってしまった。

霊夢はめんどくさそうに頭をかきながら、

「さて……。面倒なことになったけど、とりあえず……」

「とりあえず？」

「服ね。私のお下がりがあるからそれを着なさい。すぐ出すから」

「え？ お下がりにってまさか……」

「大丈夫よ。アンタ私と同じくらいの背丈だし、寸法は問題ないわ」

「いやあの、寸法とかどうとかじゃな」

「ちょっと待ってなさいよ？」

ひらひらと手を振りながら部屋を出ていってしまった。

桜が心配しているのはもちろん、

「まさか、私巫女服着るのかな……」

コスプレみたいで恥ずかしい。

まさかそんな恰好をするとは夢にも思わなかった。

……まだ、これが夢なんじゃないかとちらつと考えてみたが、

「……痛いもんね」

頬はひりひりする。

痛みがあるということは、恐らく夢ではないということ。

「これから私、どうなるのかな……」

ふと、縁側から空を見上げてみる。

不安な桜とは裏腹に、幻想郷の空は雲一つない快晴だった。

しばらくして、ドタドタと慌ただしく廊下を走る音が聞こえてくるとバン、っと戸が勢いよく開かれた。

「あった、あったわよ！ これこれ！ 少し前に着てた私の巫女服
！」

「や、やっぱり巫女服だー！？」

桜の不安は見事に的中した。

第四話 無謀な夢（後書き）

調子はそこそこ。

うん、強いて言えば……感想とかコメントが欲しいw

しかしこればかりは運任せですので、気長に待ちます。
あ、タグを少し変えないと……

第五話 出発！

「……………」

「どう？ 案の定ピッタリだったでしょ？ どう？ 動きやすさとか着心地とか」

桜は鏡の前で真っ赤になっていた。

差し出された巫女服は霊夢のそれと形状こそ似ているものの、こちらは赤ではなく桃色を基調としたものだった。

ゆったりとした袖口、全体に桃色の花卉を模した模様を所々に施した可愛い巫女服だった。

露出は低め。

脇もちゃんとガードされている。

しかし桜は不服そうな顔をして、

「……………キズモノにされた」

「ちょ！？ それどういう意味よ！ アンタが着づらいって言ったから仕方なく脱がして着せただけでしょ！ 別に女同士ならなんの問題も」

「き、着づらいって言っただけで手伝ってだなんて一言もいってないでしょ！ それなのに、ああめんどくさい！ とか言って無理やり脱がしたの霊夢じゃん！」

「動かない足を持つアンタが悪い……あ」

言い過ぎた。

霊夢は慌てて何か取り繕おうとして、

「別に、気にしてない。私もそう思ってるから」
「……………ごめん」

不思議とすんなり謝れた。

霊夢自身も少し驚いていた。

桜は車椅子の上でぼんやり語りだした。

「この足、事故でこうなっちゃったんだ。医者の先生には、もう治らないって言われてさ」

「……………」

「病院の部屋から見える鳥がうらやましかった。鳥は自由じゃないとか言う人もいるけど、私はそうは思わない。だって、少なくとも飛んでる間は『自由』でしょう？」

「……そうね。どこへ行くのも、どこで休むのも、そいつの自由だわ」

霊夢が桜のそばにしゃがみ込むと、再びあの時の甘い香りを感じた。優しく包み込むような甘い香り。

これは……、なんの香りだろうか。

不思議と、霊夢は心が安らぐような感じがした。

「何か、良い匂いがするのだけど……」

「え？ ……別に特別良い匂いはしないけど？」

桜にはこの香りが分からないらしい。

霊夢はあごに手を当て少し思案した。

紫の言っていた、桜の能力に関係するのだろうか？

「霊夢？ ……どうかしたの？」

少し、興味がわいた。

霊夢は立ち上がると車椅子の取っ手をつかんだ。

「なんでもない。さて、少し出かけましょうか」
「出かけるって……どこへ？」

車椅子を縁側に着地させ、振り返る桜に霊夢は答えた。

「まずはアンタの調査から。地霊殿ってトコへ行くわよ」
「地霊殿？ そこってどんな場所なの？」
「行けばわかるわ」

すると、先ほどと同じように、霊夢は車椅子を後ろから全力で押し出した。

「ま、待って！　せめてもう少しゆっくり飛ばしってきゃあああああ
あ!？」

悲鳴を上げながら空を飛ぶ車椅子……、いや、悲鳴を上げているのは桜だが。

二人は神社からまっすぐ北へと飛びだしていった。

・ ・ ・

やがて辿り着いたのは、山中深くにぽっかり空いた大穴の上空。

「……いつ来ても陰気なオーラを感じるわね」
「じ、地獄の入口みたい……」

真昼だというのに、大穴は日差しを吸い込んで暗闇が広がっている。

落ちたら……と考えるのも嫌だった。

「ふふん、なかなかイイ線いってるわ。あそこは少し前にあった間欠泉の跡地なんだけど、奥には地底に封じ込められた妖怪とかがいるのよ」

「よ、妖怪……」

「そ。あの中には地底の妖怪の住んでいた都があるの。昔は地獄として機能していたらしいわよ？」

「……か、帰ろう。そんな物騒な場所に行っても誰も得しないよ！」

「そのもつと奥に用があるの。つべこべ言わず齒を食いしなれ」

「それなんか違わなってきやあああああ！？」

桜の言葉が言い終えるよりも先に、霊夢は大穴目がけて真っ逆さまにダイブ。

桜の視界が180°。回転すると、あっという間に空が地で、地が空でと天地が逆転。

そんなパニック状態で必死にしがみつく桜の腕をつかみながら、霊夢は闇の中へと進んでいった。

第五話 出発！（後書き）

もう少ししたら戦闘回かな。

いつも呼んでくれる方々、ありがとうございます。

でも、ちょっと閲覧者数が減っちゃったなあ……；

第六話 アンダーブリツチの死闘

暗闇を抜けると、そこには、

「……ジメジメしてる」

もちろん暗闇が広がっていた。

今は霊夢の作りだした小さな光球のおかげで足元だけ照らされている、といったところだ。

「地底だもの。我慢なさい。それで、これから先なんだけど……」

「なんか、スースーして落ち着かないなあ」

「だから我慢しなさいってのに。……ん、とりあえずあっちね」

霊夢の指差した方向には、ぼんやりとだが橋が見えた。

それは車が数台は広がれそうなほど幅広な橋だった。

木で出来ているらしく、橋の表面は茶色い。

霊夢は車椅子を押しながら歩きだした。

「こ、今度は飛ばないの？」

「面倒なヤツに会いたくないからね。絡まれると厄介だし」

「面倒なヤツ……」

思わず、鬼とか鎧武者みたいなのを頭で思い浮かべてしまい体がぶる、つと震える。

こんな暗闇の中からそんなのに襲われたらと思うと……、ゾツとしない。

しばらく歩いていると、ちょうど橋の正面に辿り着いた。
人の気配はもろろんない。

ただ、妙な寒気だけは桜でも感じていた。

「……なんだろう。もの凄く嫌いな風が吹いてるような」
「ふむ……?」

桜の何気ない一言だったが、霊夢は少し感心した。

どうやら桜は本能的に何かを感じているらしい。

実際、橋の真ん中に誰かがいる。

こんな場所にいるのはもちろん人間じゃない。

妖怪だ。

気配はこちらに気づいたのか、ゆっくりと近づいてくる。

やがて、闇の中からその姿を現した。

「こんな地底の底を訪れるのは何処の誰だ……って、いつぞやの巫女か」

「霊夢、あの人が妖怪?」

「そうよ。一応妖怪。名前は忘れた」

現れたのは、エメラルド色の瞳をした可憐な少女だった。

ただ、変わっているのは耳が少し尖っていることだけで、それを除けば普通に美少女として通用しそうなほど端正な容姿をした少女だった。

特に目立った武装もしていない。

「少し通してくれないかしら? 地霊殿に用があるのだけど」
「別に構わないけど……そいつは誰?」

指を差されて思わずビクッ、となる桜。

挨拶した方がいいのか、それとも黙ってた方がいいのか悩んでいる

と、

「コイツは……知り合いよ。ただの人間」

「ただの人間？ そんなヤツをどうしてこんな地底の底まで連れてくる？ おかしいじゃない」

「それは……」

口ごもる霊夢。

実際ただの人間かどうかを判断するためにここに来ているのだが、
どうやら簡単に通してくれそうにないらしい。

少女から少しずつ殺気が見え始めた。

桜の目の前で戦えるかどうか、霊夢は少し不安だった。

「いいじゃない。固いコトいわないでよ。えと……パルシィ？」

「パルシィ、だ！」

逆鱗に触れたか、と霊夢は舌打ちしながら一気に上昇した。

パルシィもまた同じように上空へと飛んだ。

その様子を、ただただ呆然と見つめる桜。

「よ、妖怪ってスゴイな……」

ついでに霊夢も、と付け加える。

そして暗闇の中に置いてけぼりにされる桜。
すると、

「おねーさん」

「え？」

・ ・ ・

「大人しく帰れば、命は助けてあげるわよ」

「用事が済んだら帰るわよ。だから橋を通せコラ」

「暴言巫女なんか、死ねばいいのよ！」

パルスィが左手をかざすと、緑色の球体がいくつか現れ次々と霊夢に襲いかかる。

霊夢はそれを空中で体をひねって回避すると、懐から符を取り出した。

投げつけると、符に封印されている弾幕が弾けるタイプの符を数枚握りしめると、パルスィに向かって一直線に投げた。

しかし符はパルスィに当たらず、闇の中へと消えていく。

「当たるか！」

「別に当たなくていいのよ」

不敵な笑みを見せると、霊夢は別の符を四方八方にばら撒いた。しかし、どれもこれも直撃はせずにただ宙を漂った。

「ノーコン！ それじゃ遠慮なく先にこっちがスペカでフィニッシュさせてもらうわよ！」

パルスィの瞳がきらめくと、彼女の背後に大きな魔法陣が描き出された。

それは陰と陽とを現す白と黒の紋様となって、パルスィ自身よりも大きく広がっていく。

霊夢はにやりと嫌らしい笑みを浮かべた。

「どう？ 私の本気を見て怖気づいたかしら？」

「ええ、ホント。どっかの？の言葉^{バカ}を借りるなら、私ってば天才ね」
「負け惜しみのつもりかしら？ ふふ、それじゃ終わりよ。妬符『グリーンアイドモ』」

パルスィが高らかに右手を掲げたその瞬間、霊夢が周囲に散らした符が光り輝く。

そして、唱えた。

「スキありじゃあ！ 霊符『夢想封印 雪月花』！」

符は光の刃となって、一気にパルスィへと直進していく。

詠唱中で無防備な彼女に防ぐ術などありはしない。

全弾命中した彼女は断末魔の叫びを上げる間もなくキリモミ回転しながら地の底へと落ちていった。

「ひ……必殺技の最中は攻撃しちやいけないってルール知らないの……？」

「それは特撮ヒーローの話。ここは幻想郷」

「ね、妬ましい……がく」

気を失ったパルスィを蹴っ飛ばして橋の下奈落へと叩き落とし、
霊夢はふうとため息ついた。

「めんどくさいのも片付いた。行くわよ桜……桜？」

元いた場所に桜の姿は無かった。
周囲を見回してみるが、見つからない。

「……まいったわね。ひとまず、地霊殿に向かってから考えましようか」

霊夢はふわりと飛ぶと、まっすぐ橋を越えていった。

第六話 アンダーブリッジの死闘（後書き）

地底の橋だからアンダーブリッジ。

べ、別にFFVの名曲とは関係ないよ!?

ホントだよ!?

そして、このお話を評価してくださった方、ありがとうございます。
閲覧者は相変わらず少ないですけど、それでも読んでくれている人のために、これからも頑張ります。

だから、もし何か変なところを見ついたり、ご意見があったら気軽に
お伝えください。

感想でも、もちろん直接メッセージを送っていただいてもけっこう
です。

それでは。

第七話 猫と主とティータイム

霊夢がしばらく飛んでいると、目の前に巨大な建造物が見えた。それは地下の陰湿な雰囲気には相応しくない西洋風の豪華な建物だった。

地霊殿。

灼熱地獄の跡地に蓋をするように建てられたとされる洋館。

主である古明地^{こめいじ}さとりとそのペット達とで、跡地から漏れる怨霊を管理している。

以前、霊夢が異変解決に赴いた時はそのペット達がいろいろやらかしていたが……

「……さすがにアイツらが何かするとは考えにくいし。とにかく行けばわかるか」

地霊殿の大きな門を叩くと、門は誰の手も借りずに勝手に開いた。

そのまま進んでいくと、大きな庭に出る。

地下だというのにやけに緑が多い。

見事に手入れされた木々と、さり気なく飾られた大理石の彫刻やら石像やら。

「こんなものに金かけるヒマがあるならちったあ賽銭箱にいれなさいっての」

文句をつぶやきながら霊夢は綺麗に整備された道を歩き、本館へと足を踏み入れる。

内装も外観同様、西洋風のアンティークで飾られていた。

絨毯の敷かれた廊下を道なりに歩き、適当な部屋を開け放つ。

「……ここじゃない、か」

ドアを閉めて振り返ると、足元に気配を感じて視線を落とした。

「お」

そこには尻尾を揺らす真っ黒な猫が霊夢を見上げていた。

不思議なことに、この黒猫の尻尾は二つ揺れていた。

霊夢がしばらく見つめていると、黒猫は脱兎の勢いで走りだした。

「アイツを追いかければさとのトコまで行けそうね」

霊夢は少しだけ力を使い、ふわりと体を浮かせた。

いちいち走るのもめんどくさい。

そのまま黒猫の後を追いかけた。

黒猫は長い廊下を右に左に、時折階段をびよんびよん跳ねたりしながらどんどん加速していく。

それは普通の猫では考えられないような速さだった。

霊夢も負けず劣らずな速さで追いかけていると、やがて黒猫は洋館の一室へと逃げ込んだ。

恐らく、あの部屋にさとりがいるはず。

部屋の前で一度着地して、一応身なりを整えてから部屋に入る。

どうやら部屋は書斎らしく、見上げるほど大きな棚が左右にそびえていた。

小さな図書館と言ってもいいかもしれない。

そして、書斎の中央に位置する机に先ほどの黒猫がびよん、と飛び乗った。

その奥には、薄いピンク色の髪の少女が何やら本を読んでいる。

「……招待した覚えはないのだけれど？」

「そんなことどうでもいいの。いくつか質問していいかしら？」

少女はページをめくりながらどうぞ、と促した。

「まず最初に、この辺りで女の子を見なかった？ 私と同じ巫女服の女の子よ」

「……いえ、私は見てないわね。お隣、あなたは？」

机の上の黒猫が飛んで空中で回転するとぼふん、という音とともに少女の姿へと変身した。

「んにゃ、あたいも知らんね。さっきまでお昼寝してたんだし」

赤いおさげ髪を揺らしながらお隣は答えた。

「はあ……いったいどこ行ったのかしら桜ったら」

「その人の件で、私を訊ねたようですね」

さとりは本を閉じて霊夢に向かいあうと瞳を細めた。

「心が読めるってのも便利なもんね。台詞が少なくなっただわ」

「今の言葉、別の誰かさんの意思を感じるのだけれど……？」

「で、心が読めているのならわかるわよね？」

「……それぐらいなら別に構わないわ。ちょうど退屈していたところだし、ついでに彼女を探して差し上げましょうか」

「助かるわ」

瞳を閉じて意識を集中させるさとり。

しばらくして瞳を開くと、何故か口元に微かな笑みを浮かべた。

「なに？ 見つかったの？」

「いえ。そういうわけではないのだけれど……お隣、頼めるかしら？」

「うい、さとり様。何を頼むの？」

「そろそろ午後のティータイムだから、食堂で支度をしてちょうだい。ちゃんと空も呼んでちょうだいね」

「ていーたいむ？ 桜を探してくれてるんじゃない？」

「あーい！」

霊夢の言葉を遮るようにしてお隣の元気良い返事が響く。

そしてお隣はふたたび猫に戻ると、あっという間に書斎を出ていった。

「霊夢、あなたもどうかしら？」

「タダならもちろん。で、桜は」

さとりは席を立つと、静かに霊夢の横を通り過ぎようとして、

「行けばわかるわ。それと、彼女はもうこの地霊殿の中にいるみたいよ」

「はあ……？」

そう言い残すと霊夢を残して部屋を出ていった。

「もう地霊殿の中にいる？ 先に向かったってこと？ 場所も知らないはずなのに……？」

いまいち納得がいかなかったが、とりあえずさとの後を追いかけた。

第七話 猫と主とティータイム（後書き）

今日は特になし。

読者には毎日感謝！

俺ももっと上手にならないと……；

第八話 能力の解放

さとの後ろをついて歩いていると、やがて開けた場所に出た。いったい何人まで席に付けるのかわからないぐらい長い大きなテーブル。

椅子は……数えようとして途中で止めた。

少なくとも、今ここにいる人数より遥かに多い。むしろ多すぎるぐらいだ。

「で、お茶まだー？」

「テーブルに肘をつきながら叫ばないでちょうだい。すぐに用意するから」

しばらくすると、お隣が銀のトレイにポットと人数分のカップを乗せて歩いてきた。

さとりがポットを受け取ると、一番最初に霊夢のカップに注いだ。

「……この紅茶、花の香りがするわ」

「ローズヒップティーよ。あなたには少しハーブの香りが強すぎるかしら？」

「そう。この香りはハーブなの」

とりあえず一口つける。

特別味わうわけもなく霊夢は適当に飲み干してカップを置いた。

「それで、こんなお茶会なんぞ開いてどういうつもり？」

「もうすぐ皆が集まるわ。その時に分かるでしょ」

「みんなって……」

今この場には、霊夢とさとりと、そのペットであるお燐のみ。だっ広い食堂の真ん中でポツンとお茶を飲んでいるだけ。

みんなって、いつ来るのかしら。

欠伸をしながら霊夢がテーブルに突っ伏していると、どこからか慌ただしい羽音が聞こえてきた。

「さとり様ー！ー！！」

「あ、おうだ」

お燐がその声に反応してドアを開けると、彗星みたいな勢いで何かが突っ込んできた。

派手に壁に激突したその何かはすぐさま立ち上がり、さとりの方へ同じような勢いで飛びこんでいった。

「もう少し落ち着きなさいお空。そんな勢いのまま飛んでいたら危ないでしょう？」

「へへへ。ごめんなさい」

飛びこんできたのはさとりにじゃれる少女だった。

声はどこか大人びた声音をしているのに、言動はまるで子供のようだった。

容姿だって、黙っていれば美人の部類に入りそうなほど綺麗な容姿なのに。

「それで、全員そろったじゃない。桜はいないわよ？」

「あら、彼女ならもうそこにいるじゃない」

「へ？ 何言ってるのかし……ッ！」

さとりが霊夢の真後ろを指差すと、そこにはいつの間にか車椅子に乗った桜がちゃんと現れていた。

「あ！ 霊夢やっと思つて痛あ！？」

「勝手に動くんじゃないの！ 探すの面倒でしょ！」

怒鳴り声とゲンコツのコンビネーション。

桜は頭を押さえながら涙目でしゃがみ込んだ。

「ひ、ひどい……そ、そもそも突然戦いだす霊夢が悪いでしょ！？」
「あの場所でジツと出来なかったアンタが悪いの！ どこ行つてたの！」

「う……そ、それがその、変わった女の子に懷かれちゃって」

「変わった女の子……？」

桜の周りには誰もいない。

とりあえずもう一発殴ろうかと右手を振り上げた時、

「おねーさん！」

「うわ！ また不意打ち！？」

桜の背後から突然少女が飛びだして抱きついてきた。

「変わった女の子って、こいし？」

「ん？ あなた誰？」

「あなたも一応戦ったことあるでしょ。博麗霊夢よ」

「……ああ、貧乏巫女さん？」

「おい姉。いったい何を吹き込んだ？」

「そんなことよりこいし。そろそろ離れなさい？」

こいしと呼ばれた少女はいやいやと首を横に振ってさらに強く桜に抱きついた。

「こ、こいちゃん……?」

「だって、このおねーさんイイ匂いするんだもん。もっとくっついていたいのに」

「さっきからそう言ってるけど、そんな匂いなんかしないよ……?」

「イイ匂い……なるほど」

「な、なんですか……?」

さとりはゆつくりと桜の前まで近寄ると、桜の右手をそっと握りしめた。

「……?」

「ふふ。そんなに怯えないで。気を楽にして」

ほのかな光が右手に集まると、さとりは瞳を閉じた。

桜の意識を、優しくそっと読みとる。

光はだんだんと弱くなって、やがて完全に消える。

「あ、あの……今何を? それにあなたはいったい……?」

「ええ。わかってます。自己紹介はちゃんとしますから、まずは落ち着いて?」

「……!?!? 心が、読まれてる?」

「……そうね。怖いと思うのは当然ね」

「ッ!」

思わず桜はさとりを突き放して後ずさった。

「まったく。そっちこそ礼儀がなってないじゃない。いきなり触れて心を読んだら桜を怖がらせるだけでしょ」

「……そうね。少し配慮が足らなかったわ……ごめんなさい」

「その、霊夢この人たちは……」

「心配しなくてもいいわ。とりあえず人畜無害よ」

「人はともかく、畜は余計じゃないかしら？」

不安げな表情の桜をかばうように前へ出ると、霊夢はさとりで目で促した。

「……私は、古明地さとり。この地霊殿でペットたちと暮らしているの」

すると、さとの横にお隣とお空が寄ってきて簡単に会釈した。

「こちらが」

さとりが右手で示したのは、ダークグリーンのワンピースを着た赤毛の少女。

「かえんびよりん火焰描燐だよ。気軽に隣って呼んでね！」

「そしてこっちが」

左手で示した、長い髪を揺らしながら天真爛漫に微笑む少女。

「れいじうつほ霊烏路空！ うっほって呼ばれるの嫌いだから、おくうって呼んで！」

「それと、私の妹の」

桜の真横の銀の髪の少女を指差して、

「古明地こいし！ って、おねーさんにはさっき自己紹介したけど

ねー」

「あ、天春桜です。その……怖いってわけではなくてあの……」
「気を遣ってくれているのかしら？ いいのよ。気にしないで」
「……すいません」

「で、挨拶の済んだところで、私の本題に入ってもいいかしら？」
「霊夢の本題……そういえば、霊夢はどうしてここに私を？ 私の調査がどうか……」

「紫が言ってたでしょう？ アンタには能力チカラがあるって。それをさ
とりに調べてもらうためにここに来たのよ」

「能力って？」

「ここに生きる人や妖怪には、特別な力があるのはご存じかしら？」

さとの問いかけに、桜は首を横に振った。

「例えば、霊夢は『空を飛ぶ能力』の持ち主。そして私は『心を読み取る能力』を持っているの。こんな感じに、幻想郷では何かしらの能力を持つことがあるの」

「へえ……こいしちゃんも？」

「うん。私も『無意識を操る能力』を持ってるの」

「無意識……」

桜はこいしと会った時のことを思い出した。

どうやら無意識のうちに、私はこいしに抱きつかれたらしい。

「でも、それって一部の人とか妖怪だけ……でしょ？ 私にそんな能力があるとはとても思えないのだけど……」

「それは、あなたがその能力に目覚めていないだけです。今、あなたの能力は半分眠っている状態のようです」

「眠ってる……?」

そっと胸に手を当ててみる。

こんな自分の中に、何か能力があるというのだろうか。
とても信じられない。

「で、桜の能力って何なの?」

「お、教えてください!」

「ええ。教えます。桜さんの能力、それは……」
「それは?」

一呼吸おいて、さとりは口を開いた。
思わず桜もごくりと唾を飲む。

「桜さんの能力は『香りを操る能力』」

「……香り?」

首をかしげる桜。

いまいち、ピンとこない能力だと思った。

「ただ、彼女が完全にコントロール出来ないからどんな効果があるかは分からないわ。覚醒していない能力まで見透かせるほど、この眼は万能じゃないの」

「眼って……ッ!??」

すると、さとりの衣服からするりともう一つ眼が現れて桜を見つめてきた。

「め、めめめ眼が三つ!? え? 何? 何なの!??」
「そういう妖怪です。この眼で心を読み取るの」

第八話 能力の解放（後書き）

お気に入りユーザー登録してくださった方々、ありがとうございます。

閲覧者数が減ってちょっと落ち込んでたんですけど、ちょっと元気が出ました。

第九話 桜舞う茜

「で、能力も分かったとこで、次は永遠亭へ向かいましょうか」

「えいえんてい……？ それって食堂か何か？」

「……そりゃまあ食べ物はあるでしょうけど違うわ。簡単に言うと……そうね、病院といったところかしら」

「病院……」

地霊殿を出発して、今現在二人は神社の麓にある人里にいた。

霊夢が一度休憩しようかと提案したため、茶屋でのんびり茶をすすっている。

店主に桜のことを聞かれたが、霊夢は知り合いだと押し通した。

「その足じゃ不便でしょ？ その医者者は凄腕でね。何でも治せる医者なのよ」

「まさかあ。いくらこの世界の人が凄いからって、この足まで治せるわけないよ」

「絶対治る。断言出来るわ」

空の湯のみを置いて霊夢は立ち上がる。

勘定を払い、桜の車椅子を押して歩きだした。

日は西に沈みかけ、里を茜色に染めていく。

「けど、さすがに今日はもう帰りましょうか。夜になったら妖怪が活発になって襲ってくるかもしれないし」

「う……うん。わかった」

妖怪が霊夢を襲うことなどないが、怯える桜を見て霊夢はこっそり笑う。

途中、桜のひざの上に花びらがふわりと落ちてきた。

薄い桃色をしたサクラの花びらだった。

見上げると、薄く色づいたサクラの木が風に揺らいでいた。

「あら、もう咲いていたの……っても、まだ五分咲きぐらいじゃない」

霊夢の言ったとおり、サクラの花は全てが満開ではなく所々つぼみがあったり葉桜のままだったり、完全に開花している様子ではなかった。

そんなサクラの木を見上げながら、

「霊夢はサクラ好きなの？」

「ええ。博麗神社だね、サクラが開く春にいろんな人や妖怪を集めて宴会をするの」

「宴会？ お酒飲んだり騒いだりする宴会？」

「そ。でも準備するのは決まって私だけなのよねえ……そのくせ、来るやつらは好き放題騒いで帰るだけ」

「へえ……でも、なんだか楽しそう」

「そうだ、今年はアンタも出なさいよ。妖怪と騒ぐのもけっこう楽しいわよ？」

「私も出てもいいの？」

「もちろん、全然かまわないわ。むしろ歓迎する」

「そっか……うん、ありがと」

「霊夢って、けっこう良い人だね」

「ま、まあね」

桜が振り返ってみると、霊夢はそっぽ向きながら歩いていた。夕日に照らされているせいか、頬が少し紅かった。

階段を飛んで神社の鳥居をくぐる。

丘の上からまっすぐ差し込む夕日が眩しい。

「少し、外に居てもいいかな」

「ええ。私は中で食事の支度でもしてるわ。出来たら迎えに行くから」

「いいよ。自分で行けるから呼ぶだけで」

「……そ、わかった」

桜は丘の上まで自力で上ると、茜色に染まった幻想郷を眺めた。

黄昏時はいつも暗くなるはずなのに、今日はそんなこと全然なかった。

「そういえば、誰かと出かけるってのも久々だったっけ。……なんだかんだで結構楽しんでるんだ、私」

ずいぶんと奇想天外な世界だが、これはこれで面白い。

少なくとも、あの病院に比べたら雲泥の差だ。

「……ホントに夢じゃないのかな。空を飛んだり、いろんな人……いや、妖怪に会ったり。すごく楽しい。こんなの初めてだな」

夕日に微笑む桜。

もう少し、この場所に居てもいいかもしれない。

心の中でそう思っていると後ろから霊夢の声が聞こえてきた。

第九話 桜舞う茜（後書き）

第一章終了。

……ふと、思ったのですがキャラの設定とか書いたほうが良いのでしょうか？

他の作品を読んでいると、一部はキャラ紹介のページなんかあるんですけど……

どうしよ、読者さんから要望があったら書こうか。

第十話 迷いの竹林

次の日の朝。

桜と霊夢は昨日話していた永遠亭へと出発した。

場所は人里から少し離れた場所にある竹林の中だと、空の上で霊夢が話していた。

「変な奴らもいるけど、あの医者のお腕はたしかよ。足もあつという間に治るわ」

「ほ、ホントかな……」

正直、桜は半信半疑だった。

そんな名医なら里にいれば大活躍だろうに、どうして竹林の中に住んでいるのだろうか。

もしかしてとても人目に出られないような恐ろしい外見をしているとか？

それとも、人に見られると消えてしまうとか？

「変なコト考えてないでしょうね？ 心配ないわよ。もうすぐだから」

やがて、目的地の竹林が見えてきた。

遠くから見ているとただの森にしか見えなかったのだが、近くで見ると何とも迫力がある。

天へと伸びる竹の一本一本がとても逞しく天へと伸びている。

うっそうと茂る竹林は一步でも入ったら迷って帰れなくなりそうだ。

林の向こうには人の気配などまるで感じられない。

こんな場所に本当に誰か住んでいるのだろうか。

「さて、早速奥へと進みたいけど……」

「けど？ 何か問題でもあるの？」

霊夢は顔を少ししかめながら、竹林を指差した。

「この竹林は少し面倒な結界が張ってあってね。普通に入ると迷って出られなくなるのよ」

「う……じ、じゃあ空から行くとか？」

「無理。だから、専門の案内人ガイドを探さないといけないのよ」

「案内人？」

「……ま、めんどくさいし、入りましようか」

「ちよっとー！？ 今入ったら迷って出られなくなるって」

「いいのいいの。行くわよ」

慌てふためく桜を無視して竹林へと進む霊夢。

車椅子はガタガタと揺れながら不安定な道を進んでいく。

時折段差で車椅子が跳ねて桜が上下に揺れる。

「あた！ いた！ ちよっと、霊夢ストップ！？」

「またあ？ しょうがないわねえ……」

そのせいで、何度も休憩を取りながらのろのろと進んでいく。

気が付けば、もう入り口がどっちだったか分からない。

霊夢に訊いても明後日の方向を指差すだけでまるで分からない。

桜は一人、途方に暮れていた。

「完全に迷ってる……」

「そうでもないわよ。何とかなるから信じてちょうだい」

自信ありげな霊夢の言葉に桜は渋々うなづく。

霊夢はそろそろかしら、と小さくつぶやいた。
すると、近くの茂みがガサガサと音を立てて揺れた。
思わず身構える桜。

「お？ 誰かと思えば霊夢じゃないか」

茂みから出てきたのは紅いもんぺ姿の少女だった。

腰よりも長く伸びた白銀の髪を揺らしながら、深紅の瞳は霊夢を一瞥してから桜へと動かし、

「……そいつはなんだ？ さっきからソイツから妙な匂いをするんだが」

「へ？ 私？ 霊夢、ホントにそんな匂いするの？」

「ええ、前より少し強いかしら」

「花の……匂いか？ この竹林に似合わないような甘ったるい匂いがしたから来たんだが」

少女は少し怪訝そうに顔をしかめていた。

しかし、この少女はいったい何者なのだろうか。

桜が不思議そうに見つめていると、霊夢が前に出て、

「妹^{もへう}紅、永遠亭まで案内してもらえないかしら？ ちょっと用事があるのだけれど」

「あん？ 永遠亭に用事って……そいつか」

「ええ。頼めないかしら？」

「……………」

妹紅と呼ばれた少女は少し考えるようにあごに手を当て、やがて口を開いた。

「まあ、いいだろ。どのみちアタシの案内がないとここから外へ出ることも儘すくならないからな」

「助かるわ。……桜、アイツは藤原妹紅ふじわらのもこうって言って、この竹林の案内人みたいなものよ」

妹紅は少し気取ったふうに腰に手を当て桜を見据えた。

「妹紅もこうだ。……別にそんな怯える必要はないぞ？」

「す、すいません。えと、天春桜です」

「しかし車椅子の人間なんて初めて見たな……病か、それとも怪我か？」

「どちらかといえば怪我ですけど……」

「ふむ。なら私が運んでやろうか。この辺りの道は険しいし危険もあるだろう」

「へ？ 運ぶって……っわ!？」

すると妹紅は事もなげに桜ごと車椅子を軽々持ち上げた。

「す、すごお……あなたも妖怪なんですか？」

「ん？ いや私は人間だ。ただの健康マニアな焼き鳥屋さ」

「……幻想郷の焼き鳥屋ってすごいな」

「鵜呑みにするのねアンタ」

「ところで霊夢、コイツはいったい何なんだ？」

「私の知り合いの巫女見習い……ってとこよ」

「だからこんな恰好してんのか」

「す、好きで着てんじゃないの!」

桜は車椅子ごと担がれて竹林を進む。

さっきまでは行けども行けども竹が生い茂るだけだった道のはずなのに、いつの間にか人の手が加えられて整備された石の道が見えて

きた。

そこまで来ると妹紅は桜を降ろし、そのまま押してくれた。

「あ、あの。ここからなら自分で」

「なに、遠慮するな。ついでだ」

桜は申し訳ない気持ちになって、ちょっとだけ下を向いた。

やがて石の道の先に古びた屋敷が見えてきた。

竹林の中にぽつんと建つその屋敷は、どことなく神秘的な雰囲気
が漂っている。

隠れ里、という言葉がぴったりだ。

「ありがと妹紅。おかげで助かったわ。ここまででいいわ」

「いや、帰りも案内が必要だろうから最後まで付き合う。どの道、
ここには用がある」

何故か妹紅は両手をバキバキ鳴らしながら霊夢に返した。
そして三人は永遠亭の門をくぐった。

第十話 迷いの竹林（後書き）

第二章、開始。

キャラ紹介等は現在考え中。

書くかもしれないし、書かないかもしれないし。

評価、お気に入り登録してくださった方々ありがとうございます。
すごく嬉しいです♪

第十一話 隠れ里の姫君

「誰かー？ いないかしら？ 入るわよー？」

「普通入りながら言うもんじゃないと思うんだけどなあ……」

誰の許可も無いのに、ずけずけと勝手に屋敷の中へと上がっていく
霊夢。

桜は車椅子なので上がるのはさすがにはばかった。

このまま上がったら車輪で床を汚してしまう。

とりあえず、妹紅と一緒に玄関で待機していた。

しばらくすると霊夢が戻ってきて、

「おかしいわね。いつもなら誰かいるはずなんだけど……」

「庭から回ってみようか。それにこの子と一緒にじゃないと意味ない
だろ」

「そうね……っしょっと」

玄関を出て右手に回ると、そこには趣のある庭園が広がっていた。

「うわあ、すごいなあ……」

綺麗に揃えられた木々、奥の池では鹿威ししおどしが小気味のいい音を響か
せている。

清涼感を感じさせる庭園だが、そこでも相変わらず誰一人として見
当たらなかった。

ただ、妹紅だけはある部屋をにらみつけていた。

「綺麗な庭なのに、誰もいないんだね。庭師さんとかいても不思議
じゃないのに」

「……居留守を使うつもりか、輝夜」

「かぐや？」

「……何よ。また懲りずに来たわけ？」

庭に面していた一室が突然開いた。

奥には、十二単のような優雅な衣装を身に付けた少女が座していた。座ったままこちらを一瞥した後、気だるそうにちらと妹紅に視線を動かした。

「何度来るのもいいけど、いい加減飽きない？ 私はもうそろそろ飽きてきたのだけれど」

「貴様のことなど知ったことか。いいから出てこい。決着をつけるぞ」

さっきまでの優しかった妹紅は何処へやら。

少女を見つけた途端に態度が急変し、二人は火花を散らしながら対峙している。

「えっと、あの人は誰？」

「蓬萊山輝夜ほうらいさんかくや。妹紅の永遠のライバル……らしいわよ。私にとってはどうでもいいのだけど」

「ふうん……」

語気を荒げながら吠える妹紅。

少女はてんで相手しようともせずに妹紅から目を反らす。

「出てこいと言っているだろう！ それとも怖気づいたのか？」

「失礼ね。誰が貴女なんかに怖気づくのよ。……それより、貴女だけならともかくどうしてここに霊夢と人間がいるのかしら？」

今度は視線を桜の方へと向けた少女。
桜を上から下へと見つめた後、怪訝そうな顔をして、

「……何者？ さっきから妙な気配がしていたとは思ってたけど、
貴女かしら」

「この子は桜。ちょっと頼みがあって永琳に会いたいんだけど、何
処にいるのかしら？」

「さっき薬草がどうか言ってたから出かけたんじゃないかしら。
……ちよつと、貴女」

「は、はい!？」

突然指を差されてドキッ、となった桜。

輝夜は指をちよいちよいと動かした。

こちらへ来い、という意味だろうか。

車椅子で行ける場所まで近づくと、輝夜は少し身を乗り出して、

「何だか、良い香りがするわ。香水……かしら。私好みの上品な香
りだわ」

「……霊夢、私ってそんなに匂うの？」

何だか恥ずかしくなって、全身を確認してしまう。

特別強い香りはない。

強いて言えば、霊夢のお下がりだからかちよつとカビ臭い気がする
程度か。

「おい、失礼だろ。ちったあお前から動け」

「うるさいわね。貴女も彼女を見習って香水の一つでもつけたらど
う？ 今の貴女からは……なんだか田舎臭い匂いがするわ」

「んだと……!？」

妹紅の背後で怒りの炎が燃え上がる。
それはまるで本物の炎のように煌々と燃え上がり翼のように広がって、

「って!?! も、妹紅さんの背中が燃えてる!?!」

「ちょっと待った! 桜の至近距離で力を発動するのは止めなさい!」

「そうよ? 客人の目の前だというのはしたないわねえ……?」
「だ、誰のせいだと思って!?!」

「ハイハイ。そこまです二人とも」

静かな声が響いて、桜は思わず振り返る。

そこには大人っぽい女性が微笑みながら立っていた。

「そんな調子で、これから毎日永遠亭を燃やす気ですか? それはそれで困るのですけれど」

「……永琳か」

「この人が……?」

すらりとした長身に、揺れる艶やかな銀の髪。

永琳と呼ばれた女性は笑んだまま桜を一瞥すると、軽く会釈した。

「えと、お客さんかしら?」

「そう、客人よ。とりあえず茶の一杯でも出してちょうだい」

「れ、霊夢! 客の態度じゃないよソレ!」

「かまいませんよ。そうね……とりあえず、貴女は妹紅にでも運んでもらおうかしら」

「……ああ。わかった」

「永琳、その子に私も興味あるからこの部屋でいいかしら」
「仕方ありませんね。では、そちらの部屋でお待ちください」

それでは、と残して永琳は玄関へと歩いていった。

「……綺麗で、優しそな人だね」

「んじゃ、ちよいと失礼するぞ」

「ん？ 妹紅さん何をつてひゃあ!？」

妹紅は今度は桜をひょいと持ち上げ、そのまま輝夜の部屋の中へと入っていった。

俗に言う『お姫様だっこ』の図。

「……不本意だが、一時休戦だ」

「はいはい。それじゃ座布団を……四枚あれば足りるかしら？」

「わざと私の分を省きやがったな!？」

「あの、私を抱っこしたままケンカしないで……」

妹紅の腕の中、桜は顔を真っ赤にしながらそれだけというのが精一杯だった。

第十一話 隠れ里の姫君（後書き）

きっちり9時更新！

いつも読んでくれてる方々ありがとうございます。

……くどいぐらい言ってるけど、感謝してるのは事実です。

第十二話 香る永遠亭

「さて、落ち着いたところで自己紹介をしましょうか。まずは私、やごころえいりん八意永琳と申します」

「ど、どうも。天春桜……と申します」

永琳はキチンと正座してから一礼した。

それに釣られて思わず桜もかしこまって一礼。
何故だか緊張する。

真正面に座っている永琳は静かに微笑んでいた。
その笑みは桜が嫌う看護師のそれと似ているのだが、不思議と嫌悪感を感じなかった。

「次は私ね。ほうらいさんかぐや蓬莱山輝夜よ。ま、適当に呼んでちょうだい。それと、
その女は」

「私はとづくに名乗った。いちいち指を差すな」

「あらそう、ごめんなさいね。ふふ」

袖口を口元にあてて優雅に微笑んでみせる輝夜。
やってることは随分と意地悪いが、桜は永琳同様に一礼した。

「それで霊夢、永琳に頼みたいことがあるんでしょう？」

「私に出来ることであれば協力しますが」

「そうそう。コイツの足、治してもらえないかしら？」

霊夢が桜の足を指差す。

包帯に包まれたその両足を、永琳はじっと観察して、

「足、ですか？ 怪我でしょうか、それとも」

「事故でこうなったって言ってたわよね？」

「う、うん。両足とも動かないけど……」

永琳の手がそっと足に触れる。

感触は無いが、何だかくすぐったいような気持ちになる。

簡単な診察を終えた永琳は瞳を鋭く細めた。

「……えっと、どうかしたんですか？」

「貴女、幻想郷の者ではありませんね？」

「そ、それはその……」

横目で霊夢に助けを求める。

霊夢は観念したように一度ため息ついてから、

「ええ、そうよ。彼女は外の世界の住人。紫の気まぐれで厄介事に巻き込まれたの」

「紫……八雲紫ですか」

「そ。迷惑な話よ。私はひなたぼっこしてただけなのに」

「……結論を申しましょうか」

永琳は桜にではなく霊夢に向かいあった。

「足を治すことは出来ません」

「……ほら、やっぱ無理だって言ったじゃん霊夢」

ほんの少しがっかりしたが、それを見せないよう桜は微笑んだ。
しかし、霊夢は眉をひそめて永琳を見据えていた。

「……理由を聞きましょうか」

「彼女が外の世界の人間だからです」

「だから何？　それだけ？　別に関係無いじゃない」

ふと、桜は霊夢の語気が少し荒いような気がした。
何故だろう、目つきも心なしかいつもより鋭いような。

「霊夢、それは本当に彼女の為と思っているのですか？」

「……どういう意味よ」

「仮にここで彼女の足を治療したとしましょう。しかし、私の治療の効果があるのはこの幻想郷にいる間のみです。時が来て、彼女が元の世界に帰った時にまた不自由な思いをさせるおつもりですか？」

「そ、それは……」

返す言葉が浮かばず、霊夢は視線を泳がせた。

「アンタは……そんなの嫌よね。一瞬だけの自由だなんて」

「べ、別にそこまで重く考えなくてもいいよ。私は慣れてるから」

「でも……」

しかし、内心桜は複雑な気持ちだった。

この世界にいる間、仮初の自由を掴んで幸せを得ても、一たび帰ればあのショックをもう一度味わうことになる。

足の事実を知った時のあのショックをまた味わうのは……正直辛い。あの時だって、どれだけ泣いていたことか。

桜はなるべく感情を出さないようにしながら、

「治らないんならしょうがないよ。私は空を飛べるようになればそれでいいよ」

「なにそれ？」

「桜の夢よ。自由に空を飛びたいんですって」

「なら、私が飛ばしてやろうか？」

腕をぐるぐる回しながら妹紅が言った。

「け、けけけ結構です」

車椅子ごとぶん投げられそうな気がしたので桜は首を振った。

輝夜は不思議そうに桜を見つめる。

「せっかく能力があるのに空が飛べないってのは不便ね。永琳、そこちはどうにかならないの？」

「能力ですか？ そういえば、さっきから甘い香りがしているのは……貴女の能力なのですか？」

「そう……らしいんです。ただ、いまいち要領を得なくて」

「能力をコントロール出来ないみたいなの。いっつも香りが漂っているのよ」

霊夢がやれやれと言った感じでつぶやく。

正直、桜も何とかコントロールしたいのだが全く分からない。

「へえ……？ 袋にでも詰めて身に付けたいわ」

「わ、私は香り袋じゃないですよ！？」

「冗談よジョーダン。面白い子ねえ？」

「……お前が言うのと笑えない。本気でやりかねないからな」

「貴女を袋に詰めたら迷わず川に捨ててあげるけどね」

妹紅と輝夜のにらみ合いが再び始まる。

二人に挟まれてもの凄く気まずい桜はただただオロオロするだけだった。

ふと、桜はあることを考えた。

（こういう時、香りで和ませたり出来ないかな……）

試しに目をギュッと瞑ってイメージしてみる。
和む香り……和む香り……

……あれ、なんか焦げ臭いような。

「つて、うわ！？ 妹紅さんが全身火だるまに！？」

すると、桜の目の前で妹紅は炎の翼を広げ立ち上がった。
対抗するように、輝夜もまた立ち上がり火だるま状態の妹紅とらみ合う。

「もう我慢ならん！ 今すぐここでお前を消し炭にしてやる！！」
「出来るものならやってみなさいよ！ 返り討ちにしてやるんだから！！」

「お願いだから、外でやってちょうだい……」

こめかみに手を当てながら、永琳は呆れた様子で嘆息した。
その時、

「お師匠様ー？ もうお帰りですかー？」

間の抜けた声が聞こえてきて、桜も思わず振り向いた。

「あ。もしかしてお邪魔しちゃいましたか……？」

「いえ、かまいませんよウドンゲ」

「……ウドンゲ？」

戸の奥から現れたのはブレザー姿の普通の女の子だった。頭の上で揺れる白い耳を除けば、の話だった。

「……へ？ うさみみ？」

「あれえ？ お師匠様この方は？」

「お客様よ。貴女も挨拶して？」

「わかりました……コホン。初めましてお客様。私は鈴仙れいせんと申します」

少女は桜と向かいあうとペコリとお辞儀した。

ウサギのように真っ赤な目がとても印象的だった。

「れいせん？ でも今永琳さんはウドンゲって……？」

「それはお師匠様から頂いた名です。私自身はレイセンって名乗ってます」

「正式に言うと、鈴仙れいせん・優曇華院うどんげいん・イナバよ。俗に言うフルネームってとこね」

「ずいぶん長い名前なんですネ……あ、私は天春桜って言います」

「はい、どうも……あ、のんびり自己紹介してる場合じゃなかった。その、お師匠様あの」

「何ですか？ 少し急いでいるようですが……？」

「それが、その……」

少し間を置いてから、鈴仙は遠慮がちに口を開いた。

「……危篤状態の患者さんが、先生を呼んでるんです。それで、あの」

「わかりました。すぐ行きます」

永琳は立ち上がり鈴仙と一緒に部屋を出ようとして、一度桜に振り返った。

「すみません。この話はまた後で。すぐ戻ります」

「あ、あの危篤状態って」

それだけ残すと、どこかへと走って行ってしまった。

「……ここ、診療所としても機能しているの。少し前に人間の患者を受け持ったんだけど、どうにも限界みたいだったようね」

「私達には縁の無い話だが……やはり見ていて気持ちのいいものではないな」

「霊夢……」

「なんだか気まずいわね。帰る？」

「……………そうだね」

妹紅に運ばれ車椅子に乗り込む桜。

庭を進む途中、桜はどうしても気になって屋敷を振り返った。

「……行きましょう。案内頼むわよ」

「ああ。わかってる」

「……ねえ、霊夢」

「なに？」

「この能力、なにか役に立てないかな」

「は？ アンタなに言ってる」

霊夢を見上げる桜の瞳。

瞳の奥には、何か力になりたいという強い意思の光が見えた。

第十二話 香る永遠亭（後書き）

諸事情により、携帯から投稿しています。
コメント返信は後日で…

第十三話 手向けのかほり

「あ、お師匠様……」

布団のそばで、ピンク色のワンピースの少女が永琳を見上げた。

今にも泣き出しそうなほど、瞳に涙をいっぱい溜めながら視線を落とす。

その先には、痩せこけた老婆が静かに横たわっていた。

「お師匠様、薬効いてないんじゃないんですか!? この人全然良くならない……」

「これは……」

永琳は老婆の瞳を開いて確認する。

瞳孔は微かに動いている。

だが、ほとんど虚ろな瞳をしていた。

「確かに薬は効いているはずです。……しかし、どうやら彼女がそれを拒んでいるようです」

「どういう……、意味ですか」

「……死を、迎えようとしています」

赤い瞳が大きく見開かれる

ほとんど掴みかかるような勢いで永琳に叫んだ。

「ど、どうして!?! だってこのおばあちゃんは家の人に」

「彼女自身が、自分の体の限界を一番理解しているんですよ。こればかりは私にも」

「そんな……」

微かに上下する老婆の胸は今にも止まってしまいそうなほどに緩やかな動きをしていた。

「……お医者様」

かすれるような声が、老婆の口から発せられた。

しゃがれた声はますます弱々しく、耳を澄ませなければ聞こえないほど小さかった。

「ありがとうございます。……あの、子達には、悪いけど……私の旨、お伝え、ください」

「……ええ。承知しました」

寿命を迎える。

それは当り前のことで、誰がどうこう出来るものではない。

永遠の命というものを得てから、永琳は何度も死を見てきた。何度見ても、慣れるわけがない。

死というものは、やはり寂しく、悲しく、そして辛いものだ。

「……叶うのならば、また、あの花が、見たかった。今はもう、どんな香りだったか、忘れ……て……」

悔しくて、唇を噛みしめる。

どんな薬でも作れるというのに、それでも死は訪れてしまう。

医者として、いや、それでも目の前で患者が死んでしまうのは誰であつたって辛いものだ。

老婆は一筋の涙を流してから、やがて瞳を閉じた。

「永琳、いいかしら」

「……霊夢？」

ふと、縁側から霊夢と桜が現れた。

二人とも真剣な眼差しで永琳を見据えている。

「……すいませんが、今はお引き取り願いませんか。今から、いろいろとやる必要がありますので」

「ええ。だけど、桜が、ね」

おずおずといった感じで桜が前へと進む。

永琳を一瞥すると、桜は無言のまま祈るように瞳を閉じ、両手を胸に当てた。

「どうしてもって言うから……せめて黙祷だけでも、ね」

「そうですか。ありがとうございます……え？」

突然、辺り一面に強い香りが漂い始めた。

「なに、この香り……!？」

以前に霊夢が感じた香りとは違うその香り。

甘くて、甘すぎて、とろけそうなこの香りはいったい……。その強い香りに、老婆は瞳を閉じたまま微かに声を上げた。

「……ああ、この、香りは」

「キンモクセイ。花言葉は『初恋』。おばあちゃん、素敵な恋をしていたのね」

「ええ……ええ……あ、りがとう、お医者様。最期に、このような、奇跡を……」

「わ、私は何も……」

そして、老婆は微かな力を振り絞って、桜の方へゆっくりと首を動かした。

老婆と目が合うと、桜は優しく笑みを浮かべた。

その表情は慈愛に満ちた聖母のようで、普段の桜とはまるで別人だった。

「ありがと……う。懐かしい、香りだった……わ……」

「……さよなら。おばあちゃん」

そして老婆は瞳を閉じた。

その表情はとても穏やかで、小さな笑みを浮かべていた。

「い、今のアンタの能力なの？　なんだ、ちゃんとコントロール出来てんじゃない……桜？」

ポーっとしている桜に霊夢が後ろから手を伸ばす。

すると、その手が触れるよりも先に、桜は地面へと崩れ落ちてしまった。

「さ、桜！？　どうしたの？　桜！」

「霊夢、ひとまず彼女をこちらに。すぐに用意をします。てゐ。空いてる部屋に布団を。それから白湯さゆも用意して。ウドンは私の部屋から気つけ薬を」

「「わ、わかりました！」」

そして二人は慌ただしく部屋を出ていった。

残された永琳は信じられないといった表情を浮かべて、

「彼女はいたい……」

「わ、わからないわよそんなこと」

一番驚いていたのは他ならぬ霊夢だった。

目の前の少女が突然覚醒して、見たことも無い能力を使って倒れた。
どう考えても異常。

本当に彼女はいたい何者なのだろうか……

「とにかく、貴女も上がってください」

「わかってるわよ」

妹紅を呼び付け桜を運ばせると、二人は部屋へと急いだ。

第十三話 手向けのかほり（後書き）

昨日は友人宅に泊まりに行っていました。

ただ、ネット環境がないものでしたから仕方なく携帯でログインして簡単な誤字訂正程度をすませて投稿しました。
枕が変わるとちょっと寝付きが悪くなりますね。

そして、今回初めて『死』に触れました。

まあ、そこまで深い描写ではないのですが……

第十四話 眠るカミサマ

「……とりあえず、命に別条はないみたいです」

「そう。よかった……」

永琳の言葉に、ホッと胸を撫で下ろす霊夢。

別室へと移動した桜は静かに眠っていた。

今は先ほどのような強い香りはしていない。

ただ規則正しい寝息を立てながら、桜は眠っているだけだった。

「お師匠様、コイツは誰？」

「桜さんという人間よ」

「人間……？」

てゐは首をかしげた。

それはそうだろう。

ただの人間が突然キンモクセイの香りを漂わせながら突然倒れたら
普通誰でも怪しむ。

てゐは時々桜の頬を突っついたりしながら、何度も何度も顔を覗き
込んだ。

「てゐ。この子は今休んでるんだからちよつかいだすの止めなよ」

「突っついたらまたイイ匂いするんじゃないかなあってあたッ!？」

永琳に軽くはたかれた。

「霊夢、申し訳ありませんが少しの間留守を頼めないでしょうか。
今から親族の方に報せに行かなければなりませんので」

「……少しぐらいならかまわないわ」

「すみません。それでは、すぐに戻ってきますので」

永琳は鈴仙とてゐを連れて部屋を出ていった。
そのまま、霊夢と桜だけが残される。
黙ったまま、鹿威しの音だけが虚しく響く。

「……コイツ、本当に何者なのかしら」

外見は普通の人間そのもの。

足は動かないくせに、何故か不思議な香りを漂わせていて、突然覚醒して。

とても普通の人間とは思えなかった。

もしかして桜は……

「もしかして妖怪？ まさかねえ？ そもそも外の世界に妖怪がいるわけないし。足の動かない妖怪なんて全然脅威じゃないし」

ふと、霊夢の脳裏にある人物が浮かんだ。

信仰を求めこの幻想郷へ訪れた一人の巫女と二人の神。

そういえば、アイツらは外の世界から来たんだっけ。

まさか桜は……

「コイツが神様だって？ ……ないない。いったいどこに香りを司る神様なんているのよ」

もう一度桜の寝顔を見つめる。

相変わらず穏やかな表情で眠っている。

時々、ううんと唸ったりすることもあるが。

そんな桜を、霊夢は頬杖つきながら見ていた。

呑気な寝顔ね。

夢でも見てるのかしら……ッ？

気配を感じて視線を巡らせる。

この感じ、どこからか見られているような……

「……紫？」

「あら、ばれちゃった」

天井の隅から紫の顔が逆さまに降ってきた。

金の髪が重力に引かれだらりと流れる。

「いちいち器用な登場しないでちょうだい。で、何か用？」

「ふふふ。私は特に用は無いけど、あなたは私に訊きたいことがあるんじゃない？」

「む……」

凶星だった。

紫なら桜のことを知っているんじゃないかと霊夢は考えていた。

「……答えてくれるの？」

「ええ。いいわよ？」

紫は逆さまのままクスクス笑っている。

一度咳払いをしてから、霊夢は単刀直入に訊ねた。

「コイツ、何者なの？」

「その子は人間よ。けど、とある神様の生まれ変わり」

「神様の、生まれ変わり……？」

怪訝そうな顔になる霊夢に、紫は笑んだまま続けた。

「そ。といってもそんな大それた神ではないわ。力もそんな強くないし、信仰なんかとはほぼ無縁の神」

「無縁って……誰からも祀られない神だってこと？ そんな神本当にいるの？」

「ま、あまり目立つような神様じゃないから。とっても地味な神ね」

「……で、なんの神なのよ」

「そこまで訊いたら、後はだいたい察しがつくでしょ？」

霊夢が悩んでいるのを楽しんでいるかのように微笑む紫。
知っているのならすぐに教えてくれればいいのに。

「あの香りからして、花の神？」

「いいえ。ちよつと行き過ぎかしら？」

「もったいぶらずに教えなさいよ。アンタが言った方が早いじゃない」

「しょうがないわねえ……」

依然として逆さまのまま紫は口を開きかけて、

「盗み聞きするのはお行儀が悪いんじゃないかしら？」

霊夢の真後ろに向かって言った。

すると、襖を開いて永琳が現れた。

「あれ、永琳？ いつの間に」

「妙な気配がしたので戻ってみれば……やはり貴女でしたか」

「興味があるのならさっさと入ってきたらよかったのに。別に教えてあげるわよ」

紫はくるりと回って降りると、桜を挟んで霊夢たちと向かいあうような形で座した。

「で、桜の正体って？」

「桜ちゃんの正体は、香りを司る神よ」

「……か、神！？ てか、そんな神様ホントにいるの？」

ついさっき否定したばかりだ。

「八百万の神って言うでしょ？ それだけ多くの神がいれば、香りを司る神がいたっておかしくはないでしょ」

「ま、まあ……」

「しかし、それが彼女の足とどういう関係が？」

「あら、気づいてたの」

紫紺の瞳が嬉しそうに細まる。

「永琳、足って？ 桜の足は外の世界での事故が原因だっていったでしょ？」

「霊夢は、彼女の素足を見たんですか？」

「へ？ う、うんっと……」

いつぞや着替えを手伝った時は、足は包帯と何かに巻かれていたよな。

たしか、桜はギプスとか言ってたっけ……？

「見たことがないのですね。それでは」

「え？ ちよっ」

永琳は勝手に桜の足のギプスや包帯を取り外す。

あつという間に桜の素足が露わになる。

「え……？　どういふこと……？」

桜の足は雪のように白くなめらかで、事故の傷などどこにも無かった。

霊夢は何度も何度も見つめて首をかしげる。

「事故した足なんでしょ？　それなのに傷一つないって」

「足が動かないのは事故が原因ではなく、他に原因があるのですね」
すると、紫はほんの少しだけ顔を歪めた。

「それは、彼女の性^{さが}なのかもしれないわね。香りの元は植物。植物は大地に根を張り成長するもの……人間として生まれ変わった時、最初の内は足も機能していたのでしょうけど、目覚めが近づくにつれ不要になったって感じかしらね」

「最初からアンタは知ってたの？　コイツが神様の生まれ変わりだって」

「うーん、どうかしら。私はちょっと面白そうだなんて連れてきただけだし……」

「……それで、これからどうするのですか？　外の世界へ帰すのですか？　それとも」

「ああ、それはもう決まってるの。霊夢が桜ちゃんを自由に飛べるようにしたら、ってね」

「これから毎日神様相手に教えることが山ほど……うんざりするわ」
げんなりする霊夢に紫が微笑みかける。

「あら、いいじゃない。博麗神社で彼女を特訓させていれば、里にはこの子の香りが風で運ばれるでしょ？　そうしたら、神社に一杯参拝客が来て信仰もがっばり。そして空を飛べるようになったころには賽銭が大量よ？」

「素晴らしいアイデアね。早速コイツを叩き起こして特訓を開始しましょうか」

「えと、そういう稼ぎ方は巫女としてどうなのかと……」

永琳の苦笑いには目もくれず、霊夢は眠っている桜を担いだ。

「それじゃ永琳、世話になったわ。私は神社に戻るから」

それだけ言い残し襖を開け放つと、霊夢は空に向かって一直線に飛んでいった。

第十四話 眠るカミサマ（後書き）

少し短いですが二章終了です。

桜の正体はなんと神様だった！？

……と、ここで別件ですが、外伝を書こうかちよつと考えてます。
前作か、それともこの物語の外伝か悩んでますが、気が向いたら書きます。

リクエストなんかあったら絶対書きますw
でも、まだ悩んでいるのでどうなるか……

第十五話 特訓開始！

あなたは神様です。

突然そんなことを面と向かって言われたら、貴方ならどう思うだろうか？

そんなバカなことあるわけないだろ。

と、クールに返すのか。

新世界の神に！

と、野望たっぷりにリングをかじるのか。

それは各々の自由だが、桜は、

「……………」

絶句していた。

まるで石の像みたいに固まって霊夢を無言で見据えている。

「桜？ 訊いてる？ おーい？」

目の前で両手を振っても反応無し。

軽くはたいても反応無し。

髪を引っ張ったり、ほっぺたつねったりして、

「い、いひゃい！ なにするの！？」

「反応しなさいよ。説明しづらいでしょ」

そして、霊夢は永遠亭での出来事をもう一度説明した。

あの時、桜はまるで別人のような振る舞いをして、キンモクセイの香りを漂わせ、危篤状態の老婆の思い出を呼び覚ませた。

ただ、その後桜は気を失って倒れてしまい……

「……能力の時もそうだったけど、いまいちピンとこないよ。急に神様だとか言われたり、足は不要だから動かないだとか」

「でもホントのことなの。とりあえず信じなさい。そして早速特訓するのよ」

「え？ 特訓って……ああ」

ポンと手を叩いてうなづく。

そう、それは桜の夢のための特訓。

「空を飛ぶための特訓だね！」

「能力を操るための特訓よ！」

・・・

「……あれ？ 空じゃないの？」

「空を飛ぶために、まずはアンタの能力をコントロール出来るようにしないと。そのチカラで空を飛ぶんだから」

「へえ、そうなのか……」

うんうんとうなずきまくる霊夢。

実は心の中で賽銭のことしか考えていないなどと、桜は夢にも思わないだろう。

「それで、特訓って具体的にどんな特訓するの？」

「え？ え、ええっと……」

霊夢の頭の中は真っ白だった。

そんなこと今の今まで考えるのを忘れていた。

全身に嫌な汗が全身を駆け廻る。

「……もしかして、考えてない？」

「ば、バカ！ んなわけないでしょ！ ちょっとど忘れしただけよ！ えと……」

「それじゃ、私達が協力しようか」

縁側から少女の声がした。

この声、桜は聞き覚えがあった。

地霊殿へ行ったときに訊いたこの声の主は、

「あ、さとりさぶわっぷ！？」

「おねーさん！」

桜の真後ろからすごい勢いでこいしが抱きついてきた。

頬をスリスリ寄せながら、上目づかいに桜を見つめてくる。

「こ、こいしちゃん。いつの間に後ろに……って訊いても無意識のうちにつて答えるんだろうけど」

「玄関開いてたよ」

「おい姉。コイツ不法侵入で訴えるわ」

さとりは軽く会釈してみせてから、

「ごきげんよう霊夢。とりあえずお賽銭をいれてから玄関を訪ねただけれど誰も見当たらず」

「そういうことなら仕方ないわね。で、協力してくれるってのはなに？ アンタが外に出てくるなんて珍しいじゃない」

現金な霊夢に、さとりはため息混じりに答えた。

「こいしがあんまりにも彼女に会いたがるものだから仕方なく来たの。そしたら庭の方からあなたたちの話が聞こえてきたから、少しお手伝いをしようかと思って」

「でも、手伝いって具体的になにをするの？」

すると、さとりの第三の眼が現れ桜を見据えた。

大きな眼球に見据えられ、思わず体を強ばらせる。

「それ、地味に怖いんだけど……」

「少し我慢してください。私の能力を使って、まずは桜さんの能力を呼び覚ませようと思います」

「呼び覚ます……？」

首をかしげる桜。

能力を呼び覚ますとはどういう意味だろうか。

すると霊夢はなるほど、と小さくうなった。

「アンタ確か、トラウマを想起させることが出来たわね。つまりそれを応用して、桜の能力を自分が使って見せるつもりね」

「上手くいくかはわからないけど、試す価値はあるんじゃないかしら？」

「え？ え？ トラウマ？ 応用って……？」

何のことやらちんぷんかんぷんの桜は、ただただ頭の上に疑問符を浮かべるだけだった。

「桜さん。少しこちらを向いてくれる？」

「あ、うん」

言われるがままに桜は体を動かして第三の眼と目を合わせる。
さとりは静かに瞳を閉じると、全身に白いオーラを纏う。

「想起『リ・フونسルーヴニール』」

詠唱を終えるときとりと桜の体に淡い光が宿る。

すると、桜に宿った光だけがさとりの方へと吸い寄せられ、体内へと消えていった。

「え、今なにしたの？」

「たぶん、アンタの能力を読みとったのよ。いい？ さとりがアンタの能力を見せるから、どんなものか焼き付けておきなさいよ？」

「わ、わかった」

さとりは瞳を閉じたまま、微かにうなずきながらつぶやいた。

「……なるほど。ずいぶんと変わった能力ですね」

さとりは右手をまっすぐ桜に向けて指をパチン、と鳴らすとオレンジ色の光が火花のように弾ける。

すると、火花のような輝きから甘い香りが周囲に漂い始めた。

その香りは永遠亭で桜が使った香りとはほとんど一緒だったが、あの時と比べるとそれほど強い香りでは無かった。

「こ、これが私の能力……？」

「そう。桜さんの能力はこんな感じに、香りを自在に操ることが出来るのですよ」

「でも、少し香りが弱いわ。永遠亭で使った香りとは天と地ほどの差があるもの」

「それは……私にも分からないわ。私のこれは、あくまで能力を再現したに過ぎないのよ」

「でも、見たからって私が使えらってことじゃないよね？　どうやってコントロールするんだろ……？」

「ああ、これは簡単です。香りをイメージして、指を鳴らせば出来ますよ」

「へ？　そんなに簡単なの？　……よし、やってみる」

「私のことは信じないくせに、さとの言うことはあつという間に信じるの……」

「じんばーの差だよ、霊夢！」

「うっさいわ！」

桜はさとの真似をして、グッと指を構えてみる。

パチン、と軽い音がするとさとのそれと同一ような光が一瞬だけ弾けて周囲に広がる。

「あ……あれ、あっさり出来た」

「素質は元々あるようですので、少し訓練すればすぐにでもコントロール出来るようになりますよ」

「ほ、ホント？　……よし、頑張ってみる！」

「……………むう」

笑いあう二人を霊夢は顔をしかめながら心底面白くなさそうに見つめていた。

すると、こいしが霊夢の後ろから頬を突っついてきて、

「あれれ？　霊夢ってば、もしかしてヤキモチ？」

「ち、違うわよ！」

反論しながら頬を染める霊夢。
とりあえず、

「能力の練習はさとり任せるか。それじゃ、ちょっと出かけてくるわ」

そう言って、霊夢は立ち上がると神社を出て里へと向かった。

ふと気づくと、神社の方を何度か振り返っていた。

……本当は、ちょっと寂しいのかもしれない。

「素直になっちゃえばいいのにねー」

「んな!?!? こ、こいし!?!? なんでアンタがここに!?!?」

いつの間にか、こいしがニコニコしながら霊夢のそばをふわふわと飛んでいた。

「さあ? とりあえず、私は戻るねー?」

そしてそれだけ言うと、また神社の方へと飛んで行ってしまった。

「何なのよ、まったく……」

気を取り直して、霊夢は里へと向かって歩き出した。

第十五話 特訓開始！（後書き）

第三章開始！

お気に入りユーザー10人突破しました！

記念になにかやりたいけど……何やろう？

読者の考えたキャラを登場させる……みたいなの？

まあ、これもそのうち

第十六話 夕日を背に 『A』 桜&さとり

「そういえば、あなた神様なんですってね」

必死に指パッチンの練習をしている桜にさとりが話しかけた。

「ああ、うん。そうらしいね。でも私は全然自覚ないし意味もわからないしで混乱してるけどね」

「混乱……ですか。まあ、当然ですね」

そろそろ指が痛くなってきた。

桜は一度練習を止めてふうと息をつくとぼんやりと視線を上げた。

「でも、とりあえず楽しいよ」

「楽しい、ですか？」

「うん、楽しい」

日の傾きかけた空を見上げながら桜はぽつりぽつりと語りだした。

「病院にいた時は退屈だった。決まった範囲の中でしか生きれないってすごく窮屈で、すごく辛かった。でも、紫さんが私を連れ出してくれて、こんな素敵な世界に来て、霊夢やさとりさんみたいな人に会ったり。少し前の自分だったら考えられないような大冒険が出来るから。ホントはそれだけで十分幸せなのに、夢まで叶えられるかもしれないって……ちょっと幸せ者過ぎる気がしてさ」

「ふふ、本当に変わったお方。内心帰りたいと思いつつも、この状況を楽しんでいらっしゃるんですね」

「……そりゃあ、やっぱりお母さんとか親父オヤジとか心配だし」

「は、母上のことはお母さんなのに、父上の時は親父オヤジなんですね…

…」

「えへへ。でも、今頃心配してるんじゃないかな……急に病院どころか、世界から消えちゃったんだから。……やっぱ気になるよ」

「もし夢を叶えたら、元の世界に帰るのですか？」

「……それ、私の心を読めているのに質問するの？」

「直接、あなたの口から聞きたいと思ひまして」

「けっこう意地悪だね」

少し微笑して、桜は視線をさとりに戻す。

「どうしてかな。少し、帰りたくない。そりゃ親が心配なんだけど……何だか、この世界でやるべきことがあるような気がしてさ。…空が飛べるようになったら、どうしようかな」

「それは、その時にまた考えればいいんじゃないかしら」

「そだね。……うん、そうする。んじゃ、練習再開しないと！」

車椅子の上で一度ウンと背伸びをしてから、桜は指を構えた。そして再び指パツチンの軽い音が神社に響く。

「……前向きな人ですね」

懸命に練習を続ける桜。

少し滑稽に見えるかもしれないが、真摯に努力する姿はとても素敵だとさとりは思った。

「少し、私も見習わないと……かな」

すると、不意にどこからか淡い香りが漂ってきた。

これは……

「……ラベンダーの香り。彼女、もうコントロール出来るようになったの？」

振り向くと、桜は車椅子の上でガッツポーズをしていた。その上達の早さに、さとりは軽く目を見開き驚いた。

「これは……ふふ。空を飛べるようになるのも時間の問題ですね」

軽く肩をすくめてからさとりは桜の元へと歩き出した。

第十六話 夕日を背に 『A』 桜&さとり (後書き)

同じ時間軸のお話なので、今回はAパート、Bパートに分けます。
短めなお話ですいません；

Bパートは明日です。

それと、評価ポイントが若干上がってました♪
見直してくれた方、ありがとうございます。

読者の方に評価いただき光栄です。

他の人も、どんどん感想や評価等あればご自由にどうぞ。

第十六話 夕日を背に 『B』 〔靈夢&魔理沙〕

夕日色に染まる幻想郷。

靈夢は今日の夕食の食材を求め人里の中を歩いていた。

「そういえば、桜って好き嫌いとかあるのかしら？ 何にも聞いてなかったわね……お」

適当に店や屋台を回りながら今日の夕食を考えていると、いつか桜と見たサクラの樹が目についた。

心なしか前に見た時よりも花びらが開いているような気がした。

「少しは成長したのかしら。前よりも派手になってるじゃない。この分だと、そろそろ用意やらなにやらないといけないわね」

用意とは神社で行われる宴会のことである。

博麗神社では春になると宴会を開く。

人妖問わず集まって、呑めや歌えやの大はしゃぎ。

楽しむのは一向に構わないのだが……

「……たく、誰でもいいから手伝いなさいっての。あー、思い出したら腹が立ってきた」

きゅう、と同時に腹の虫も鳴く。

とりあえず足を進めていると、目の前に見覚えのある顔が見えた。

魔女が被るような三角の帽子に白と黒のローブ姿。

大事そうに箒を抱えながら歩く一人の少女。

「よお。何してんだこんなところで？」

少女は霊夢の存在に気づくと軽く手を振った。

「夕食の材料を買いに来たのよ。珍しいわね、こんな時間に魔理沙がここにいるなんて」

「今からちよっとしたパーティーなんだ。だからそれ用に何か使えそうなものを探しててな」

魔理沙と呼ばれた少女は楽しそうにニツと笑った。
夕日を浴びた金髪が眩しい。

「へえ、パーティー……なかなか面白そうじゃない」
「霊夢も来るか？ どうせヒマなんだろう？」

魔理沙の誘いに、霊夢は首を振った。

「今日はムリ。神社で少しやることもあるし、私だけ楽しんじゃっても悪いしさ」

「……？ どういう意味なんだぜ？」

「んじゃ、私は行くわよ」

「あ、おい！ 今年も宴会やるんだよな？」

「当たり前でしょ？ ま、用意が出来たらそのうち連絡するわよ」

「へへ、そっちも楽しみだな」

ニンマリと笑顔を浮かべながらクスクス笑う魔理沙。
はあ、と霊夢は大袈裟にため息をついてから、

「魔理沙もたまには手伝いなさいっての。まったく、いつつも準備も後片付けも結局私だけじゃない」

「そうだ、今年はずっと大量に人を呼ばないか？」

「は？ どうしてよ？」

用意する手間が増えるじゃない、と付け足す。

「たまにはいいだろ？ 宴会なら大勢の方が賑やかで楽しいじゃないか」

「具体的に、誰を呼ぶのかしら？ いつも来てるのはアンタと、それから霖之助さん、うるさい三人に、パパラッチとそのパシリ、あとは……」

多すぎて考えるのを止めた。

とはいえ、これ以上いったい誰を呼ぶというのだろうか。

「ん？ そりゃ幻想郷中からありったけのヤツらを」

「神社が崩壊するわ。……それに、そんな人数を賄えるような食料はどこから用意するのよ」

「キノコでよければ提供するぜ？ この前も真っ赤なテングダケを見つけてさ」

「ほう、いったい誰が食べるのかしら？」

「あれ、霊夢はキノコ嫌いだったけ？」

「毒キノコなんて論外よ！ ……というか、宴会で死人を出すようなことは止めてちょうだい」

「わかってるって」

本当にわかってるんだかわかってないんだか、その笑顔からは想像がつかなかった。

霊夢はもう一度大きくため息をつく、魔理沙に背を向けて、

「まあ……そうね。たまには大勢で宴会やるのも、たまには……」

その言葉に、思わず魔理沙は目を白黒させた。

「お？ 珍しいな、お前がそんなこと言うの。どういう風の吹きまわしだ？」

「い、今アンタに言われてちょっとぐらいいならいいかもって思っただけよ。それに、私はあんまり騒がしいのは好きじゃないし」

「ふうん……？ ま、いいや。んじゃまたなー」

そして二人は別々の道を歩き出す。

帰り道、霊夢の様子を思い出しながら魔理沙はつぶやいた。

「なんかアイツ、ちょっと変わったような気がするが……気のせいかな？」

そして箒に跨り空へと駆けていく。

さながらそれは、夜を切り裂く流星のようだった。

第十六話 夕日を背に 『B』 〵靈夢&魔理沙〵（後書き）

気がつくと評価ポイントが上がっていました。
すごくビックリしてます。

前作より多くの評価を頂き、とても嬉しいです。

評価してくださった方々のご感想がとても気になりますw
是非とも聞いてみたいです。

第十七話 危ないポプリ

「で、どうなの？ 能力の方は？」

夕食の最中、桜は卵焼きに箸を伸ばしながらうーんとうなった。

「まあまあって感じかな。何となくわかったような気がする程度。さとりさんには上手だって褒められたけど」

「ふうん……？ ずいぶんと仲良くなったみたいじゃない」

「……あ、そういえば。ついだってコレを渡されたんだけど……」

巫女服の懷から取り出したのは小さなカードだった。

長方形でそこその大きさのカードは真っ白で何も書かれていない。

余談だが、いつの間にか桜はこの巫女服を完璧に着こなしていた。

「護身用だって、さとりさんから別れ際に渡されたんだけどコレなに？」

「へえ……？ 珍しいモノね」

霊夢はそのカードを手に取ると、適当な角度から眺めてみたり、高く掲げたりして観察していた。

「これは空からの術符よ」

「空の、スペル……カード？」

「そう。コレとは少し違うけど、私も一応持つてるわよ。……ホラ」

同じようなカードを霊夢が取りだした。

桜のそれとは違い赤く縁取られており、なにか呪文のような字が書

かれている。

カードをヒラヒラ揺らしながら霊夢が説明する。

「アンタに分かるように言うなら、魔法の詰まったカード、といったところかしら。このカードには弾幕が封じ込められているの。私達にとってはお遊びみたいなものだけど威力はホンモノ。封じ込める力次第で殺傷能力を得ることが出来るし、そのチカラで強固な結界を作ること出来るわ」

「ほえ……。ぶ、物騒なモノなんだ」

まじまじと自分の白い術符を見つめる桜。

「私も一枚ぐらい護身用を作ってあげようかと思ってたけど、先を越されちゃったわね。……ま、こっちもやり方は一緒だから教えてあげるわ」

「ホント？　ありがと霊夢！」

返事の代わりに小さくウインクしてみせた霊夢は、そのまま味噌汁をすすった。

・

場所が変わっていつもの縁側。

神社を吹き抜ける春の夜風はほんの少しだけ冷たかった。

「さて、早速やってみましようか。能力はコントロール出来るのよね？」

「まだ、ハッキリとは出来ないけど……」

それで十分、と霊夢はピンと指を立てた。

「最初は私がお手本を見せましょうか。まずは基本的な弾丸ぐらい撃てるようにならないとね」

「へ？ 弾丸？ 術符コレの使い方じゃないの？」

「それに必要なの。まあ、見てなさい」

霊夢は手の平に軽く意識を集める。

すると、霊夢の手に拳大の光球がふわりと浮かび上がった。それを目の当たりにした桜の目が輝く。

「わ、すごい！」

「で、これを……そいッ！」

適当な木に目がけて光球を投げつける。

それはまっすぐ軌跡を描きながら目標に命中するとバチッ、と音を立てて木の表面に軽い焼き跡をつけた。

「ま、こんな感じかしらね。これも簡単よ。単純にイメージするだけ。ほら、やってみなさいよ？」

「うん……！」

静かに瞳を閉じ、パッ、と手を開いて霊夢と同じ光球をイメージする。

白く、丸く、輝く光を頭の中でイメージ。

すると、手の平に何とも言えない“チカラ”の集まりを感じた。

「へえ……？ さすがはカミサマってどこかしら」

霊夢の感嘆の声に恐る恐る桜は目を開いた。

桜の右手に、霊夢の光球と似た小さな光が出来上がっていた。

光球はふわふわと浮かんだり沈んだりを繰り返しながら、桜の手の上で揺らいでいる。

それを見て、桜は信じられないといった様子で霊夢と光球とを何度も何度も見返して、

「で、出来た！ 出来たよ霊夢！！」

「ええ、上出来よ。それを、今度は私が狙った場所と同じ場所に向かって撃ってみなさい？」

「よ、よおし……えい！」

勢いよく投げつけた光球はまっすぐ……ではなく、まるで風に揺られる綿毛のようにフラフラと弱々しい軌跡で飛んでいった。

そしてそのまま霊夢の光球の何倍もの遅さで木へと向かっていく。

「……しよぼ！？」

「まあ、最初なんてこんなもんよ。さ、気を取り直してもう一度……」

そして桜の光球が木に触れた瞬間、静寂に包まれていた夜の神社に凄まじい爆音が響いた。

「……え？」

「……………」

二人が振り返ると、光球が命中した木がまるで雷が直撃したかのようになんとも二つに裂けていた。

黒煙を上げながら木の焦げる音と匂いが広がる。

桜の光球は霊夢の放ったそれとは比べ物にならないほどの威力だった。

「……とんでもない爆弾ね」

「ち、違うよ!？」　えと、その、ただ霊夢の真似しようとしたらこんな、あの、ええっと……ゴメン」

「いいのよ。むしろ、アンタにこんな強い力があるだなんて驚いたわ」

申し訳なさそうにうつむいた桜に霊夢は優しく微笑んだ。
そして、空の術符をそっと握らせる。

「いい？　今の要領で、この術符に力^{カード}を込めるの。さ、やってみて？」

「……うん」

何も書かれていない、真っ白な術符を握りしめながら桜は瞳を閉じた。

先ほどと同じようにチカラをイメージしてみる。
すると、握りしめていた符が突然強い光を放つ。

「わ!？」

やがて光が止むと、それまで真っ白だった術符は薄緑色に縁取られたカードとなって桜の足元に落ちた。

「……はい、出来上がり。これが桜の護身用の術符よ」

霊夢に拾い上げてもらったその術符には、見たことも無い文字が書かれていた。

が、不思議なことに桜は難なくそれを読み取れた。

「えと……香符『ポプリ・ボム』？　これ、どうやって使うの？」

「このカードの名前を唱えて今と同じように投げれば効果が出るわ。ただ、私のと違ってそれは使い捨てだから気をつけなさいよ？」

「わ、わかった。気をつける」

出来上がった術符を、桜はギュツ、と強く握りしめた。

「さ、今日はもう休みましょうか。明日の朝にまたさとり達がくるだろうし、一先ず今日の特訓はお終い」

「うん、そうする。何だか今日はいろんなことを一気にやったから疲れちゃったよ。ふわ……あ」

桜は瞳をこすりながら大きな欠伸をした。

自分の能力のこと。

それから、この術符の使い方。

まさか本当に魔法を使えるようになるとは夢にも思わなかった。

もしかしたら、本当に自分のチカラで空が飛べるのかもしれない

桜は少し、明日が待ち遠しくなった。

第十七話 危ないポプリ（後書き）

※ポプリとは花や葉、スパイスやハーブなどを精油と混ぜ合わせて作った室内香のコトです。

評価ポイントがまた上がってました。

ありがとうございます。

ホント、ただただ恐縮するばかりです。

書き手は自分のお話が面白いかどうか知りませんから、感想や評価でカタチになって現れてくると、自分のお話を楽しんでくれる人がいるんだな、って安心します。
これからも更新頑張りますね。

……あとがき長ッw

第十八話 自分のチカラで

「では、今日も能力をコントロールする練習をしましょうか」
「はい！」

昇りはじめた朝日をいっぱい浴びながら、桜は早速さとりと練習を始めた。

昨日と同じように右手をまっすぐ伸ばし指を構えて弾く。弾く度に光が爆ぜ、桜の周囲に微弱な香りを漂わせる。すると、さとりが軽く微笑む、

「昨日より少し香りが強くなりましたね。コツが掴めてきましたか？」

「うん……どうだろ。まだまだって感じかな。イメージしようにも、どんな香りか分からないものはイメージできないし」

「では……そうだ。キンモクセイの香りとかならどうですか？」

「キンモクセイ……？」

さとりは、以前桜が老婆の思い出を呼び覚ますためにキンモクセイの香りを操ったという話を霊夢から訊いていたことを思い出した。実際のところは知らないが、相当な強さの香りを操ったらしい。ということとは、それだけ桜がキンモクセイに強い想いがあるということではないだろうか。

そう考えてさとりは提案してみたのだ。

「さ、やってみてください」

「う、うん………ていッ！」

やや間を置いてから、桜は勢いよく指をパチン、と鳴らす。

光が弾け、甘いキンモクセイの香りが周囲一帯に……

「……あら？　これはキンモクセイの香りではないわ？」

漂ってきたのはキンモクセイとは違う別の甘い香り。

これはいったいどういうことだろうか。

すると、桜は恥ずかしそうにうつむいて、

「……その、キンモクセイの香りって知らなくて。適当にイメージしたらラベンダーみたいな香りになっちゃって」

その言葉に、さとりは軽く目を見開いた。

「キンモクセイの香りを知らない……のですか？」

「うん……」

申し訳なさそうに視線を落とす桜。

さとりは手をあごに当てながら思案する。

（どういふことかしら……霊夢の話だと、永遠亭で覚醒した時はキンモクセイの香りはもちろん、彼女はその花言葉まで知っていたというのに……）

一応確認してみたが、桜はキンモクセイの花言葉も知らないと首を振った。

おかしい。

覚醒した時に記憶を失ってしまったとでも言うのだろうか。

それとも、まだ何か彼女には秘密があるのだろうか。

「ん？　どうしたのよさとり」

すると、後ろからちよいどいいタイミングで霊夢が現れた。
早速疑問を投げかける。

「霊夢、一つ訊ねてもいいかしら？ 彼女は永遠亭で覚醒した時、強いキンモクセイの香りを放ったのよね？」

「そうよ。今思い出してもすごく良い香りだったわ。それはもう、本物のキンモクセイが目の前に現れたみたいになすごく強い香りだった。……それがどうかしたの？」

「彼女、キンモクセイの香りを知らないそうよ」

「……はえ？」

思わず素っ頓狂な声を上げた霊夢。

「今訊いてみたの。そうしたら、花言葉も知らないそうよ。これはどういうことかしら？」

「覚醒したショックでその時の記憶を忘れたとか？ でも、永琳はそんなこと一言も言わなかったけど……」

「……変ね。知らない香りなんてそう強くイメージ出来るものかしら？」

「さあ？ でも、カミサマなら簡単に出来そうだけどね」
「……………」

あっけらかんと答える霊夢はそのまま神社へと戻っていく。

桜の練習を再開するが、さとりは終始引っかかりを感じていた。

覚醒した時と今とでは、まるで別人のようではないか、と。

・
・

・

「さて、いよいよ空を飛ぶ練習ね」

「お、お願いします！」

さとりたちが昼前に帰ってからしばらくして、いよいよ空を飛ぶ練習を始めた。

桜は気合いを入れて一礼すると、まるで無垢な子供のように瞳を輝かせながら霊夢を見据える。

急に尊敬の眼差しで見つめられて、思わず照れ臭くなる。

「そ、それじゃ……こほん。じゃ、まずはチカラを全身に纏ってもらいましょうか」

桜は瞳を閉じると、全身に意識を張り巡らせ目に見えぬチカラを解放する。

心なしか全身が温かくなるような気がした。

「……………どう、出来てる？」

すると、桜の全身に白いオーラが現れる。

オーラは不安定なのか時々揺れたり震えたりしていた。

「まあまあね。所々ムラが出来てるような気がするけど、とりあえずはそれでいいわ。次は、そのままチカラを持ち上げるような感じをイメージして」

「う、うん」

言われた通り、桜は全身に巡らせたチカラを上へ上へと向ける。すると、全身が軽くなったような気がしてきた。

そのままチカラを開放し続けていると、桜の体が車椅子から離れふわりと浮かび上がった。

「……………あれ？ 足が地に着いてないような……………」

「何も最後まで目をつむってることないでしょ。ほら、目を開けてみなさい」

笑いをこらえながら霊夢が指示する。

恐る恐る目を開けると、不思議なことに霊夢がいつもより小さく見える。

「…………あれ、霊夢ずいぶん小さいね？」

「バーカ。違うわよ。アンタが空を飛んでるからよ」

「は？ 飛んでるって私……………」

ふと足元に視線を落とす。

さっきまで座っていた車椅子が遠い。

桜の両足は何もない空中で虚しく揺れていた。

途端に桜の顔が青ざめ、そのままジタバタと暴れ出す。

「…………あ、うわああ！？ と、飛んでって高あ！？ え？ ちょ！

？ わわわ！？」

「あ、まずッ！」

集中力が途切れチカラのコントロールが失われると、桜は重力に引かれ真っ逆さまに落ちていく。

霊夢はとっさに地を蹴り飛びあがると、何とか桜を受け止め地面に着地する。

「すっかり忘れてたわ。アンタ高所恐怖症だっけね」

「し、死ぬかと思った……」

「あれぐらいで死ぬわけないでしょ。今のアンタ、二メートルも飛んでないわよ？」

「……情けないなあ」

霊夢はそのまま桜を車椅子に乗せると、縁側から神社へと上がる。

「少し休憩しましょ。なにかお菓子でも用意するから待ってて」
「うん……」

そして奥へと消える霊夢を見送ってから一人残された桜。

「……霊夢に頼ってばっかじゃダメだ。私も一人で頑張らないと」

桜は車椅子を、鳥居の方へと向けた。

・

「桜ー？ アンタは羊羹とか平気かしら……？ あれ、桜？」

霊夢が縁側に戻ってきたとき、庭に桜の姿は無かった。

第十八話 自分のチカラで（後書き）

今更ですが、前作の『Tears of Memories』の評価点を越えました。

評価してくださった方々、ありがとうございます。

しかし、気が付くと一日一話更新が身についてますねw
イイコトです。

あ、明日はお花見に行ってきますーす

第十九話 私の幸福

「幻想郷って、昔の日本みたいなんだ……」

神社を出た桜は昼下がりの人里を車椅子で歩いていった。

行き交う人々は皆同様に古めかしい着物のような衣服ばかり。

子供は徒党を組んでなにやら遊んだり走り回ったり。

桜は歴史の教科書で見たような光景を思い出しながら里を歩いていた。

途中、何度も声をかけられたり視線を集めたりもしたが、桜はとりあえず巫女見習いだと名乗っておいた。

すると住人は何故か可哀そうな顔をしながら、桜にいろいろな物をくれた。

ミカンだとか、てぬぐいだとか、お茶と団子に、終いにはこの里の通貨と思わしき銅銭まで差し出す者もいた。

皆口を揃えて「君はあんな巫女にはならないよう頑張ってね」と言ってくる。

博麗神社、と神社の名前を教えただけなのだが……

「もしかして、霊夢の神社って悪名高い神社……ってヤツなのかな。そんなことないのに」

当然ながら、霊夢が神社の賽銭に固執していることを桜は知らない。

やがて車椅子を進めっていると、里の外れに小さな花屋を見つけた。

こじんまりとした木造の小屋の軒先に、小さな花の苗や苗木を並べる店だった。

「うわぁ……可愛いなぁ」

棚に置かれた綿毛のタンポポをつつくと、種がふわりと舞いあがり西風に流れていく。

売り物を飛ばしてしまったと思い、慌てて店主を探したら、

「そこにあるのは趣味で育ててるやつだから、気にすんな」

と、優しく笑ってくれた。

どうやら売り物ではなかったようだ。

恐縮しつつ、桜は店主に断ってからお店の花を見つめていた。

すると、店主があ、と声をもらし里とは反対方向へ視線を移す。

気になった桜が視線を動かすと、道の向こうから誰かが日傘を差しながら歩いてくる。

「あれ、紫さん……？ でも、あんな傘だったかな？」

目を凝らして見ると、日傘を差していたのは新緑色の髪をした桜と
同じ年くらいの少女だった。

赤いチェックのスカートに真白のシャツという姿の少女はこちらへ
向かってゆっくりと歩いてくる。

どうやら、この花屋に用があるらしい。

傘から見えた赤茶の瞳は咲き誇る花の方を向いているような気がした。

少女が花屋の前に立つと、一番前に置いてある薄紫色の小さな花を
手に取った。

「……綺麗ね。おいくらかしら？」

「そっちの巫女見習いの嬢ちゃんにも言ったが、そこのは売り物じゃないから適当に持っていてって構わんよ」

「巫女見習い？」

少女の視線が桜に移る。
遠くで見るよりも鋭い瞳をしていた。

「ええっと、こんにちは。私、天春桜って言います。その、私今博麗神社で巫女の見習いをしてるんです」

「博麗……神社」

何故か一瞬、少女の瞳が鋭く細まった。
かと思うとすぐさま柔和な笑顔を浮かべて会釈して返してきた。

「そうなの。私は風見幽香^{かざみゆうか}。よろしく」

「よろしく。お花、好きなんですか？」

「ええ、大好きよ。貴方もなのかしら？」

「まあ……そんなとこです」

ニツコリ笑って桜も返す。

霊夢やさとり以外の人と話すのなんて初めてだ。

桜は何だか機嫌が良くなってきて、幽香と名乗った少女を驚かそう
と思い指をパチンと鳴らす。

すると指先から光が弾け、辺りに柑橘系の爽やかな香りが広がる。

「この香りは……」

「えへへ。さっきミカンもらったからミカンの香りを操ってみたの。
どう？　すごい？」

「へえ……？　貴方、香りを操れるの？」

「といってもまだまだ未熟だけど」

照れ臭そうにする桜を見て幽香は微笑^{わら}った
面白い人間だ。

ここで帰すのには惜しい。

たまには、ニンゲンを味わうのも悪くない。

「ねえ、この後お時間あるかしら?」

タンポポを見つめる桜に幽香は訊ねた。

「え? ……う、うん。特に何もないけど?」

「この先の花園に私専用の場所があるの。よかったら、一緒にお茶でもどうかしら?」

「花園……!」

瞳を輝かせながら桜はうなずいた。

幽香は手にしていた花を抱えると、桜の後ろに回って車椅子を押しました。

「あ、あの、自分で押しますから大丈夫ですよ?」

「いいのよ。この方が楽でしょう?」

「す、すいません……あ、そういえばさっきもらった花、なんていうんですか?」

「ああ、これ? これは蓮華草レンゲソウよ」

「レンゲソウ……?」

桜の背後で幽香は口の端をつり上げた。

「ええ。花言葉は『私の幸福しあわせ』よ」

第十九話 私の幸福（後書き）

あとがきに何か書こうと思ってたんですが……なんだっけ？
忘れちゃったい；

いつも読んでくださる方々、ありがとうございます。
なんだか、話が進むの遅いような気がする……？

第二十話 失樂園

「うっわぁ……!!」

人里を離れてしばらく歩き続けていると、目の前に色鮮やかに咲き誇る花畑を見つけた。

幽香はその場所を桜の肩越しに指を差した。

「御覧なさい。あれが私の場所。素敵なた畑でしょう？」

「うん！　すごい！　やっぱり幻想郷ってすごいなあ……」

「幻想郷……？」

「あ、いや、なんでもないです」

慌てて口をつぐむ桜。

外から来た人間だということをうっかり言ってしまうそうになるのを何とかこらえる。

やがて二人は花畑の中心部分へと足を踏み入れた。

陽の匂いと、花の香りがふわりと立ち込めていてとても暖かい。まるで春の真ん中にいるようなとても心地よい場所だった。

「ホント……素敵なた場所ですね。あ、幽香さん」

「？　なにかしら」

「ありがとうございます」

桜は振り返ると、幽香に素直に礼を述べた。

淀みない澄んだ瞳が幽香を見据える。

警戒心も、疑心もないまっすぐな瞳。

バカな人間だ。

内心嘲笑^{あざわら}いながらも幽香は優しく微笑みかえした。

「どういたしまして。そこまで喜んでもらえるなんて誘った甲斐^{かい}があったわ」

そのまま歩き続けていると、花畑の真ん中にパラソルとテーブルがちゃんと置いてあった。

白いパラソルの下まで辿り着くと、幽香は桜に紅茶を淹れてくれた。

「こんな場所で紅茶を飲めるなんて夢にも思っ^てなかったなあ。さすが幻想き……ごほん」

「さっきから可笑しな子ね。ふふ」

桜は紅茶に口をつけながら、目の前にいる幽香を見つめた。

同じ年かと思って敬語も使わなかったのだが、よく見ると切れ長の瞳に凜とした美声でとても大人っぽい。

本当は年上なのではないだろうか。

もしかしたら敬語を使わないとまずいんじゃないだろうか。それと……

「……あら、何かしら？ さっきから私をジロジロ見てるけど」

「え、あ、いえ！？ その……なんでもないです！」

視線に気づいた幽香がまばたきする。

何故だろう。

桜は幽香から寂しそうな香りを感じるような気がしていた……

それから二人は花々に囲まれながら他愛もない話をしていた。

神社での修行のこと、この花園のこと、それから自分の能力のこと。

その時の幽香はとても面白そうに桜の話に耳を傾けていた。時折見せる笑顔を見て桜は気を許し、どんどん勢いを増して話を続けた。

「そうだ、とっておきを教えてあげるよ！ 私ね……えへへ」

「なあに？ もったいぶらずに教えてちょうだい」

「ふふふ。実は私、カミサマなんです！」

「……神様？」

幽香の瞳が途端に鋭くなる。

桜はそれに気づかないまま紅茶をすすって、

「そ。私は香りを司る神様の生まれ変わりなんだってさ。霊夢が言ってたんだけど、全然自覚ないし……可笑しいよね？」

「ええ……ククッ、そうね」

どうやら私は大当たりを引いたらしい。

連れてきた人間が、まさか人ではなく神だとは。

可笑しくて体が震える。

笑いを堪えようとするが、どうにも我慢できない。

「クク…フフフ…」

「幽香さん笑い過ぎ！ そんなに笑うのって失礼じゃないですかー？」

「ええ、そうね……ゴメンなさい。……フフッ」

神を喰らう。

その興奮に体が限界を訴える。

早く、早くと無意識のうちに心が欲する。

幽香は片手で顔を覆いながら桜を見据えた。

「フッフ……ねえ、桜さん」

「ん？　なんですか？」

「神様って、どんな味がするのかしら……？」

「へ？　なにを……？　あ、あれ………」

カップを握る手が震え、目の前の視界が霞み意識が朦朧とする。

気が付くと桜は意識を失い、テーブルに突っ伏して眠ってしまった。

「……他愛もない」

ゆっくりと立ち上がり、心地よい寝息を立てる桜を見降ろす。

そこには桜に見せていた笑顔とは違う、獲物の前で舌なめずりする獣のような残忍な表情で幽香が微笑んでいた。

第二十話 失樂園（後書き）

徐々にアクセス数が増えてきてとても嬉しいです。

欲を言えばもっともっとアクセス数が増えて感想が増えるとさらに嬉しいのですが、まだまだそこに至るまでのチカラが自分には足りませんね。

さらに修行を積みまねば！

たまには9時きっかりで更新したいなあ……w

第二十一話 花園死闘

眠る桜の前に、幽香は軽く右手を開いてチカラを込める。
光が手の平に集まるとそれは小さなナイフのような形を成した。
この刃で喉を切り裂きそのまま喰らってしまえばいい。

「呆氣ないわね。カミサマだなんて言うからもう少し強いのかと思
ったのに」

「むにゃむ………霊夢、それはマツボックリだよ食べれないよ……」

「……呑気なものね。これから私に喰われるというのに」

テーブルにべったり顔をくっつけて眠る桜は、まるで眠る赤子のよ
うな幸せそうな寝顔をしていた。

「さよなら、カミサマ」

チカラを込めた手を振り上げ狙いを定める。
首筋に目がけて、その刃を突き立てようとした瞬間、

「ッ！」

幽香の右手に鋭い痛みが走る。
気配を感じ視線を動かすと、そこには赤い巫女服の少女が符を構え
て立っていた。

「私の教え子に、何をしようとしたのかしら」
「霊夢……」

凜とした瞳に映る怒りの焰。

霊夢は両手に符を握りしめながらゆっくりと幽香に近づく。
全身がピリピリとざわめく感触に幽香は微笑^{わら}った。

「巫女の貴方がそんなに殺気を出していいのかしら？ それと、
食事の邪魔をするのなら容赦はしないわよ？」

「黙れ」

刹那、霊夢は目にも止まらぬ速さで幽香に符を投げつける。
激しい閃光と爆音が幽香を包みこみ黒煙を広げる。
二人の間に草花の焼き焦げる匂いが立ち込める。

「……私の目の前で花を焼くなんて、イイ度胸じゃない」

「警告よ。それ以上、桜に近づかないで」

「そんなにこの子が大事？ それなら……」

「……！」

幽香は眠りこける桜の襟首を持ちあげると盾のように掲げた。

「これでどうかしら。それでも攻撃する？」

「卑怯な……！」

「食事の邪魔をした無粋な貴方がいけないのよ。……それと」

空いている左手で構えると、霊夢に向かって光の矢を放つ。

矢は霊夢の足をかすめ鮮血を滴らせる。

「ッ……！」

「やられたらやりかえす性分なの。もちろん、倍でお返しするわ」

残忍な表情を浮かべながら霊夢に向かって何度も何度も矢の雨を放

つ。

桜を盾にされ、成すすべもない霊夢はただそれを受け続ける。頬を滑る血を拭いながら、尚も微笑む幽香を強く睨みつける。

「反抗的な目……気に入らないわね」

「いいから桜を放しなさい。でないと退治するわよ」

「それは何かの冗談かしら、全然面白くないわね。私がせっかくの食事を止めるわけないでしょう？」

眠り続ける桜を揺らしながら、幽香はからかうように言った。

それにしても、これだけ騒いでいるというのによくもまあ寝ていられるものだ。

幽香が何かしたのか、それとも本当にただの呑気なカミサマなのか。

「いっそ桜ごと術符で吹き飛ばしましょうか」

「その発言は巫女としてどうなのよ」

「……そうか」

霊夢はあることを思いつき懷から群青色に縁取られた別の符を取り出した。

同じようにチカラを込めて起動させると狙いを桜に定める。

そして、同時に幽香に気づかれないようもう片方の手で別の符を握りしめた。

「血迷ったのかしら？ そんなことをしたらこの子死ぬわよ？」

「カミサマなら一発ぐらい耐えられるわよ」

「……ヒドイ巫女を見たわ」

「お互い様でしょ」

そして、霊夢は一寸の迷いも無く符を放った。

「それじゃ、遠慮なく」

ぐい、と桜を掲げて身を防ごうとする幽香。それを見て霊夢はニヤリと笑った。

まっすぐ放たれた群青色の符は桜の目の前で弾けると、突如青い光が桜の全身を包みこむ。

その光景に幽香が驚愕の表情を浮かべた。

「なッ!? これは防御用の……ッ!」

焼けるような痛みで幽香は思わず手を引っこめ、そのまま勢いで後ろへ大きく後退する。

桜は青い光に包まれたまま、しばらくその場を浮遊してからやがて力無く倒れ込んだ。

「こっちが本命よ!」

隠していた符を幽香に投げつけ光が四散する。

激しい光の中、霊夢はすぐさま桜の元へ駆けつけしゃがみ込んだ。

「ほら、起きなさい!」

「んにゃ……? はえ? 霊夢、なんで……?」

寝ぼけて焦点の定まらない桜をペシペシ叩いてから担ぐと、霊夢は花畑を背に地を蹴った。

傷を負った足が痛むが、今は一刻も早くここから離れないと……

「ッ!?」

足元に気配を感じ足を止める。

霊夢の目の前に地面がもぞもぞ動き出したかと思うと巨大な植物の根が飛びだした。

それは行く手を阻むように左右へと伸びていく。

「花を操るってレベルじゃないわよ……」

「攻撃と見せかけて結界を投げつけ彼女を守り、そして隠し持っていた符で私を攻撃する……なかなか考えたじゃない？」

声がする。

振り返ると、嬉々とした表情で笑んだ幽香が静かに立っていた。

張りついたような笑顔に、霊夢は久々に命の危険を感じた。

「でも、それだけね。……まさか、これだけ派手に暴れてタダで帰れると思ったのかしら？」

「あらら……万事休すってヤツ？」

「大人しくその子を置いて逃げるなら……と思ったけど、それじゃ私の気が済まないの。半殺しぐらいでどうかしら？」

「物騒な提案ね……」

全身を走る冷や汗が尋常じゃない。

どうする。

ここで応戦するか、それとも桜だけでも……？

おかしい、背が軽い……？

「あ、あれ？ さ、桜！？」

気が付くと、背に担いでいた桜がない。

慌てて後ろを振り返ってみたがどこにも見当たらない。

これはいったいどういう……？

「霊夢、下がって」

前から桜の声がした。

すると桜は、幽香に立ち向かうように霊夢の目の前でふわりと浮かんでいた。

背筋をまっすぐ伸ばして、微笑む幽香を見据えている。

霊夢は目の前の光景を疑った。

何度も目を擦った。

だが、その光景は消えなかった。

「ど、どうして桜、なんで浮いて……？」

「へえ……？ あの手椅子はお飾りだったのかしら？」

「今はいらぬもの」

「今は、って……」

桜は懐から薄緑色に縁取られた術符を取り出しクスツ、と小さく微笑んでから、

「霊夢、ちょっとお願いがあるの」

「え？ あ、はい？」

「死にたくなかったら鼻をつまんで」

「は？」

言っている意味が分からず、霊夢は思わず間抜けな返事をしてしまった。

どういう意味だろう。

こんな状況で、死にたくなければ鼻をつまめて……

「えっと、幽香さんでしたっけ？　あなたって花を操れるんですね？」

「それが何か？　今から死ぬ者に話すことでもないでしょうに」

桜は悪戯っぽく笑った。

「じゃあ、世界でいっばん臭い花ってご存じかしら？」

「はあ？　馬鹿じゃないの、そんなもの私が咲かすわけ……ッ!？」

その一言で幽香は思い出した。

そうだ。

コイツは香りを操れると言っていた。

だとしたら、今の一言から予想できる答えはただ一つ。

桜は幽香に目かけて術符を投げつけ、

「なんだか私、あなたのこと嫌いの！　ってことで喰らえ！　香符『バッド・ポプリ・ボム』！」

投げつけた符の色が深緑色に変わると、それに向かって指を弾く。弾けた光がまっすぐに符を貫くと空中で小さな爆発を起こす。

そして、辺り一面に得も言われぬような酷い悪臭が立ち込める。

まるで生肉が腐敗したような悪臭に、霊夢も幽香も両手で顔を覆う。

「……うえわ!？　く、くっさ!？　おえ……な、何、何なのこの匂い……」

「やっぱりやってくれたわね……ッ」

忌々しげに桜を睨みつける幽香。

当の本人は得意気な笑みを浮かべていた。

「ラフレッシュの香り。花言葉は……『オマエなんか大っきらい!』
ってとこかな」

「よくも私にこんな……ゲホッ、ゲッホ……」

心底苦しそうに顔を歪める幽香。

よく見るとうつすら涙を浮かべている。

「くッ……こんな醜悪なヤツなんかこっちからお断りよ! なんて
巫女見習いなもの! そんなんだから賽銭も集まらないのよ!」

「ちよ、最後、全然関係な……うえぶ、吐きそ……」

一通り毒づいた後、あまりの悪臭に幽香は一目散に空へと逃げ出した。

「醜悪だなんて失礼な。花を操る妖怪なら、必死に生きる花のこと
も考えなさいよ」

「ゲホ、うえっぷ……さ、桜、いいからこの匂い何とかして……」

「あ、ゴメンなさい」

桜は慌てて霊夢の元へ駆け寄ると、鼻先で指をパチン、と鳴らした。

「わ、何これ、すごくいい香り……」

「フローラルミント。消臭にはちょうどいいかなって」

「た、助かった……ホント、アンタっていったい何者なの……よ?」

霊夢がなんとか顔を上げると、そこには銀色の瞳をした桜が微笑んでいた。

第二十一話 花園死闘（後書き）

ちなみに、ラフレシアに花言葉はありません。
詳細は最後のあとがきにでも書きます。

……そして、なんとも滅茶苦茶な戦闘回；
ゆうかりん可哀そう；

しかし、香りを操る能力で戦おうとするとどうしてもこうなっちゃ
うんです……；
なんかいろいろすいません……；

第二十二話 種明かし

花園から神社に帰ると、早速霊夢は銀の瞳の桜を問いただした。

「桜、あなたは本当に何者なの？　というより……桜、なの？」

お茶をすすりながら片目だけでチラと霊夢を見ると、

「ん……私は桜じゃないけど、桜でもあるの」

「いや、えっと……意味が分からないんだけど？」

「ううん、なんて説明したらいいのかな」

小さくうなりながら腕組みして悩む銀の瞳の桜。

かなり間を開けてから顔を上げて、

「よくわかんない。つい最近生まれたばかりだし」

「はあ？　生まれたばかりって……」

すると、突如ちゃぶ台の真ん中に裂け目が出来て何者かが顔を出した。

「あら、何か面白そうなお話してるのね」

「う、わあああ！？　なんてどこから顔を出してるのよ紫！？」

「ちゃぶ台」

「冷静に答えんな！」

盆で叩こうとしたがすき間に引っこまれ見事に外れる。
モグラ叩きのモグラかおまえは。

「で、何のお話だったかしら？」

「……だいたいの事情を知ってるのなら言わなくてもわかるでしょ」
「やあねえ。私にだって知らないことの一つや二つあるわよ？」

「だったらどうして胸を張るの胸を」

「そうそう、桜ちゃんのお話ね」

「……………」

とりあえずため息をついてから、霊夢は銀の瞳の桜を指差して、

「紫、これはどういうこと？ この子桜なのに桜じゃないって言い張るのよ」

「だって私は名前がないもん」

「ふうん……………」

紫紺の瞳が細まり銀の瞳を見据える。

そのままじーっ、と見つめ続けてから息をついた。

「どうやら、人間としての“桜”と神である“彼女”の人格がごっちゃになってるみたいね。ほら、御覧なさい。瞳の色が時々濁ったように見えるでしょ？」

「そう言われれば……………」

注意して見ると、銀の瞳が時々うつすらと濁ったような鈍い色に明滅している。

最初見た時は気づかなかったのだが……

「え？ ってことは、桜は二重人格とか言うヤツなの？」

「端的に言えばそうなるわね。……でも、それなら今桜ちゃんはどうしているのかしら？」

「んと、寝てるよ」

「寝てる？」

銀色の瞳の桜は一度まばたきしてからうなずいた。

「私が起きてる時は桜は寝てるの。それで、私が見た記憶を夢として見てるの」

「……なんだかややこしくなってきたわね」

「桜ちゃんはいっ起きるのかしら？」

「もう少ししたら私が寝るから、その時に入れ替わる感じかな」

「ずいぶんと変わったカミサマね。私も初めて見たわ」

「嬉しそうに笑ってないでちょうだい。……はあ」

すると今度は銀の瞳が二人を交互に見つめてきて、

「ねえ、寝る前に私も質問していい？」

「ええ、いいわよ。私達に答えられることならだけど」

「ホント？ それじゃ一つ目。私の髪って今何色？」

霊夢はとりあえず一瞥してから答える。

「真っ黒よ。……って、それがどうかしたの？」

「やっぱ黒いのか……桜ちゃんの体だもんねえ、仕方ないか」

「……？」

思わず顔を合わせる霊夢と紫。

黒い髪を弄びながら、銀の瞳の桜はもう一度訊ねた。

「んじゃ次！ どうやったら桜ちゃんに会えるかな？」

「会えるって……どういうこと？」

「え？ 言葉通りの意味だよ。私が起きてる間は桜ちゃんに会えな

いし、桜ちゃんが起きてたら私は寝ちゃってるでしょ？ 生まれた

時からすごく気になっててさ」

「そ、それは……うん……」

そんな方法さっぱり浮かばない。

というか、そんな方法存在するのかだって怪しい。

「……私も一つ訊ねていいかしら？」

「ん？ いいけど、そろそろ眠いから最後にしてね」

「桜の能力の出所はあなたね？」

「うん、そうだよ。私が眠っているときは能力の半分ぐらいしか使えないけどね」

「具体的に言うത്？」

「私はあらゆる香りを操れるけど、桜ちゃんは自分の覚えてる香りだけしか操れないの。知らない香りとかは作ることが出来ないの」

「これでキンモクセイの香りの謎は解けたわね」

「じゃあ、永遠亭の時の桜はアンタだったの？」

「おばあちゃんの時の？ うん。だってあの時に目覚めたんだもん」

霊夢は驚きのあまりぽかんと口を開けたまま呆けてしまっていた。

すると、銀の瞳の桜はふわっと可愛く欠伸してから眠たそうに目を擦った。

「……そろそろ寝ていい？ ちょっと本気出しちゃったから疲れた。だから寝る」

「あ、ちよつと！ まだ訊きたいことが……あ」

銀の瞳は静かに目を閉ざすと、その場で座ったままあつという間に寝息を立て始めた。

「……紫、ホント面倒なことに巻き込んでくれたわね？」

「そうかしら？　とっても面白いじゃない」

「確かに変わってるけど……って、アンタはさっきから何を悩んでるの？」

紫は難しそうな顔をしながら頬に手を当て何やら思案していた。

「ん……さっき言ってた、桜とあの子を会わせる方法を考えてたのよ」

「は？　別に会わせる必要ないでしょ？」

すると、突然真剣な表情になって霊夢を見据えた。

「な、なによ」

「霊夢、一つの体で別々の人格を持つことの意味に気づかないの？」

「い、意味って……？」

「いずれ、どちらかが消えなきゃいけないのよ」

「……え？」

言葉の意味が分からず霊夢が訊き返すが、紫は答えずに立ち上がりすき間を開いた。

「少し出かけるわ。じゃあね」

「あ、ちょっと紫……！」

そして紫はすき間の奥へと消えていった。

残された霊夢は、ただ茫然と部屋で立ち尽くしていた。

第二十二話 種明かし（後書き）

この話を書いていると途中から違和感を覚えるのは何故だろう；
ここから先グダグダにならないといいけど……

ちゃんとプロット書かない人間だから、どっかで穴があるのかもしれないなあ。

もう少しで我が嫁の登場シーンだというのに情けない……w

第二十三話 もう一人の自分

桜が目を覚ましたのはそれから半日ほど経過してからだった。

「あれ、私……なんで……？」

桜はぼんやりとした瞳で周囲を見回すと、霊夢が部屋の壁に寄りかかって眠っていた。

「……戸も開けっぱなしでこんな脇出しファッションで寝てたら風邪ひくよ……？」

ほふく前進で近づきながら、手近な場所にあった掛け布団をかける。すると霊夢は小さくうなってから寝がえりをうった。

「ふあ……あ。というか、どうして寝てたんだろ私。幽香さんと一緒にお茶飲んでたんじゃ……」

寝起きの目を擦りながらも一度辺りを見回す。

すっかり見慣れた神社の一室。

さっきまで里から少し離れた花園にいたはずなのに、どうしてここにいるのだろうか。

「里に行って、花屋さんを見て、それから幽香さんに会って……」

そこから先を思い出そうとして微笑が漏れた。

「そしたら突然霊夢と幽香さんがケンカを始めて花園が爆発して……って、それは今見てた夢だっけ？」

そうか、さっきのは全部夢だったんだ。

私が突然別人みたいになって、護身用の術符を使って戦ったのも全部夢なんだ。

そう思ったら途端に笑いがこみ上げてきて、

「さすが幻想郷。夢まですごくなるんだ……ふふ」

「残念だけど、それは夢じゃないわ」

「え？」

振り返ると、寝ていたはずの霊夢が起きていた。

いつもよりかなり真剣な表情で桜を見据えている。

「え、あの……夢じゃないって？」

「言葉どおりの意味。アンタは本当に別人のように振舞って幽香を撃退したの」

「ま、まさかあ……って、なんで霊夢が私の見た夢を知ってるの？」

「だから夢じゃないって言ってるでしょ。アンタは本当に、花園で術符を使い幽香を退けたの」

「いや、そんなわけ……」

霊夢は一度ため息をついてから桜に向かって正座した。

「いい？　これから私の言うことをよく訊いてちょうだい」

「う、うん……？」

霊夢にまっすぐ見据えられて体を強ばらせる桜。

普段見せないような真剣な表情のせいかな、全身がピンと張りつめたように緊張していた。

「最初に確認するけど、アンタは永遠亭に行った時のこと覚えてる？」

「妹紅さんに案内してもらって、輝夜さんや永琳さんと会った時？
えっと……うん、一応」

「じゃあ、あのおばあちゃんにキンモクセイの香りを手向けた時の記憶は？」

「……え、えっと」

桜は少し視線を反らした。

実を言えば、分からない。

あの時霊夢に教えられた時、桜は夢を見ていたのだと内心想っていたからだ。

ただ、あの時は何となくこのことを言ったら余計に心配をかけるのではないかと黙っていた。

「……単刀直入に言うわ。桜、実はアンタの中にもう一人の人格が存在してるの」

「もう一人の……人格？」

何を、言っているのだろうか。

霊夢の言葉の意味が分からない。

「あの時の記憶がないのは、もう一人の人格が目覚めていたからなの。しかも、アンタはその時眠っている。そして、アンタはもう一人の人格が見ている景色を夢として見ているそうよ」

「……待って、霊夢」

「それがアンタの生まれ変わりである神の人格で」

「ち、ちよっと待って！」

桜が叫んだ。

全身を小さく震わせながら、ゆっくりと顔を上げる。

「それって、私の中に、知らない誰かがいるってこと……?」

「……まあ、そうなるわね」

桜はいいやと首を振った。

声まで震え始める。

「う、嘘だよそんなの。自分の中に知らない誰かがいるなんて……!
! そんなの、嫌だよ! ? ねえ、霊夢!」

「落ち着きなさい、桜」

「や、やだ……何、気持ち悪い……! ああ……!」
「桜!」

霊夢が桜を優しく包む。

その温もりで我を取り戻すと、涙が零れだした。

「落ち着きなさい桜。別に危険な存在ってわけじゃないのよ。前に話してたカミサマの人格なの」

「か、神様でも、私恐いよ霊夢……」

「バカね、アンタの守り神みたいなもんでしょう。無害なんだから大丈夫。ほら、涙を拭いて?」

「う、うん……」

とりあえず、遠慮なく霊夢の服の袖でゴシゴシ顔を拭いた。

「……そこに鼻紙あるってのに」

「で、その……その人格が何か言ってきたの? 私は、これからどうしたらいいの?」

怯える桜の頭を優しく撫でる。
そして霊夢は軽く笑んで、

「そいつはアンタに会いたがってるみたいなんだけど……ま、そんな方法は無いしどうしようもないから……今は、とりあえずゆっくり休んでなさい」

「会いたがってる……?」

「何かあったら言ってちょうだい。……あ、それと」

霊夢はあることを思い出しゲンコツを構え息を吐くと、

「破あッ!!」

「いっただあ!?!? いきなり何すんの!?!?」

思いつきり桜の脳天に振り下ろした。

「勝手に神社を出た罰よ。もう心配かけるようなことしないの」
「あ……ご、ゴメン」

桜は素直に謝った。

そういえば、なんの断りも無しに出かけたのを忘れていた。

「次から出かけるなら一言私に声をかけること。まったくどれだけ心配したと思ってるんだか……」

「霊夢、私のこと心配してくれてたんだ?」

「そ、そりゃまあ……ほ、ほら! いいからとっとと寝なさいよ!?!?」

そして霊夢は顔を真っ赤にしながらそそくさと部屋を出ていった。

頭のとっぺんがヒリヒリする。
でも、ちょっとだけ嬉しい痛みだった。

……もちろん、変な意味ではない。

・
・
・

「少し、チカラを貸してくれないかしら？」

一方紫はとある人物達と会っていた。
視線の先には、不思議そうに紫を見つめる二人の少女がいた。

「ふむ……お前が私達に頼み事とわね」

「ほんと珍しいね。しかも……」

「いいじゃないの。同じ神なんだから協力してやってちょうだい」

少女たちは顔を見合わせた。

「どうするの？」

「ま。構わんさ。それに私もその神とやらの少し興味がわいた」

「そう言ってくれると助かるわ。それじゃ、また後日連絡するから」

そして、紫はすき間の奥へと消えていった。

第二十三話 もう一人の自分（後書き）

うーん、この違和感はなんだろうなあ……；

そして違和感とともに現れた、『思いつきそうで思いつかないもどかしさ』

とにかく空想夢はこのまま勢いで書いて、オリジナルはもう少し資料を探そう……

第二十四話 気分転換

「こんにちは。桜さんは……あら？」

次の日、さとりが神社を訪れると部屋に桜の姿が見当たらなかった。代わりに霊夢が部屋でごろごろしているのを発見。

「あ、さとりじゃない。桜なら外よ」

「早速準備をしているってことかしら。相変わらず熱心な方ですね」

「あ、いやその、ちょっとあって……」

「……込み入った事情があるようですね」

「実はさ……」

さとりは外へは行かずに、しばらく霊夢の横に座して話を聞いていた。

・

「あれ？ おねーさんこんなとこで何してんの？」

「……………え？」

丘の上で呆けていた桜は、後ろから聞こえた声に我を取り戻した。振り返ると、心配そうに眉をひそめるこいしの姿があった。

「あ、こいしちゃん……えっと、ちょっとあって」

「全然ちよつとに見えないんだけど……？」

今の私はそんなに深刻そうな顔しているのだろうか。すると、こいしが突然顔を寄せてきて、

「えい！ ピヨピヨグチの刑！」
「ふお、ふおいひひゃん？」

こいしに頬を指で押され、桜はなんとも間抜けなアヒル口になってしまった。

「どう？ 元気出た？」

「えっと、微妙……かな」

「ぶー。んじゃ、どうしたら元気出る？」

「う、ううんと……」

考えてみたが、何も浮かばなかった。

無理して元気な振りを見せようとすることも出来ず、桜は力無くはにかんで、

「と、とりあえず一人にしてくれれば」

「それ以外！ そういう時は、一人で悩んでも解決しないって知ってるもん」

「でも、今は考えたいことが山ほどあるから」

「心配なの」

「え……？」

突然、こいしの体が震えだした。

い、いきなりどうしたのだろうと顔を覗き込むと、

「う、うわああああん！！」

「ちょ、なんで泣きだすの！？ って、あの、えと……」

どう接しているのか分からずあたふたしていると、こいしの方から

桜に抱きついてきた。
車椅子が少し押されて揺れる。

「こ、こいしちゃん？ あ、私は大丈夫だから……」

「おねーさん、何だか悲しそうな匂いがする」

「え？ 悲しそうな匂いって……？」

涙をたっぷり溜めた瞳で上目づかいに桜を見つめると、

「何だろ……今のおねーさん、雨降った日みたいな寂しい感じの匂いがするの」

雨が降った日の匂い……

何となくイメージして理解すると桜は微笑んだ。

「何となく、分かる気がする。そっか。この能力って私の気分まで反映するんだ……」

「ねえ、私に出来ること何かない？」

桜は軽くこいしの頭を撫でながら、

「ありがと。気持ちだけで十分だよ」

「でもでも……」

「こいし、あまり桜さんを困らせてはダメよ？」

すると神社の方からさとりが歩いてきた。

……何故か、エプロン姿で。

「あ、さとりさん今日の練習……って、何ですかその格好？」

「今日は練習をお休みして、少し変わったことをやろうと思いまし

て」

「え？　じゃあその格好は……」

「お菓子作りをやるうかと」

「お菓子作り……？」

・

「ここに取り出したるは小麦粉と！」

「牛乳と！」

「砂糖と！」

「た、卵ッ！」

上から順に、霊夢、さとり、こいし、桜。

桜も思わず真似して材料を高く掲げたが、しかしこのポーズに何の意味があるのかはまったく不明。

「さて、カッコよく決まったところで調理をしましょうか」

「さとりさん顔真っ赤なんだけど……？」

「こんなことするなんて訊いてないわよ！？」

「いいのよ、とりあえず楽しければ。で、何を作るの？」

目の前の材料を眺めながら霊夢がつぶやく。

とりあえず、桜は何を作るのかだいたいは想像できていた。

「この材料って、ホットケーキだよね？　バターとかシロップまであるし……って、それよりも気になるのは」

桜は目の前にドンと置いてある明らかに場違いなシステムキッチン
を指差し、

「いつの間に神社の調理場にこんなものが!？」

「無意識ー」

「ええ、いつの間にかこんなものが出来ていたの」

「後で設置料もらうからね」

「……………」

咄然とする桜を余所に、三人は早速調理を開始したのだが……

「霊夢、これどう使うの……?」

「火が出ない!? え? このボタンは……?」

「誰一人使えないじゃん!？」

料理を他の人に任せっきりのさとりと、かまどでの調理経験の無い霊夢にこんなハイテクなシステムキッチンは無用の長物。
つまりこれを使えるのは桜だけで……

「……仕方ない。私が一人でやるか」

巫女服の袖をまくって気合いを入れると、桜はシステムキッチンと対峙する。

まずは材料を……

「ま、ホットケーキなら全部ごちゃまぜにして焼くだけだし簡単簡単」

小麦粉と卵と牛乳と少量の砂糖を混ぜ合わせて生地を作る。

そしてそれをバターを溶かして温めたフライパンの上に丸くなるように丁寧に流し込む。

……何気なく使ったフライパンだが、とりあえずもう突っ込まない

ことにする。

「へえ……上手ねえ」

「結局作ってるの私だけじゃん……」

ほどなくして生地ポツポツと小さな穴が出来てきたのでフライ返しですくって返す。

キツネ色に焼きあがった生地の表面が香ばしい香りを漂わせる。

「ねえねえ！ もう食べていい？」

「それはまだ半生なのよ、こいし」

「……何かが絶対おかしい気がする」

「よそ見していると焦げるわよ」

「わ、分かってるよ！」

しかし、桜もホットケーキ如きを焦がすほど不器用ではない。

絶妙のタイミングでひっくり返すと、両面綺麗に焼きあがったホットケーキが一枚完成した。

「ふむ、こんな感じかな」

「いただきまー！」

「あ、こいしちゃんそれは」

こいしは出来上がったばかりのホットケーキに飛び付き、

「あっふ！？」

「もう、慌てて食べるからよ」

「でもおいひーよ？」

「私にも寄越しなさいって」

「せっかちなあ……あ、そうだ」

あることを思いついて、桜は生地の入ったボウルの前で指を弾いた。光の粒子が生地に降り注いだのを確認してから、それを先ほど同じようにフライパンの上で焼いていく。

「今何したの？」

「ん？ ちょっとやってみたくてさ」

「???」

「……よし、二枚目完成っ」と

「それじゃ、もうわよ？」

出来上がったホットケーキを、今度は霊夢がつまみ食いする。

味わってるんだか分からないような速さで咀嚼してあっさり飲み込む。

すると軽く目を見開いて、

「あら……なんかコレ美味しいわね。さっきより少し上品な風味が」
「バニラエッセンスの香りを足してみた。でも、まさかこんな場所で役に立つとは思わなかったな」

そして桜は勢いを加速させ、ホットケーキを焼き続けた。

時々ちよつとカッコつけてフライパンを上げてホットケーキを宙返りさせると、

『『おおッ』』

と感嘆の声が響く。

……なんか嬉しい。

そのまま勢いでどんどん焼いていくと、やがて生地の入っていたボウルが空っぽになっていた。

「ふう。終わった終わった。それじゃ、私の分のホットケーキを……あれ？」

振り返ると、自分用にと皿の上に残しておいたはずのホットケーキが消えていた。

桜は手近な人物からにらみつけて、

「ちょっと、私を睨まないでよ。勝手に食べるわけないでしょ？」

「私も違いますよ？」

「んー？ 食べてないよ？」

「さあ……私も知らないわね」

『……………えッ!?!』

いつの間に現れたのか、紫がハムスターみたいに頬を膨らませながら戸の入口で立っていた。

そして、

「ごくん。……ふう、ゴチソウサマ」

「……わ、私のホットケーキがああああ!?!」

第二十四話 気分転換（後書き）

この『気分転換』というタイトルは桜達の気分転換という以外に、俺自身の気分転換という意味もありますw
急に面白可笑しなお話を書きたくなったから、桜達によつとふざけてもらいました。

さて、気が付けば5万文字を越えました。

一般的なラノベでいうとだいたい半分くらいですね。

ここまで続けられているのも、俺の作品を読んでくれている読者の皆様のおかげです。

ありがとうございます。

もう少し続くんで、よろしければ最後までお付き合いくださいな。

第二十五話 向き合う方法

「霊夢、それと桜ちゃん。二人に伝えることがあって来たのだけど……」

「……まず桜に謝りなさいよ。今頃神社の隅での字書いてるわよあの子」

「何の遠慮も無くガツガツ食べてたあなたたちにも責任があるでしょう？」

「ひ、開き直るな!？」

しかし、事実なので反論できない。

桜があんまりにも夢中で焼いていたため、結局誰一人何も言わずに食べ続けていたのだ。

私も後で謝らないと……

「で、伝えることって何よ？ まさか、この前言ってたカミサマと桜を会わせる方法が見つかったの？」

すると、意外だとしても言いたげに驚いた表情を作ってから紫が微笑んだ。

「あら、カンがいいわね。その通りよ」

「そんな方法、本当に存在するんですか？」

さとりは霊夢とともに話を訊いていた。

ちなみに、こいしは少し前に桜の元へと走っていった。

「ダメもとだったんだけどね。試しに訊いてみたらオーケーを出してくれたのよ。さすが、信仰のある神社の神様は違うわね」

「信仰のある神社の神様……あ」

霊夢の頭の中に一つの神社が浮かび上がる。
それは妖怪の山の奥にある神社、

「……守矢神社」

「そ。久々に行ったけど、相変わらず話の分かる神様だったわ」
「守矢神社って、たしか外の世界から来たっていうあの……？」

霊夢がうなずく。

「そうよ。いつぞや神社ごと幻想入りしたっていうとんでもない連中。なのに神様は二人だ立地条件良いわで反則よ反則」

「あなたもちゃんと努力すれば信仰だってお賽銭だって得られるというのに……嘆かわしいわね」

「で、あの神がどう協力するってのよ」

「それはお楽しみ」

「相変わらず肝心なことだけ教えないんだから……」

はあ、とため息ついてから霊夢はやれやれといった様子でうなずいた。

「わかったわ。行けばいいんでしょ行けば。守矢神社に」

「ふふふ。それじゃ、桜ちゃんを呼んでらっしゃいな」

「言われなくても呼ぶわよ。まったく……」

何が面白いんだか、紫は終始微笑みっぱなしだった。

・

「というわけで、守矢神社に行くんだけど……いつまで拗ねてるの桜」

「だって、私が全部作ったのに全部なくなっちゃって……」

どんよりとしたオーラが今にも目に見えそうなほどに落ち込んでいる桜。

そんなにホットケーキに未練があるのか。

「わかったわかった。一通り終わったらまた作ればいいでしょ。……とにかく、支度をしたら妖怪の山に行くわよ」

「……うん」

「ちったあ元気出しなさいっての。もう……」

「それじゃ、私達は失礼するわ」

「おねーさん元気出して！ がんばってね！」

古明地姉妹は妖怪の山へは同行せず、そのまま地霊殿へと帰ることになった。

あまりペット達に心配をかけたくないのだろう。

「それじゃ私と桜の二人つきりか。前みたいに勝手に動くんじゃないいわよ？」

「わ、わかってる！」

そして二人は簡単な身支度を整えると妖怪の山へと向かった。

第二十五話 向き合う方法（後書き）

短めなお話ですみませんね；

場面を切り替えるため、今回は短めのお話です。

それと、外伝は少し遅れそうです。

短編を考えてるんですけど、何分初めての試みなんで、ちゃんとアイディアを練って書きたいので；

もう一つ、こんな俺が言うのもアレですが、書いてほしいお話とかありますか？

まだまだ未熟者ですが、こんな俺にもしりクエストなんかあればご自由に申しつけくださいな。

出来は……どうなるか分かりません；

あ、けっこう適当なイメージだけでも構いません。

第二十六話 疾風少女

博麗神社から見て北に位置する妖怪の山。

その奥地にあるという守矢神社を目指し、二人は険しい山の斜面を歩いていた。

「……重い」

思わず漏れたつぶやき。

霊夢は両手で桜の車椅子の背もたれを必死に押していた。

二人が今歩いているのは傾斜がかなりきつい山道。

少しでも気を緩めたら二人まとめて一気に転げ落ちてしまいそうだ。

「ちょっと、重いとか言わないでよ。しかも私じゃなくて車椅子でしょ？ 私はそんなに重くな」

「そもそも私は飛んで行くって言ったのに、アンタが空飛ぶの怖がるから」

「だ、だから高いところはまだ苦手なの！」

「ハイハイ。そのくせ空を飛ぶのが夢なのよねえ……」

「だから今それを克服しようと練習して……」

「……桜？」

途中で声が聞こえなくなっただけを覗きこむと、桜は複雑そうな表情でうつむいていた。

「このチカラも私の中にいるカミサマのチカラ……なんだよね」

「そうね。でも、桜は桜よ。自分が使える能力なら好きに使いなさい」

「うん……」

「しかし、相変わらずうざったいぐらい高い樹ばっかねえ……」

桜も同じように上を見上げる。

空を目指してまっすぐ伸びる広葉樹林。

それが何本も何本もそびえている。

目の前も、横も後ろも。

同じ樹ばかりで方向感覚が狂ってしまいそうだ。

……本当にこの道で大丈夫なのだろうか。

「ねえ霊夢。守矢神社ってどんな神社なの？」

そういえば行き先のことをほとんど教えてもらっていなかった。
桜が訊ねると、霊夢の声音が少し低くなって返ってきた。

「守矢神社ってのは、もともとは桜の元いた世界の神社だったの。
けど、現代の人って信仰深い人っていないでしょう？ だから信仰
を求めて幻想郷に来たの」

「信仰信仰って、そんなに大事なもののなの？」

「私はそこまで重視してないけどね。けど、神にとっては別よ。信
仰は神の存在意義ってとこかしら。私はあまり興味無いわ」

「み、巫女の言うセリフじゃないよね……」

「それに、博麗神社は何の神を祀った神社なのか知らないし」

「え、そうなの？」

祀る神のいない神社にひとりぼっち。

それは、寂しくないのだろうか。

私だったら心が潰れてしまいそうだ。

「ちょっと話が脱線したわね。それで、守矢神社には二人の神と巫
女がいるの。一人は八坂神奈子。やさかなこもう一人は洩矢諏訪子。もりやすわこそして、

その二人を祀る東風谷早苗。こちやさなえま、ちょっと変わってるけど悪いヤツ
じゃないわ。安心してちょうだい」

「二人も神様がいるんだ……」

なんだかご利益ありそうな神社だな。

どんなカミサマなんだろう……？

桜があれこれ考えていると、フッと急に空が暗くなった。

「あやや？ これはこれは霊夢さんじゃありませんか！？」

「あれ？ 今声がしたような……」

「聞こえなかったことにして先へ進むわよ」

「……あ」

鈍い音の後に悲鳴のようなものが聞こえたような気がしたのけど……
桜が首をかしげていると、目の前に一人の少女が落ちてきた。
白いシャツに黒のミニスカート。
首には小さなカメラをぶら下げていた。

「霊夢、空から女の子が」

「石か何かのチカラでふわふわ落ちてきたなら助けないとだけど、
そいつは無視して構わないわ」

「ちょっとー！ メインヒロインの私がそんな扱いでいいんですか
！？」

ガバッと勢いよく立ちあがると、少女は元気に叫んだ。
そして身なりを整えると一度咳払いして、

「さて、改めまして。こんなとこで何してるんですか霊夢さん？」

「……まためんどくさいのが現れたわねえ」

「ややッ！？」

ため息混じりにつぶやく霊夢。

しかし、少女はそんなことお構いなしにカメラで桜を撮影し始めた。フラッシュの閃光が眩しくて、おまけに恥ずかしくて両手を覆って顔を隠す。

「だ、誰なんですかこの人？」

「おっと。私としたことが名乗っていませんでしたね。私は清く正しい射命丸しゃめいまるあや！射命丸文しゃめいまるあやと申します！」

ずいっと差し出された名刺をおずおずといった感じで受け取る桜。名刺には、『文文。新聞 編集長』と書いてあった。

「新聞記者……？」

「そうです。この幻想郷で起こるありとあらゆる事件や出来事を颯爽と取材し、その真実を求めお伝えするのが私の使命！」

「メインヒロインとか自分で言うヤツなんていないでしょうが嘘っぱち。どうせアンタの出番なんて当分ないわよ」

「またまた霊夢さんったら！ そんな冗談なんて全然面白くないですって」

ハッハッハと豪快に笑い捨てる文。

ひとしきり笑い終わると、今度はキリッと態度を一変させ手にしたペンを霊夢の鼻先に向けて、

「して、今回はどんな異変を解決するんですか？ あのすき間妖怪をギャフンと言わせるのか！？ それともいつそ幻想郷を支配しようと思論んでいるとか！？」

「……見ての通りよ桜。こいつはとにかくウザい天狗よ。記憶の片隅の片隅程度に覚えておいて」

「もう。せっかく私が真摯な態度で取材をしているというのにつれないですねえ……」

「そんなにヒマじゃないってコト。さっさと退いてちょうだい」

「それは失礼じゃ……」

そんな桜の言葉に瞳を輝かせ、文字通り疾風のような速さで桜のそばに寄り添う。

「ねえ、失礼な方ですよねえ……って、あなたはどちら様ですか？
見たところこの辺の方ではないようですけど」

「天春桜って言います。今から守矢神社に行くところなんです」

「守矢神社……？」

「あ、バカ。余計なコトを」

スクープの予感、を感じたのか文は急に瞳を輝かせ桜の足元にすが
るようにくっついて上目づかいに、

「私もお、ご一緒してもよろしいですか？」

まるで目薬をさしたばかりみたいに瞳を輝かせながら言った。

「あ、えっと……どうしょ？」

「嫌よ。これ以上面倒を増やしたくないの」

「私がいれば、守矢神社までひとつ飛びですよ！　こんな車椅子な
んかひょいっと持ち上げて」

「わわわ！？」

「ちよっと！　桜は高所恐怖症で、って!？」

霊夢の言葉も聞かずに、文は車椅子を抱えると地を蹴って空へと飛
びだした。

あまりにも唐突な出来事だったため、桜は成すがまま飛び上がり、

「き、きゃああああああ!？」

「このままマッハで飛ばしますよ!」

「ま、マッハ!? 無理無理止めて止めて止めてええええええ!」
「?」

さっきまで見上げていた木々が今は遙か眼下に広がっている。
文は止める気配などまったく見せず、やがて文が風を起こして加速しようとした瞬間、急に桜の天地がひっくり返った。

「……………え?」

「しまっ……!」

空中でバランスを崩し、車椅子からまっすぐに落ちていく桜。
青空がどんどん離れていき今度は地面が驚異的な早さで近づいていく。

「いやああああああ!??」

このまま落ちたら死んでしまう。

何とか能力を使おうとするが、心がパニック状態で何も出来ない。
死を覚悟した瞬間、目の前の巨木の枝に少女の姿を見つけた。

少女は樹の枝から一気に飛ぶと、桜をしっかり受け止めふわりと着地した。

「大丈夫ですか?」

「た、助かったあ……あ、ありがとうございます!」

桜は思わず少女に抱きついた。

「いやあ、絶妙なタイミングでしたねもみじ椀」
「……もみじ椀？」

桜が体を起こすと、目の前の少女が小さく微笑んだ。
赤と白の道着に純白の髪。
そして極めつけは、少女の頭でぴこぴこ揺れる三角の耳。

「ご無事でしたか？ 突然悲鳴が聞こえて空を見上げたら、貴方が落ちてきたのでビックリしましたよ」

「……………」

「あれ、どうしましたか？」

「……あ！ いや、あの、その！ ありがとうございます！」

思わず頭撫でたいのかもふもふしたいとか考えてしまった。
なんと無礼なことだろう。

……でも、ちょっとぐらい許してくれないかな。

「まったく！ アンタのせいで桜が死にかけたじゃない！ どう責
任取ってくれるのよ！？」

「す、すみません。つい勢いで……ははは」

「これ、先輩の仕業なんですか」

途端、椀の目が殺気を帯びる。

まるで蛇ににらまれたカエルみたいに文はぎくしゃくと固まってしま
まい、

「え、えっと……では！ 私はこれにて失礼しますね！？」

苦し紛れに空へと飛んで行ってしまった。

「あ、先輩！ 逃がしませんよ！」

柩は立ち上がると、桜と霊夢に一礼してから文の後を追いかけた。

「……えと、今の人たちはいったい？」

「あんなのでも一応呼ばないといけないのよねえ……はあ。とにかく、先を急ぎましょうか」

霊夢は桜を車椅子に乗せると、再び険しい山道を歩きだした。

第二十六話 疾風少女（後書き）

もちろん文はメインヒロインではありませんw

今日は特に報告することも無いのでこのへんで。
何かあったらご連絡くださいな。

第二十七話 神秘なる大鏡

険しい山道を越えると、やがて人が整備したと思われる石畳の道が見えてきた。

それは時々曲がりくねったりをしながら目の前の山の頂上へと伸びていた。

道の先を見上げると、雲がかかっている何も見えない。

しかも、博麗神社と違って長い長い階段が雲の中へと消えている。

「車椅子で行ける？ これ……」

「だから飛んだ方が早いって言ったのよ。……仕方ないから、ここだけ少し飛ぶわよ？」

「う……うん」

頬を引きつらせながらなんとかうなづく桜。

霊夢は車椅子の取っ手を握りしめると、ほんの少しだけ浮かんでから階段を上りだした。

「……普通、こういうのって自力で行かないとダメかな」

「普通はね。でも桜はしょうがないじゃない。高いところ、怖いんですよ？」

「そうなんだけど………霊夢」

「なに？」

少し間を開けてから桜が振り向いた。

「その、恐いけど……やってみる。だから、今はチカラを貸してくれなくていいよ」

「……そう。わかったわ」

桜は全身にチカラを込めると、以前教えられたように上へ上へと意識を向ける。

すると、桜は車椅子ごと軽く宙に浮かびあがった。

それでもだいたい十センチ程度だろうか。

ほんの少しだけ浮かんでいる、といった具合だった。

「いいじゃない。そうしたら、そのまま前へとイメージしてみなさい?」

「こ、こう……?」

桜の体が少しずつ階段を上っていく。

しかしその速度はかなり遅い。

けれど、少しずつ自分のチカラをコントロールし、克服しようとする桜の姿勢に霊夢は感心した。

「なかなか根性あるじゃない」

そして、霊夢はこっそりと桜の背中を支えてあげた。

もしもチカラのコントロールを失っても、これなら多少は大丈夫だろう。

ゆっくり、一段ずつ、霊夢と桜は階段を上っていった。

・

「ここが、守矢神社……」

長い階段を上り終わると、目の前に荘厳な雰囲気漂わせる社が見えた。

華美な装飾こそ施されていないもののどこか神秘的な輝きを放つ社。

辺りに人の気配はまるで感じられず、ピンと張りつめたような空気に桜は少し緊張した。

「す、すごく立派な神社だね」

「ええ、腹立たいわ」

石畳の道を歩いていると、社入口の階段に人影が見えた。

人影は竹ぼうきを持った少女だった。

霊夢の巫女服とは違う、白と青の巫女服。

ライトグリーンの長髪を、カエルとヘビの髪飾りできちんと留めていた。

少女は二人の気配を感じると、巫女服を揺らしながら振り向いた。

「霊夢さん、お久しぶりです」

霊夢を見つめる少女はとても可愛らしかった。

おっとりとした優しい瞳。

清楚な容姿に、言葉遣いも丁寧。

まさに大和撫子と言ったところだろうか。

桜は実際の大和撫子を見たわけではないが……

「紫に言われて来たのだけど……アイツらいるの？」

「社の方でお待ちしてますよ。さ、私についてきてください」

少女は竹ぼうきを適当な場所へ片づけると、社に向かってゆっくりと歩き出した。

「神奈子様、諏訪子様。お二人が到着しましたよ」

「ああ、ありがとう。こちらへ連れてきてくれないかい」

「はい、かしこまりました」

少女は社本殿の戸を開けると、二人を中へ招き入れた。

そして、部屋の奥では二人の少女がこちらに向かって座していた。

向かって右に座している少女は、赤い衣服に大きな縄を締めながら胡坐をかいていた。

大人びた容姿だが瞳はとても鋭く、どこか威圧的な印象だった。

そんな見た目に反して少女は比較的軽い口調で話した。

「やあ、ようこそ。守矢神社へ。私は八坂神奈子^{やさかなこ}。そしてこっちが」

左に座していた少女を示した。

先ほどの少女とは対照的に幼い外見をしていた。

少女というよりかは子供のように背丈が小さく、頭には不思議な形状の帽子をかぶっている。

「私は洩矢諏訪子^{もりやすわこ}。よろしくね」

声も子供みたいに妙に高かった。

そして二人の前に先ほどの少女が丁寧に正座してから、

「私、東風谷早苗と申します。以後、お見知りおきを」

深く深く礼をした。

「すごい……！ 霊夢の神社とはなんかいろいろ違う！」

「なんで今日に限ってそれっぽい演出してんのアンタら。そんなにヒマなの？」

噛みつくように霊夢が言うと、神奈子は軽く微笑みながら答えた。

「いや、たまには神らしく厳格な雰囲気を出そうかと思ったんだが……お前には無意味だったな」

「横の子は目を輝かせてるのにねえ？」

「桜、目を覚ましなさい。そんなんじゃないか危ない宗教に引っかかるわよ」

「危ない宗教って……」

「桜……君が桜か」

突然名を呼ばれ、桜は体を強ばらせながら視線を動かした。神奈子の鋭い瞳が桜を射抜く。

そうだ、まだ名乗っていなかった。

桜は車椅子のまま体を傾けて一礼をすると、

「あ、天春桜です！ えと、その」

神奈子はしどろもどろする桜を見て口元を緩めた。

「そこまで緊張しなくてもいいよ。普段の君らしく、振舞ってくれればいい」

「は……はい」

「アッハハ。キミも私達と同じ神様なんだからそこまで緊張する必要ないよ？」

「同じ、神様……」

諏訪子の一言で、桜の表情が少し暗くなった。

「早速で悪いんだけど、本題に入っているかしら？ 桜の中の人格

と対話する方法があるって訊いたんだけど」

「もちろんわかってるさ。早苗、例の物を」

「はい、神奈子様」

早苗はスッと立ち上がると、部屋の隅から大鏡を桜と霊夢の目の前に動かした。

「これは……？」

人の背丈の倍ほどはある大鏡。

曇り一つない大鏡は、静かに桜と霊夢を映しだしていた。

神奈子は自分の胸元に輝く鏡を示しながら大鏡のことについて説明した。

「それは私の『真澄の鏡』を応用して作った大鏡だね。内なる存在との対話を可能にする鏡なんだ」

「え、これって〇ーの鏡なんですか？」

「早苗、その鏡全然関係ないよ？」

「……コホン。では桜、鏡の前に」

言われた通り、桜は大鏡の前へと移動した。

車椅子と、巫女服と、ちょっと寝癖のついた前髪が映っている。

「うわ！ アホ毛だ！？」

「それはどうでもいいでしょ。で、こっからどうするの？」

「それじゃ桜ちゃん、用意が出来たら目を閉じて？」

前髪のアホ毛を直しつつ、桜はゆっくりと目を閉じた。

すると、急に宙を漂うような不思議な感覚に包まれると、どこか遠くの方から声が聞こえてきた。

そして気がつく、桜の姿だけが忽然と消えた。

「……これが対話の方法？」

「そう。あとはあの子次第だ」

・

「……ちゃん。……ちゃん。桜ちゃん！」

「え……？」

無邪気な子供のような声。

しかし、それは諏訪子の声では無かった。

聞いたことがあるような、ないような声。

そんな声に呼ばれて目を開けると、そこには自分そっくりな少女が銀色の瞳で桜の顔を覗き込んでいた。

第二十七話 神秘なる大鏡（後書き）

やっと、やっと俺の嫁登場だッ！

……そして、お話の綻びがそろそろ出てきそうで怖いです；

評価してくださった方、ありがとうございます。

平均5ポイントって、ほとんどの人が5ポイント付けてくれたんですよね。

すごく嬉しい半面、やや恐縮です；

アクセス数もちよっとずつ伸びつつあり、とっても嬉しいです。

えと、他になにか書くつもりでいたんだけど………忘れた；

第二十八話 カミサマの名前

「起きた？ 桜ちゃん？」

桜を起こした声の主は、驚くほど桜とそっくりな容姿をしていた。背丈もほとんど同じ。

着ている服も桜の服と似たような巫女服。

ただ、髪の色と瞳の色は違っていた。

瞳は銀色で、髪は頭のとっぺんから途中までは薄いグリーンなのに毛先の方は何故か真っ白だった。

「……あなたは、誰？」

「私はあなただよ、桜ちゃん」

少女は答えた。

その答えに、桜は眉をひそめた。

「……違う。私が桜よ。あなたは……あなたは誰？」

「えと、うんと……べ、別に違うんだけどなあ……ただ、今の私には名前がないだけで」

「名前がない？」

少女は桜の前にちゃんと座り込んだ。

「私は桜ちゃんに宿ったカミサマ。だけどね、つい最近生まれただけで名前がないの。だから仕方なく桜って名乗ってたんだけど……ダメだった？」

もの凄い上目づかいで見つめてくる少女。

見た目は桜と同年に見えるのに、中身はてんで子供のようだった。生まれたばかり……というのも何となく分かったような気がした。

「それは……まあいいか。それより、あなたは私に会いたがってたんだよね？」

「うん、そうなの！ 大事なお話があるの！」
「大事なお話……？」

桜が怪訝そうに少女を見つめると、勢いよく少女が立ちあがった。ポンポンとお尻を払う仕草を見てみると、自分そっくりなこの子がどうしてもカミサマだとは思えない。

さっきの諏訪子も似たようなものだが……

すると、少女はどこか寂しげな表情を浮かべながらポツリと言った。

「あのね。桜ちゃんにお願いがあるの。とっても大事なお願い」
「大事な……お願い」

・
脳裏に嫌な予感が走る。

今、この体には二つの人格が宿っている。
少女は三日月のように口の端をつり上げ、

『サクラちゃんがジャマなの。だから……キエテ？』

・
「……わ、私が邪魔なのね！？」

「ふえ？ そんなこと一言も言ってな」

「こ、来ないで!？」

勝手なイメージが先行して桜は怯え、少女を突き放すようにして後ずさった。

しかし、少女はその場に立ち尽くしたまま動かなかった。ただ寂しげな表情で桜を見つめていて、

「……ち、違うの？」

「何を考えてるのかよく分かんないけど……その、そっち行ってもいい？」

桜は警戒しつつ、車輪に手をかけながら小さくうなずいた。少女はふわりと浮かび上がると、ゆっくりと桜に近づく。やや間をあけて、少女は口を開いた。

「あのね、私に名前をつけてほしいの」

「名前……？」

「私にも説明してくれない？　今、桜は何をしているの？」

霊夢は噛みつくような勢いで神奈子と諏訪子に言った。

「そうだな、別に話しても構わないだろう。霊夢も『お七夜』^{しちや}ぐらい知っているな？」

「生まれた子供に名前を付けてお祝いをする、あのお七夜のこと？」

「さすが博麗の巫女。分かっているじゃないか」

「……半分馬鹿にされたような気もするけど。で、それがどうかしたの？」

神奈子は頬杖つきながら話した。

「それはなにも人間の子供に限ったことではないのだよ。我々神もまた同じ。ただ、ちよつとだけ差異があつてね」

「差異？」

「私たちみたいに生まれた時からチカラを持って生まれると、最初っから強いでしょ？ そうすると自分で神だって名乗れるの」

「強くてニューゲームですね！」

「……こほん。だが、誰かを依代よりしろとして生まれた神は違う。その依代に名を付けてもらわなければならないんだ」

「もし、名を付けなかったら……？」

霊夢の問いに神奈子は肩をすくめてみせた。

「もちろん名の無い神など信仰されない。つまり存在意義が失われ消えてしまふだろうね」

「でも、桜には関係ないことでしょう？ アイツは怯えてるつてのにそんなことしたら」

「そうだな。しかし彼女は偶然ながらもこの幻想郷にやってきた。同族を見捨てるほど私達は冷酷ではないし、もちろん現世から神が減るというのは寂しいものだ」

「だったら助けてあげたいじゃん？ だから、あのすき間妖怪にこの話を聞いた時はビックリしたよ」

「結局全部アイツのせいってわけか……」

後でお灸を据えてやろうか。

もしも紫が桜を連れてこなければ、桜は内なる存在に気づくことなく平穏な日々を……

そこまで考えて霊夢は深く息を吐いた。

「……それは、ちょっと違うのか」

「ただ、一つ気になることがある」

「それは？」

しばし沈黙が流れる。

小さな嘆息の後に神奈子が口を開いた。

「さっき彼女を見た時、内なる存在のチカラをずいぶん小さく感じた。何故かはわからないが大分消耗しているようだった」

「もしかしたら、あのカミサマは自分の体に限界を感じてあの子を」

「……！？　じゃあ桜が！」

霊夢は考えるよりも先に大鏡の前に走りだした。

符を構えて投げつけようとした瞬間、右手に鋭い痛みが走り符を落としてしまった。

振り返ると、諏訪子が鉄の輪を構えていた。

「何するのよ！？」

「それはこっちの台詞。今鏡を壊したら桜ちゃんが出て来れないでしょ」

「ふざけないで！　桜自身の存在が危ういつてのにそんな悠長なこと言っていられないでしょ！」

「大丈夫だよ。今神奈子がチカラが小さいって言ったでしょ？　今のあの子にそんなチカラ残ってないって」

「じ、じゃあ……」

肩を落として諏訪子が言った。

「たぶん、名付けてもらった後に、残ってるチカラを全部桜ちゃん

に託そうとしてるのかも……しれないね」

第二十八話 カミサマの名前（後書き）

誰か、早苗さんにツツコミを入れてください……w
いくら嫁と言えど、こんな扱いをさせる夜斗センセ
汚い、さすが夜斗センセ汚い……

あ、そうそう。

外伝はこれを完結させた後に書くことにしました
自分、不器用ですから……

ってのもあるけど、とりあえずは一つの作品に意識を集中させたい
のです；

それでは、また明日

何かあれば活動報告にでも書きますね

第二十九話 その名を呼べば

「あなたの名前を考えるの？ 私が？」

「そうなの。ねえ、何か私に似合いそうな名前ない？」

「き、急に言われても……」

桜は困惑した。

犬や猫に名前を付けてあげるのとは訳が違う。

相手は神様なのだ。

だから、ちゃんとした由来とか、漢字とか画数とか、いろいろ考えなくてはならない。

しかしもちろん手元に名前辞典などは持っていない。

「だって神様に付ける名前だよ？ そんな簡単に思いつくわけ……」

「犬ならタマとか、猫ならポチとかそんなんでいいから！ 早く名前付けてよー」

「だから犬猫に名前付けるのと違うの！ てか、それ逆！」

「じゃあ、間を取ってジョースターとかどう？」

「……………」

何故か、ここで突っ込んだら負けるような気がした。

桜はとりあえず必死に唸りながら彼女に似合う名前を考えていた。

「そもそも、神様ってどんな名前だった？ 私が知ってるような神様だと、イエスとかユダとか横文字ばっかだしな……」

少女の見た目は明らか日本人。

漫画やアニメならそれでも通用しそうだけど……

というか、神様に変な名前を与えて罰が当たらないだろうか。

そう考えていると、心なしか何だか緊張してきた。

「ねえ、桜ちゃん？」

「ちよっと待ってってば！ そんな急に名前なんて思いつかないって」

「そうなの？」

不思議そうに首をかしげる少女。

「そうなの！ どこかの誰かさんはね、人の名前とか必殺技の名前を考えるのに三週間かかったんだよ？」

「へえ……そうなんだ」

……そういえば誰だっけ。

忘れた。

気を取り直して桜がうなる。

すると、目の前の少女から淡い香りが漂ってきた。

これは……何の香りだろう。

とても優しい香り。

香水みたいに強すぎる香りじゃなくて、ほのかに広がるような甘い香り。

「これ、あなたの？」

「もちろん。私は香りを司る神様だもん。これぐらいどうってことはないって」

「香り……か」

ふと思いついた名前。

安直で恐縮だが、少女は気に入ってくれるだろうか。

「ねえ」

「なあに？」

「あなたの名前……『カホリ』でどうかな」

「カホリ……？」

「うん。香りを操るから『カホリ』。『かおり』だとそのまんまだから、少し洒落た感じに『カホリ』」

「……………」

ひどく安直なネーミングだったが果たして。

少女は無言で思案している。

どうだろう、気に入ってくれるだろうか。

桜はドキドキしながら少女の返事を待った。

やがて、少女は笑顔でうなずいた。

「カホリ……うん、カホリ！ 可愛い名前だね！ ありがと、桜ちゃん！」

「えへへ、どういたしまして」

すると少女の、カホリの全身が突然輝きだした。

「え！？ な、なに……！？」

「やっと名前が付いた。名前を付けてもらった。嬉しいよ桜ちゃん。これで、思い残すことはないかな」

「思い残すこと？」

そんな縁起でもないと言いかけた時、カホリの手が桜の手を握りしめた。

とても小さく、けれど春に注ぐ太陽みたいに暖かい手だった。

「あのね、桜ちゃん。すっごく大事な話があるの。訊いてくれる？」
「う、うん……」

カホリの真剣な眼差しに見据えられて、桜はうなずいた。
そしてまた寂しそうな顔をして言った。

「もうね、私消えちゃうの」
「え……？」

カホリの言葉の意味が分からなかった。
消える？

今名前を付けたばかりなのに？

「それってどういう……」
「この前、私が妖怪と戦った話は聞いた？ 私はもともと強いチカラがあったわけじゃないからあの時にけっこう消耗しちゃってね……そろそろ消えちゃいそうなんだ。だから最後に、桜ちゃんに会いたかったの。会って、名前を付けてもらってお話して……とっても楽しかったし、すごく嬉しかった」
「……………」

「だけど、完全に消えちゃうわけじゃないの。……その、これは桜ちゃん次第なんだけど」

「私、次第？」

カホリはうなずく。

「桜ちゃんが私を受け入れてくれるなら……なんだけどね」
「カホリちゃんを受け入れる……？」

少し目を伏せがちにカホリがつぶやく。

「もし、私を受け入れてくれるなら……今ここでもう一度私を呼んでほしいの。私の、名前だけじゃなくて……」

「……わかった」

「え？」

桜はカホリの頭を撫でながら、名前を呼んだ。

恐怖心など、いつの間にか消え失せていた。

カホリを受け入れるなんて、今の桜には容易いことだった。

だから、この名を呼んだ。

そつと右手を差し伸べて……

その瞬間、世界が白い閃光に包まれた。

・

霊夢と諏訪子が大鏡の前で立ち尽くしていると、大鏡が突然光り輝きだした。

「な、なに!？」

すると、激しい光の中から桜がふわりと舞い降りてきた。

霊夢は慌てて桜を受け止めると、安堵の息を漏らした。

「桜!？ ……よかったあ、無事だったのね」

「あ、霊夢。頭上注意」

「頭上って、へ？　ぎゃあああああ！？」

霊夢の頭上に乗り手を失った車椅子が真っ逆さまに落下。
ほどなくして、守矢神社に霊夢の悲鳴が響き渡る。

「……ん、あれ、私……」

「あ、桜ちゃん目が覚めたね」

「ったく、どうして私ばかりこんな目に……桜！　自分の車椅子ぐらいちゃんと管理しなさ」

そこまで言いかけて、霊夢の言葉が突然止まった。
わなわなと手を震わせながら、桜の双眸を指差して、

「さ、桜！？　あ、アンタ目が……？」

「目……？」

後ろの大鏡を振り返ってみると、右目は黒く、しかし左目は銀色に染まっていた。

第二十九話 その名を呼べば（後書き）

そのギャグセンスどうなのよ……

と、自分に何度も説教したいです；

そして、今すぐお気に入りになってるのが週間アクセス数です。

995って……

あと5人で1000人じゃないか……ッ！ 惜しいッ！；

第三十話 現人神

鏡から帰ってきた桜の瞳は黒と銀のオッドアイに変わっていた。右目はいつもと同じように黒いのに、左目だけは何故か銀色になっている。

桜は鏡の前でその瞳を黙って見つめていた。

そんな桜の様子を、霊夢は怪訝そうに見つめて、

「……これ、どういうこと？ 桜に何があったの？」

「見ての通りさ。桜は内なる神と融合したんだ」

「あのチカラを全部桜ちゃんに託したんだね。瞳の色が片方違うのはそのせいだね」

「桜、なんともない……？」

桜は霊夢の声には反応せず、ただ呆然と鏡を凝視していた。

「さ、桜？」

「今はそつとしておいてあげた方がいい。とりあえず、我々の役目は終わったな。さて」

すると神奈子が深刻そうな表情を浮かべて霊夢を見据えた。

思わず霊夢は唾を飲み込む。

「これからのことだ。この一件で彼女は人間でありながらそれを超あらいひとがみ越した存在、現人神となった。これはつまり……」

「まさか、元いた世界に帰れないってこと？」

神奈子は微かに首を振った。

「厳密に言うそうではない。だが、私個人としては人として帰すのは少し惜しいと思う。このまま幻想郷に留まり修行を積むのも一つの選択肢だと思うのだが」

「そ、そんなの私に言わないでちょうだい。桜に直接言いなさいよ。私には関係ないわ」

「そうか？ 霊夢と彼女はずいぶん親しい間柄ではないのかい？」

「……違うわよ。私は紫の気まぐれに付き合わされてるだけ」

「そうか」

そんな霊夢の様子を見て神奈子はフツと微笑した。

「とりあえず、用は済ましたわ。もう帰ってもいいのでしょうか？」

「ああ。構わないよ」

「それでは、入り口までお送りしますね」

霊夢は車椅子の後ろに回ると、特に二人には礼も言わず本殿を出ていった。

・

「桜は現人神になった……か」

神社の縁側で、霊夢は一人で星空を見上げていた。

守矢神社から帰ってから、桜は終始無言で食事もとらず、そのまま部屋で眠ってしまった。

ほんの少し前まではただの女の子だったのに、神社に入った途端に現人神。

こんなショックな出来事を平然と受け止められるヤツの方がすごい。

「……なんでかしらね。釈然としないわ」

少し生意気で、高所恐怖症のくせに空を飛びたがって、おまけに香りなんぞ操ったりして。

紫の気まぐれで連れて来られたヤツなのに、迷惑なのに、どうして心が引つかかる。

……これで、いいのだろうか。

「空を飛ばしたらそれで終わりと思っていたのに、どうしてこうなったのかしら……」

と、そこまで考えて霊夢は首を乱暴に横に振った。

「べ、別に私には関係ない。アイツが帰ろうが、神になろうが、私には……」

「ずいぶんと大きな独り言ね」

目の前にフツとすき間が現れると、その奥から紫が静かに現れた。心底不快そうに顔をしかめながら霊夢は言った。

「盗み聞きはお行儀が悪いんじゃないの？」

「私は別よ。それにしても、ずいぶん面白い表情かおしてるわね」

クスクス笑いながら、紫は霊夢の隣に腰掛けた。そして先ほどの霊夢のように星空を見上げる。

「……ごめんね」

「……は？」

思わず自分の耳が壊れたんじゃないかと疑う霊夢。
今、紫が謝罪したような気がしたのだが気のせいだろうか。

「まさか、連れてきた子が現人神になるなんて思ってもみなかったわ。こんな大事おおごとになるなんてね」

「……本当よ。おかげでいい迷惑よ」

「それで、桜ちゃんのことなんだけど……」

紫は途中で言葉を切ってしばらくうつむいていた。
何か、迷っているようにも見える。

霊夢はこの微妙な間に耐えきれなくなって思わず先に声をかけた。

「なによ。桜がどうしたの」

「もう帰してあげた方がいいんじゃないかしら」

「……………」

「霊夢、あなたは どうしたい？」

すると紫が悪戯っぽく笑みながら訊ねた。

霊夢は……

答えなかった。

いや、答えられなかった。

自分でも、答えが分からなかった。

・

「帰る……か」

部屋の戸に寄りかかりながら、桜は霊夢と紫の話を訊いていた。

『……桜ちゃん？』

「私も、よく分かんなくなっちゃったな……」

そして桜は静かにその場を後にした。

第三十話 現人神（後書き）

昨日ね、お気に入り登録件数が49件だったの。
50件になったら何か記念にやろうかと考えてたの。
そしたらさっき見たら55件だったの。

……越えてるッ！？w

お気に入り登録してくださった方々、いつもコメントしてくれる方々、本当にありがとうございます。m（　　）m
これも、読者の皆様のおかげです。
拙い文章ですが、たくさんのお評価もいただいてホントに恐縮です；；
俺ももっと文書力が向上するよう、これからも努力していきます！

第三十一話 迷う心

守矢神社の一件から一夜明けて、桜は博麗神社の丘の上で一人朝日を眺めていた。

妖怪の山から顔をのぞかせる朝日が眩しい。

ゆっくりと、だが少しずつ明るくなっていく幻想郷。

眼下に広がる世界を見つめながら、桜は自分の元いた世界のことを考えていた。

「今頃、病院はどうなってるんだろう。それにお母さんとか親父とか……」

もう何度この世界で朝日を見ただろうか。

こちらの世界と元いた世界が同じ時間だとしたら、かなりの時間が経過している。

両親は心配しているんじゃないか。

他の人にも、迷惑をかけているんじゃないか。

それなのに。

元いた世界のことを気になるのに、心の中では正反対の気持ちが生じていた。

ただ、それを認めるのは……

『桜ちゃん……』

「……分かんない。ホント分かんない。どうしたらいいのかな」

「桜ー？ 朝食の用意が出来たわよ」

神社の方から霊夢の声が聞こえてきた。

桜は車椅子をターンさせると、なだらかな坂道を下っていった。

・

「……………」

「……………」

そして無言の食卓。

唯一聞こえるとしたら二人が咀嚼する音だけで、それ以外何も音がしなかった。

ただ黙々と、箸を動かし食べるのみ。

『……桜ちゃん、あの、ちょっといい？』

「……………」

『き、気まずい空気だな……』

二人ともうつむきながら食事を進める。

暗い表情のまま、やがて霊夢が箸を止めた。

「……桜」

「何？」

顔を上げようとして、一瞬桜と目が合うと何故か霊夢は目を反らして、

「その、元いた世界に帰るっていう話だけど」

「こんにちわー！」

『『うっわああ!?!?』』

いつの間にか食卓にちゃんと座っていたこいしが元気よく挨拶した。

まさしく鶴の一声。

思わず霊夢も桜も啞然としてしまう。

「二人ともどしたの？ 何だか世界の終りみたいに暗い顔してさ」

「う、うんと……」

「こいし！ アンタいつの間に……ってことは」

振り返ると、縁側にちゃんとさとりが立っていた。

若干申し訳なさそうな顔をしていた。

「すみません……私は止めたんですけど」

「もう少し空気を読めるように注意してちょうだいよ……って、どうしてここにいるのよ？」

「桜さんのことが気になって今日は参りました。その、あまり元気もないようですし……」

「……いろいろあったのよ」

そう言って桜の方へと目をやる。

こいしに突っつかれながら、桜は重いため息を吐いていた。

「……少し、いいかしら？」

さとりが桜の一步前へと出ると、小さな手を差し伸べた。

「さとりさん……？」

「ちよっと、二人っきりで話しましょうか。さ、どうぞ？」

慣れた手つきで桜を車椅子に乗せると、さとりは鳥居の方へと向かって歩き出す。

「霊夢、少し出かけてくるわ」

「……わかったわ。あまり遠くまで行くんじゃないわよ?」
「わかってます。では、行きましょうか」

車椅子を押しながら、二人は坂道を下っていった。

第三十一話 迷う心（後書き）

ただいま、

ユーザー登録 13名

お気に入り登録件数 56件

評価ポイント 203pt 本当ありがとうございますm

（m

そして、ただいま怖い話を集めております。

何かホラー物を書きたくて資料としてちよいちよい集めてるんです。

あ、二次創作じゃないです。

ちゃんとオリジナルで書きますよ。

んー、これが終わったら外伝書いて、それから作業に取り掛かろうかな……？

第三十二話 見えない未来

「さて、この辺りでいいかしら」

神社から少し離れた場所にある小川まで歩くと、小川の土手に桜をゆっくりと降ろした。

その横にさとりも座り込む。

春の麗らかな風が二人を通り抜ける。

時々タンポポの綿毛が飛んでいくのを見ながら、さとりは桜に話しかけた。

「心の中、すぐぐちゃぐちゃしてますね。……これからのことで迷ってるんですね」

「……うん」

桜は小さく答えた。

この春風にかき消えてしまいそうなほど小さな声だった。膝を抱えながら、桜は左目を片手で覆った。

「この世界に来て、信じられないことばっかりすぎて混乱してる。最初は早く帰りたいなって思ってた、途中で空を飛ぶよう頑張りたいなって思って、そしたら自分はカミサマになって……」

「無理もないですよ。それだけの出来事をいっぺんに受け止められる人なんていませんから」

「カミサマ……か」

そのまま顔を膝に埋める桜。

うつむく桜を見ながら、さとりはポツリとつぶやく。

「今は、楽しくないんですか？」

「……どうということ？」

桜が顔を上げると、さとりが優しく微笑んでいた。

「少し前、似たようなお話をしたのを覚えていませんか？　あの時のあなたは混乱していると言いつつも、楽しんでいる、と前向きに答えてくれました」

「そういえば……そうだった」

自嘲気味に桜は微笑んだ。

その時の会話を思い出すように、さとりは軽く視線を上げながら話した。

「あの時のあなたは、この幻想郷という世界に来て、想像も出来ないような冒険が出来て、私や霊夢さんといった様々な人や妖怪と出会えて楽しいと、素直に答えてくれました。その気持ちは、今も心の奥にありますか？」

「……あるよ。もちろん。そんな簡単に消えるような気持ちじゃないよ」

「それなら、大丈夫です」

「大丈夫って……」

さとりは桜に向かいあうと両手を握って笑った。

「あなたはあなたらしく、振る舞えばいいんです。神だとかそんなこと関係ありません。あなたはあなた、桜さんでしょう？」

「さとりさん……」

「それに、弱気なあなたはらしくありません。そうは思いませんか？　いつも私たちに見せてくれる笑顔と香りで、私たちを笑顔にし

てくださいいな」

「笑顔と香りで……」

視界が霞む。

どうしてだろう、さどりの顔が滲んで見える。

悲しくもないのに涙が出てくる。

涙があふれて止まらない。

目の前で泣くのは恥ずかしいのに、涙があふれる。

「……わかった。わかった。そうだね、うだうだ悩むのは私らしくないね。ありがとう、さとりさん」

「お氣になさらず。それでは、戻りましょうか」

神社へと戻る途中、突然カホリの声が聞こえてきた。

『今の桜ちゃん、いい表情かおしてる』

「そうかな？ ……でも、何となくわかったよ。今私がここでやるべきこと」

『それは？』

「この能力で、人を幸せにすること、かな」

『へえ、ちよつと楽しみ』

「神社に帰ったらカホリちゃんのこと、紹介しないとね」

『やり方、覚えてる？』

「もちろん。失礼のないようにね？」

『わかってるよ。ふふ、何だかドキドキしてきちゃった』

「……あら？ そんなに面白そうな顔をしてどうかしたんですか？」
「へ？ あ、ううん。なんでもないよ。後で話すから」
「はあ……？」

怪訝そうな表情のまま、さとりは神社の鳥居をくぐった。

第三十二話 見えない未来（後書き）

もう70000文字になるのかな？

ずいぶんたくさん書けるようになってきたなあと、自分でもちよつと嬉しいです。

……中身はスカスカですけど；

地の文がすぐく下手くそなんですよねえ；

第三十三話 一つの体、双つの心

それから桜はいつものようにさとりと能力の修行をして、昼食を済ませ、今度はさとりと霊夢と一緒に空を飛ぶ練習をしようと、普段通りに過ごした。

そして夕日が西に傾きかけたころ、ふいに桜は古明地姉妹を呼びとめた。

「二人ともちよつといい？」

「なあに？」

「……ええ、少しぐらいなら構いませんけど？」

二人はくると踵を返し、神社の方へと戻っていく。

部屋の中で霊夢と座って待っていると、桜の方からおずおずといった感じで話し出した。

「その、実は紹介したい人がいてさ」

「紹介したい人？」

三人が顔を見合わせる。

桜は霊夢たち以外に面識などないはず。

勝手に外出した時に会った人物……だとしても、今日はさとりが付きっきりで誰かを誘ったという様子も見受けられない。

それなのに、誰を紹介するのだろうか。

三人が不思議そうに桜を見つめていると、桜は息を軽く吸い込んで瞳を閉じた。

『……もういいの？』

「うん、いいよ」

虚空に声をかける桜。

霊夢はそれを心配そうに見つめていると、

「桜？　いったいどうし」

瞳を閉じたまま桜が右目だけを覆うと、突然桜の全身が淡い光に包まれる。

そして、桜はゆっくりと瞳をあけて口を開いた。

「……んん？　もう大丈夫？　私出てきてる？」

「は？　桜っては何を言ってる？」

「……だ、誰ッ!？」

さとりは軽く身構えながら桜を指差す。

もちろんそこには瞳を閉じた桜が車椅子に乗っているだけ。

霊夢は何を言っているのか分からない様子で、

「さとり？　こいつは桜よ？　急に血相変えてどうしたの？」

「この人は桜さんではありません！　き、急に心が見えなくなってる……」

「へ？　どゆこと？　おねーさん……?」

ゆっくりと桜が目を開くと、三人全員が驚愕の表情を浮かべた。

「瞳が……銀色に!？」

銀の双眸が、驚く三人を一瞥する。
するとニッと口元をつって、

「やあっと出られた！ いやあ、ずっと心の中にいるのって退屈なんだよねえ……」

ウンと両手を高く上げて伸びしまくる桜の様子に、三人とも開いた口がふさがらない。

そんな三人の様子を見て、慌てて姿勢を戻す桜。

「あ……こほん。は、初めまして。私桜ちゃんの中にいる神様です」

「……ちよつと待ちなさい」

霊夢がすつくと立ち上がり、部屋のタンスからでかどしたハリセンを取り出して桜の背後で野球の右打者みたいに構える。

一意専心、全ての力をハリセンに注ぎ込むと霊夢は勢いよく振りかぶって、

「ズエアッ！」

「あだあッ!?!」

桜の後頭部がバチーンと小気味いい音を上げた。

あまりの衝撃と痛さに頭を抱えてうずくまる桜は涙目で霊夢をにらみつけ、

「な、何すんだこのバイオレンス巫女!?!」

「急に紹介したい人がいるとか何とか言ってふざけんな!?!」

「れ、霊夢!?! ちよつとちよつと!」

さとりが慌てて霊夢に耳打ちする。

「……は？ なに？ コイツはホントに桜じゃない?」

ごによごによ。

「……桜と融合した神様？」

さとりは無言でぶんぶんと首を縦に振りまくる。

つまり、今勢いよく殴り付けたのは桜じゃなくて中の神様ってことで……

サーッと青ざめていく霊夢。

振り返ると、ジト目の桜が微笑んだ。

・

「こほん、気を取り直して自己紹介するね。私はカホリって言います。『天春カホリ』です」

正座している霊夢の頭上にやたらデカイタンコブが出来てるのはさておき、桜は、いやカホリは簡潔な自己紹介をした。

「神様になったから心が読めなかったのね。なるほど、納得いたしました」

「おねーさんじゃないんだあ？ ふうん……？」

「ああ、二人とも敬語とかいらないからね。桜ちゃんに接するのと同じ感じでいいよ」

「じゃあカホリ」

「『さま』は？」

「私だけ扱いが違うじゃないの!？」

暴れる霊夢を必死でなだめる古明地姉妹。

『カホリちゃん、その、霊夢もお世話になってる人だから』

「むう……桜ちゃんが言うならしょうがない。特別に許してやるか」
しぶしぶといった感じでうなづくカホリ。

「桜さんとお話出来るんですか？」

さとりが少し身を乗り出してカホリに訊ねた。

カホリは大きくうなずくと、自分の頭をコンコンと突つつきながら、

「うん、話せるよ。これも全部桜ちゃんのおかげなんだけどね」

「どゆこと？」

「それに『天春』って、どうして桜の姓を名乗ってるのよ」

「はいはい。全部ちゃんと答えるから順番にね」

まずは、とカホリは人差し指を立てて話し出した。

「そもそも、私はあの時に消えちゃうはずだったの。だけど、桜ちゃんの心に受け入れてもらってね。なんとか消えずに済んだの」

「受け入れるとは、どういう意味かしら？」

「ううん……簡単に言うと、家族として迎えられるって感じかな。

今の私と桜ちゃんは云わば家族みたいなものだし」

「家族……」

「そ。私と桜ちゃんは家族で一心同体なの。だから心の声で話が出るんだよ」

「かなり無理やり繋げたようにしか聞こえないのだけど……ま、いいでしょ」

「うんうん。分かればよろしい。んつと……じゃあ自己紹介終わり。代わるね」

そして、今度は左目を手で覆うと再び息を吸い込んだ。
瞳が開くと、片方だけが黒く残っていた。

「ごめんね。霊夢やさとりさんたちに、私の中のカホリちゃんを紹介したくて突然だったけど……」

さとりは軽く首を振って桜を見つめた。

「いいえ。紹介してくれてありがとう」

「うん。……それで、これからのことなんだけどさ」

桜は車椅子の向きを少し変えて、今度は霊夢に向き直った。

「霊夢、前にこの神社で宴会するって言ってたよね？」

「ええ。それがどうかしたの？」

「私に出来ることないかな？ 霊夢にはすぐお世話になってるし、私も手伝いたいんだけど……」

「ううん……そうね。いいけど条件があるわ」

「せっかく手伝ってくれるというのに条件を提示するって……あら、なるほど」

「こ、こら！ 勝手に人の心を読むな！？」

「え？ どうしたの？」

顔真っ赤にする霊夢と、それを見てくすくす笑うさとり。

霊夢の心を読んだらしいのだが、もちろん桜にはさっぱりわからない。

「ほらほら、続けて？」

「う、うっさいわね……ったく。こほん。条件は一つ。それは」

「それは？」

何故か顔をそむけながら霊夢はボソツとつぶやいた。

「さ、桜が空を飛べるようになったら……よ」

第三十三話 一つの体、双つの心（後書き）

ちよいとリクエストちっくなものを頂いたんで考えてます。
上手くアイデアがまとまればすぐにでも書けそう。

……新しいオリジナル作品はどうしよう?；

第三十四話 空を目指して

それから桜はがむしやりに修行に励んだ。

早く空を飛べるようになるために。

早く霊夢に協力するために。

そのために、毎日毎日修行を続けた。

しかし……

『……桜ちゃん。その、これで飛んでるつもり？』

車椅子はたしかに宙に浮いている。

だが、誰がどう見ても高さが足りない。

今はちょうど20センチ程度地面から浮いているだけだった。

「ううん……心が震えてますね。高いところが本当に苦手なんです
ね」

「だ、だだだって落ちたら死んじゃうんだよ？ グシャッ！ って
ミンチになっちゃうんだよ！？」

「その光景を頭の中で瞬時に浮かべる想像力はある意味すごいんで
すが……」

さすがにさとりもお手上げだった。

そもそも高所恐怖症の桜を飛ばすなんて無謀を通り越して無茶な気が
しなくもない。

「……そうだ。どうせならお空を呼んでみましょうか。あの子なら
大きな翼で飛べるから頼もしいだろうし」

「え？ お空さん……？ 翼なんてあったっけ……？」

「お空は地獄鴉じごくからすの妖怪なんだよ。空を飛ぶときはバサッて翼を広げるの」

「地獄鴉……？」

「こいし、ちょっとお願いできる？」

「はい」

と、さとりに頼まれこいしがギュッと目をつむると、どこからともなくバサバサと羽音が聞こえてきた。

空を見上げてみると、太陽を背に誰かがこちらに向かって飛んでいた。

「さとりさまーッ！」

ぶつかったら確実に死ねるような勢いで空から少女が急降下してきた。

ドンッと力強く着地して踏ん張ると、少女はそのままの勢いでさとりに飛びついた。

「……え？　今こいしちゃん何かした？」

「さあ？」

「さとりさまにこいしさま。この人誰？」

初対面でもないのに指を差されて戸惑う桜。
以前に自己紹介をしたと思ったのだが……

「桜さんですよ。忘れちゃったんですか？」

「んにゅ？」

「ほら、この前地霊殿で会ったでしょう？」

「……………」

やや間があってから、お空はポンと手を叩いてうなずきだした。

「ああ、あの時の？ 初めまして！ 霊鳥路空だよ！ お空って呼んでね！」

「……は、初めまして」

「それで、どうして私を呼んだの？」

桜の両手をブンブン振り回しながら空は訊ねた。

「桜さんの空を飛ぶ手伝いをしてほしいの。桜さん、高いところが苦手なだけ」

「わかった！ この人と一緒に飛べばいいんだね？」

「ほへ？」

すると、空は桜を抱きかかえると背から翼を広げグツと構えた。飛翔2秒前、そして空は力強く地を蹴って空へと向かって一直線に飛び出した。

「いッ！？ ちょ！？ んにゃあああああああ！？」

「お、お空！？ ダメよ！ 桜さんは高いところが苦手で」

「……もう聞こえてないよおねーちゃん」

豆粒程度にしか見えない二人を見上げながらさとりはあたふたと取り乱して、

「ど、どどどどうしよう！？ わ、私じゃあそこまで高く飛べないわ！？」

「わ、私もちょっと……」

「こいし！ あなたの能力で」

「ごめん……実はもうMP切れちゃって」

「いつからMP制に!? って、そんなこと突っ込んでる場合じゃなくて、えと、えっと!?!」

気がついた時、二人の姿は影も形も見えなくなっていた。

・

高度……何メートルだろうか。

今桜の真下には博麗神社ではなく真っ白な雲が見えている。

それは言うまでも無くめちゃくちゃ高い場所を飛んでいるということとで……

「ん? どしたのおねーさん。さっきから体ガクガクしてるよ?」

「あわわわ……た、高過ぎ……ヒッ、お、お空さんそろそろ降ろして……」

「降りたいの? んじゃ、ほい」

「……ほい?」

空はあっさりと両手を離れた。

ふわり、と何とも言えない感触が全身を包む。

その瞬間はいい。

ただ、それを過ぎると今度は重力が桜を手招きして歓迎し始める。

「ぎゃあああああああ!?!」

空の笑顔がどんどん、どんどん遠く、小さくなっていく。

「いやあ、おねーさん元気だねえ。急上昇したかと思えば、今度は真っ逆さまに急降下したがるなんて。私もやろっと!」

「ちぎゃあああああう!？」

そもそも私は飛んでない、と全力で言いたかったが高速落下中の桜にそんな余裕など欠片も無い。

桜はぎゃあぎゃあ叫びながらも、なんとか体勢を変えようとしてクルクル回っていたが。

「助けて助けてタスケテええええ!？」

「……ありやりや。ちよつとマズそだな」

流石の空も叫びまくる桜を見て危ないと判断すると、桜の真横まで近づき翼で覆うように抱きかかえた。

ほのかな温もりに包まれ桜はどうか我を取り戻した。

「お、お空さんッ!？」

「えへへ、ごめんね。だいじょぶだった？」

「だいじょぶなんです……」

「アッハハ」

お空も反省して、今度はしっかりと抱きかかえながらゆっくりと降下し始めた。

ふと、桜はお空の顔を見つめた。

こんな高い場所にいるのに、顔色を変えず平然と飛べるのはどうしてなのだろうか。

落ちたら流石に妖怪でも死ぬのではないのだろうか。
恐く、ないのだろうか。

「あの、お空さん」

「ん? なに?」

「お空さんは、空を飛ぶの恐くないんですか?」

「恐い？　どして？」

さっぱり理解できない、とても言いたげな表情になってお空が見つめ返してきた。

「どうしてって」

「空飛ぶの、楽しいよ？　景色があんなにちっちゃくなって面白いじゃん」

「え、えっと……」

お空が親切に指をさして示してくれたが、とても見れる気がしない。この地に足付かない感覚がどうにも慣れない。

そのうち、誰かが私の足を引っ張って引きずり降ろそうとするんじゃないかと不安で不安でたまらない。

そんな怯えた表情で返すと、お空はニコニコしながら、

「恐いとか、考えなければいいんじゃない？」

「考えなければ……って」

「私、空を飛ぶ時なんにも考えてないよ。ただ翼を広げて、思いっきり飛ぶだけだもん。歩くより速いし、何より気持ちがいいし」

「う、ううん……」

桜には考えられない理論だった。

どうしても、頭の中では真っ先に落ちることを想像してしまう。

「桜は、高いところダメ？」

「今だって全身震えるぐらい恐いもん」

「簡単なのになぁ。落ちること考えるんじゃないくて、ただ落ちなければいいだけなのに」

「落ちなければ……ううん」

やがて、博麗神社が足元に見えてきた。
お空と桜はそのままゆっくりと着地した。

「ご、ごめんなさい！ 大丈夫でしたか？」

「あ、えっと……うん。大丈夫だったよ」

「楽しかったね桜！」

「う、ううん……」

天真爛漫に微笑むお空に、桜はただただ苦笑いを浮かべるだけだった。

第三十四話 空を目指して（後書き）

ううん、何故か作業ペースが落ち気味です；；

別に体調悪いとかそういうわけじゃないんだけど、ううん……？

ま、そのうち治りますよb

第三十五話 アクシデントスカイ

その後、修行を終えた桜は一人縁側でこっそり練習をしていた。全身にチカラを込めて意識を上へ上へと向ける。するとゆっくりと足が地を離れて浮かび上がる。ここまでは簡単に出来るようになったのだが……

『桜ちゃん。浮かぶだけじゃなくて前に進まないと』
「わ、分かってるんだけど……」

前へ動きを意識するのも地味に大変で、少しでも意識が揺れるとあっという間に落ちてしまう。さっきも試してみたが、体が前のめりになるだけで結局失敗した。守矢神社の時にはなんとか階段を上れたというのにどうにも要領を得ない。

『よし、んじゃ私と交代しよっか。お手本見せたげる』
「ううん、そうだね。お願い」

桜の両目が銀に変わると、カホリは全身のチカラを容易くコントロールし、桜の何倍もの速さで浮かび上がる。そしてそのままずっと神社のまわりを一周してみせた。車椅子に着地してから桜の意識に呼び掛ける。

「どう？ わかった？」

『どうしてそんなに簡単に出来るかなあ……私には真似できないや』

「そんなことないよ。ただ前に飛ぶ！^{まが}ってだけ考えてれば簡単だよ。あとは曲がりたくなったら凶……間違えた。曲がれて意識し

て体を傾ければすぐだよ」

『簡単に言うねえ……』

心の中の桜がため息をついた。

もう一度交代すると、同じように意識を集中させる。

そして再び前へと意識を向けるが、どうしても心が躊躇ってしまう。別段高く飛んでるわけでもないのに無意識のうちに恐怖がこみ上げてくる。

『……しょうがないか。今日はもう休も？』

「う、うん……はあ」

膝に付いた砂を払いながら歩きだすと、鳥居の向こうから誰かが歩いてきた。

「ほら、早く行こうよ！」

「ま、待ってってばお姉ちゃん……」

「あれは、里の子供たち……？」

鳥居をくぐって現れたのは少年と少女、その後から老婆がゆっくりと歩いてきた。

恐らく二人の祖母だろう。

三人はそのまままっすぐ歩いて賽銭箱の前に立つと、銅銭を投げ入れて両手を合わせていた。

「数少ない参拝客ってわけか」

『霊夢は今買いだし中だったっけ？　なんかカワイソだね』

「婆ちゃん！　ちょっと遊んでっていい？」

「ええ、でも気を付けてね？」

「「はい！」」

少年少女は桜のいる側と反対方向へと駆けだしていった。

ちょうど、桜がよく一人で物思いにふける時に行く丘がある場所だ。桜は老婆の前に姿を現すと小さく会釈した。

老婆もそれに気づくと合わせて会釈を返した。

「こんにちは」

「こんにちは……あら、いつもの巫女さんじゃないのね？」

「桜って、言います。今、霊夢さんはちょっと出かけて」

「そうだったの。あなたが留守を預かってるのね。ふうん……」

老婆にまじまじと見つめられて少したじろぐ桜。

「あ、あの？」

「ああ、ごめんなさい。可愛らしい巫女さんだったので、ちょっと見惚れちゃって」

「か、可愛らしい……」

老婆に言われたただけなのに、桜は照れ臭くなって全身を真っ赤にさせた。

それから桜は老婆と二人で特に他愛のない話をしながらのんびりと過ごしていた。

昔はかなりの人たちがこの博麗神社に参拝に来ていたことや、昔の巫女のこと。

過去の博麗神社は、今のこの有様からは考えられないほど信仰に満ちた神社だったらしい。

「信仰……ですか」

「そう。神様を信じるっていうのは心にゆとりを生むもんさ。まあ、まだあなたには分かり辛いかもしれないけど」

『私に信仰してみる？ 桜』

「ううん……遠慮しとく」

日も暮れて風が少し冷たくなってきたころ、老婆がふいに辺りを見回した。

「おかしいわね……あの子たち、どこまで行ったのかしら？」
「さっきの？ うんと……」

あの二人は丘の方へ行っただけ。
桜が足を向けようとしたその時、

「キヤアアアアアアア！」

突然、少女の悲鳴が聞こえた。

「今の!？」

『丘の方！ 行こッ、桜!』

「お婆ちゃん、ちょっと待ってて！」

桜は全速力で丘の方へと駆けだした。

・

「お、おねえちゃああん」

「ほら、この手につかまって……!」

『桜!』

「ッ!?! あれは!」

桜が丘へと駆けつけると、少女が崖に向かって手を差し伸べていた。その先には、必死に崖にしがみつく少年の姿も見えた。

遊んでいるうちに誤って落ちてしまったのか、少年は泣きべそをかきながら懸命に手を伸ばしていた。

しかし、少女につかまっても持ち上げられるわけがない。

『私がやる! 桜、交代しよ!』

「ダメ! 交代してたら間に合わない。私がやる!」

『さ、桜!?!』

カホリの言葉も聞かずに車椅子をチカラで加速させる。そして勢いで腹ばいに転がると崖下に手を伸ばす。

「ほら、こっち! つかまって!?!」

「う、うん……ッ!」

辛うじて伸ばした手が桜の手に微かに触れる。

もう少し、もう少しだけ手を伸ばせれば。

桜は限界ギリギリまで手を伸ばして少年の手を握ろうとして手を広げた。

「も、もう……少し!」

「腕が、痛いよお……」

桜の手が少年の手を掴みかけた瞬間、少年は力尽き崖から手を離れてしまった。

「いやああ!？」

『桜! 早く私に交代し』

「私が、助けるッ!」

『桜!？』

桜は意を決して更に身を乗り出し、少年を救うために頭から真っ逆さまに落ちていった。

「み、巫女のおねえちゃん!？」

「……ッ! だ、大丈夫! 絶対助けるから!」

少年を両手でしっかりと抱き抱えると、瞳を閉じ全身にチカラを込める。

淡い光が全身を包みこむと、桜は意識を集中させる。

空を飛ぶ、ではなく、この少年を助けたいと、強く意識した。

「お空さんも言ってた。地面に落ちなければいいんだ。だから、ちよっとでも上へ上へ目指せばいいんだッ!」

瞬間、桜の全身が一層強く輝きだした。

目の前に迫りくる地面を見据えつつ、桜は思いつきり体を反らして崖を滑空した。

そしてそのまま勢いを保ちながら旋回して、あの崖の真上へと飛んでいく。

少年を抱えたまま、桜は少女の元へと着地した。

「おねえちゃん!」

「よかった！　よかった無事で……」

ひしと抱き合う二人を見て、桜は安堵して大きくため息をついた。
すると二人がくると振り返って桜に頭を下げてきた。

「助けてくださって、ありがとうございます！」

「そ、そんな。^{かしこ}畏まらなくてもいいのに……」

頬をかきながら、桜は照れ臭そうにつぶやいた。

その後、老婆にも何度も何度も頭を下げられてから桜は三人を見送った。

『……………』

「……………」

『桜ちゃん』

「……………うん、私も正直信じられないんだけど……………」

「飛べた……わ、私、空飛べたあああああ！！！」

拳を握りしめ、高く高く掲げながら桜は叫んだ。

黄昏の空にはいつの間にか一番星が力強く輝いていた。

第三十五話 アクシデントスカイ（後書き）

桜、飛翔。

よくあるベタな展開ですね……うん；

どうでもいいですが、COD・bo買いましたw
FPSって楽しいですよねb
しかし久々にやったんでちょっと酔い気味です……；

第三十六話 桜の仕事

「おかえり、霊夢。荷物持つよ」

「ああ、ありがと。宴会の準備となるといろいろ必要で大変だわ……」

霊夢が買い出しを終えて神社に帰ってくると玄関で桜が迎えてくれた。

食べ物やら何やらが大量に入った袋を手渡すと、桜はくるとUターンして部屋へと向かってゆっくり飛んでいた。

「ふう……桜が手伝ってくれて助かったわ。おかげでもうクタクタ……で……？」

おかしい。

何か違和感がある。

今、桜が飛んでいたような気がしたのだが。

「……桜？」

「なに？」

念のために呼んでみると、部屋の入り口から顔だけ出して桜が返事した。

霊夢は指だけでちよいちよいと合図すると、桜は車椅子に乗らずにこちらに向かって何事も無かったかのように飛んできた。

ちよんと霊夢の横に座ると、黒と銀の瞳が霊夢を覗きこんだ。

「どうかした？」

「……私の目がおかしいのかしら、今アンタが飛んでたような気が

したんだけど」

「そうだよ。だって飛べるようになったんだもん」

「……カホリじゃなくて？」

「そだよ」

「……………ええええええええ！？」

・

「まったく、そういうことはちゃんと報告しなさいよ……」

「えへへ……驚くかなあって思って黙ってたんだけど、霊夢が気づくの遅いんだもん」

「私のせいだって？ まったくもう……そうとわかればもう少し準備とか……しておけば……ぶつぶつ」

「ん？ なんか言った？」

「べ、別に！？」

霊夢の声とともにドンッとまな板が吠える。

そして出来上がった食事を卓に並べて夕食を二人で食べ始める。

煮物に箸を伸ばしながら、桜は霊夢に訊ねた。

「ねえ、霊夢」

「なに？」

「ほら、宴会の準備のこと。空を飛べるようになったからいいでしょ？」

「ああ、それね。いいわよ。っても、実はもう桜の仕事は考えてあるのよ」

「え、ホント？」

霊夢は懷にごそごそと手をつ突っ込むと小さな手紙を数枚取り出した。一見するとただの便箋のようにしか見えないが、所々に小さな飾り

付けが施されていた。

「これを届けてほしいの。宴会の招待状よ」

「へえ……宴会に招待状」

「後で簡単な地図を貸してあげるから、それをみんなに届けてちょうだい」

「うん、わかった……あ、それと一ついい？」

「なにかしら？」

桜は少し躊躇いがちに口を開いた。

「そ、その……誘いたい人がいるんだけどいいかな？」

「誘いたい人……ああ」

さとりたちのことか。

桜の練習に付き合ってくれたり、いろいろとお世話になっていたお礼に誘いたいということだろう。

「いいわよ。でも、あいつらなら招待状は一つでいいから」

「あ、その……」

「……？ 他に誰かいるの？」

「う、うん……」

他に桜に知り合いなどいたのだろうか。

……まさかカホリとでも言うのだろうか。

「……ダメかな？」

少し考えた後、霊夢は小さくうなずいた。

「わかったわ。それじゃ多めに招待状を用意しておくわ」

「ホント！？　ありがと、霊夢！」

「やぁね、お札を言われるようなことじゃないわよ」

そう言いながらも、霊夢は火照る顔を隠そうと椀をいつもより高く上げて味噌汁を飲み干した。

第三十六話 桜の仕事（後書き）

感想に返事して気づいたんですが、ク○ラはアルプス出身の少女じゃないです；

すみませぬ；；

それと、週間アクセス数が1000人越えました！
ありがとうございますッ

第三十七話 宴会招待状御中 〔魔法の森〕

朝日が昇るのと同時に、桜は丘の上で静かに深呼吸した。

澄み切った朝の空気が全身に行き渡ると、体そのものが目を覚ましたかのような清々しい気分になる。

この朝日も、桜にとってはもうすっかり馴染みの景色となっていた。

「おはよ、カホリちゃん」

『おはよお……』

眠たげな声が頭に響いてくる。

同じ体というのに、カホリの方はどうやらまだ完全に起きていない様子だった。

「さあ、カホリちゃん。私達のお仕事スタートだよ」

『宴会の招待状を配る……なんだっけ？』

「そう。霊夢はこの神社で準備をしてるから忙しいの。だから私達が神社のお遣いとしてこの幻想郷を飛びまわらなくちゃ」

『……そういうのって、普通誰か別の適任な人に任せたりしないのかな……』

「細かいことはいいの！　せっかくの気持ちのいい朝だから早速出かけようよ！」

『テンション高いなあ……ふう』

桜は車椅子を加速させ神社の鳥居をくぐった。

・

それからしばらくして、桜は神社から少し離れた森へ辿り着いた。少し湿ったような空気が体に張り付くようで少し気持ちが悪い。それでも一応誰かが住んでいるらしく、立て看板や最低限整備された道が森の奥へと伸びていた。森の入口で着地すると、手元の地図を何度も確認しながら桜は森の奥を注視する。

「……この奥に小屋があるみたいなんだけど」

森の奥は暗闇に包まれていて何も見えない。

桜が奥に進むにつれ森全体がどんどん暗くなっていく。

道を間違えたのかと思い顔を上げた瞬間、目の前に小さな光が見えた。

光の方へと進んでみると、ぽっかりと開けた場所に小さな軒家を見つけた。

急な傾斜の屋根に、広い庭には何故か無造作に本が散らばっていた。

「これが、霧雨魔法店……なのかな」

しかし、一見するととても店を営んでいるようには到底思えなかった。

入り口にまで本が乱雑にばら撒かれており、足の踏み場がまるでない。

機能しているのか謎の看板には『なんでもします』と不躰な字で書かれていた。

『……桜、入ってみたら？』

「え、えっと……汚い場所は出来たらご遠慮したいような」

とはいえ、桜はこの招待状を霧雨魔理沙という人物に渡さなければならぬ。

意を決して、桜は本を踏まないように慎重に車椅子を操りながら、途中本を退かしたりもしながらなんとか玄関に辿り着いた。

『……桜、飛べるんなら飛んだ方が速かったんじゃない？』

「今更言われても……」

桜は一度深呼吸してからドアをノックした。

そして少し後ろに下がってから主が出るのを待った。

「ごめんください。霧雨魔理沙さんいらっしゃいますかー？」
きりさめまりさ

返事の代わりに、ドアの奥から何やらどたばたと物が崩れるような音が聞こえてきた。

それから、今度はこちらに向かってくる足音のような音が響いてきてドアが勢いよく開いた。

「だあッ！？、はあッ、はあッ……よ、ようこそだぜ」

ドアを開けたのは白と黒のローブに身を包んだ金髪の少女だった。しかし何故か肩を大きく上下させながら荒い息を立てていた。

「……ん？ おまえ、誰だ？ 客か？」

「あ、いえ。私は桜って言います。その、神社の宴会の招待状を渡しに来ました」

「神社の、宴会……？ ああ、霊夢とこのか！ なになに……」

受け取るや否や早速ビリビリと便箋を破いて中身を拝読する魔理沙。

便箋のゴミは適当な場所に投げ捨てた。

中身を一瞥した後、魔理沙はふっと桜の方を見て、

「ん？ そんなところで突っ立ってないで上がれよ。茶ぐらい出すぜ？」

「あ、えつと……じゃあ、ちよつとだけ」

魔理沙の後ろには明らかにゴミ屋敷と化したような光景しか見えなかったが、断るのも悪いと思い桜はお邪魔することにした。

玄関には四人分の靴とブーツが散乱している。

すると魔理沙は部屋の散々たる様を示しながらニツと笑った。

「多少散らかってるけど気にすんな。ちよつとしたパーティーの跡なんだ」

「多少……」

目の前で本棚がぶっ倒れているのだが、魔理沙にとっては多少散らかってるというレベルなのだろうか。

やや顔を引きつらせながら歩いていくと、ほんの少しだけ開けた空間があった。

それはよくある、とりあえず物を退けて無理やりスペースを開けたといった感じの場所だった。

そんな場所に置かれた木製のテーブルには玄関の靴同様に四人分のカップが置かれていた。

「あの、他に誰かいるんですか？」

「んん？ そういえば朝から姿を見てないな……どっか行ったのか？」

「へ？ それってどういう意味で」

「「ま、魔理沙 ああああッ!？」」

「ぎゃあああああ!？」

すると突然、魔理沙の後ろに積もっていた本の山がぐらぐらと揺れ動いたかと思うと、奇声とともに中から少女が二人飛び出してきた。突然の出来事に、桜は思わず車椅子ごとひっくり返ってしまった。そして二人を見た魔理沙は事もなげに片手を上げて、

「おお、そんなところで寝てたのか。風邪ひくぞ？」

そんなことを言いながらテーブルに新しいカップを並べると、適当なクッションの上に腰掛けた。

『うぎゅッ』

「……? カホリちゃん、何か言った？」

『なんにも?』

本の山から飛びだした二人はゼイゼイと息を荒げながら魔理沙を指差し叫んだ。

「もう少しで死ぬとこだったわよッ!？」

「ちゃんと掃除くらいなさいッ!？」

当の魔理沙は知らん顔で茶を飲んでいた。桜は目の前の人物について魔理沙に訊ねた。

「あ、あの……この人たちは？」

「あっちがパチュリー。そっちがアリスだ。……あれ、一人足りない

くないか？」

あつちと指差された紫色の髪の少女は全身にかぶった誇りを払いながら頬を膨らませていた。

「まったくもう……って、この本も私のじゃないの！？　また勝手に盗んだのね！？」

「だから盗んでないって。ちゃんと貸出カードにメモしてあったら？」

「紅魔館の図書館は学校の図書館じゃないわよ！？」

そして、そっちと指差された金髪の少女は乱れた髪を直しながら魔理沙をにらみつけた。

「まったく、少しは片付けなさい……って、その子は誰？」

「霊夢のとのこの遣いだ。宴会の招待状を届けに来てくれたんだぜ」

「ふうん……？　ところで、魔理沙」

「なんだ？」

アリスは魔理沙の足元を指差しながらやや呆れたような口調で言った。

「このパーティーの主賓をクッションにするってのはどうかと思うわよ？」

「主賓をクッションに？　ハッハッハ。このアタシがそんなハマするわけないだってぎゃあああ！？」

そう笑いながら、魔理沙は腰掛けていたクッションに視線を落とし、戦慄した。

「ま、魔理沙……重い、痛い、苦し……」

「く、クッションがしゃべった!？」

「それはクッションじゃなくてあてなよ!？」

若草色のクッションがよろよろと立ち上がる。

その人物はローブによれよれの白いエプロン姿で、綺麗な青い髪を頭の上で爆発させていた。

ぐったりとした様子で魔理沙を見据えて、

「ひどいよ魔理沙。ボクはクッション作る側ではあるけどなる側じゃないのに……」

「こ、こんなところで寝てるお前が悪いんだぜ？」

そして目を擦りながら、青い髪の少女は桜を振り返った。

「……この人は？」

「神社の遣いだそうだ。宴会の招待状を渡してくれた」

「宴会……ああ、この前言ってた神社の宴会のことか。へえ……?」

すると少女は桜に向かって一礼して挨拶をした。

「どうも、神社のお遣いさん。ボクはあてになっていうんだ。ヨロシク」

「桜って言います。こちらこそよろしく」

すると魔理沙はウンと大きく伸びをしながら桜以外の人物を一瞥して、

「んじゃ、今日は解散するか。いよいよ宴会だしな」

「そうね……私も、一度戻ろうかしら」

アリスは少し欠伸しながら答えた。

「私は図書館に帰って少し休むわ。宴会は貴方達で楽しんでちょうだい」

パチュリーは足元の本を適当に回収しながらそう言った。

「ボクも行く。そだ、あの子たち連れてきてもいいかな魔理沙？」

「おお。いいんじゃないか？」

「だってさ。フフ。それじゃボクたちも一回帰るね」

あてなは自分の肩にぬいぐるみを乗せながら身支度を整えた。

途中、ぬいぐるみが桜の方を振り返ったような気がしたが……

魔理沙は次々と部屋から出ていく少女たちを見送ると桜に向き直って、

「招待状、確かに受け取ったぜ。ご苦労さん」

そして手を振りながら奥の階段へと歩き出した。

『それじゃ、次行こうか？』

「うん。次は……っと」

玄関で地図を広げると、桜は霧雨魔法店を後にした。

第三十七話 宴会招待状御中 〵魔法の森〵（後書き）

評価ポイント総合240pt！

評価してくださった方、お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

そして、外伝を匂わせる今回のお話。

あてなを久々に書いてますが……やっぱりボクっ子って良いですねッ！
w

第三十八話 宴会招待状御中 妖怪の山

霧雨魔法店を出た後、桜はそのまま真っすぐ北へ抜けて妖怪の山へと向かった。

時刻は昼少し前といったところ。

中天に差しかがろうとする日差しは少し暑いぐらいで、桜は巫女服をばたばたさせながら山道を歩いていた。

「射命丸……にバツ線が書いてある。この人は誘うなってことなのかな」

『ほら、桜ちゃんをマッハで飛ばした人だよ。覚えてない?』

「……せっかく忘れようとしてたのに」

やがて山道を抜けると、目の前に大きな滝が見えてきた。

轟々と鳴り響く水の音と飛び散る飛沫は桜にとって一服の清涼剤となった。

「うわぁ、気持ちいい……」

『水の香りってのもいいもんだよねえ……』

「あなた、そこで何をしてるんですか」

マイナスイオンに癒されていると、背後から突然凜とした声が聞こえてきた。

桜が恐る恐る振り返ると、そこには白髪の少女が立っていた。

「おや、見覚えがあると思ったらやはりあなたでしたか」

「樫さん!」

思わず桜は感嘆の声を上げた。

柊は以前ここで命を救ってくれた恩人だった。

太刀に伸ばしかけていた手を引っ込めると、柊は軽く会釈をした。

「どうしたんです？　こんなところで」

「えっと、実は私今宴会の招待状を配るお手伝いをしていて」

「宴会……ああ、博麗神社の」

桜は懷から便箋を取り出し柊に手渡した。

「招待状とは、今年の宴会は少し変わってますね。前は先輩から直接訊いたのですが」

「それが、何故か射命丸の文字にバツ印が付いてて……」

「……霊夢さん、先輩が生理的に苦手なようですから」

「なんですとおおお！？」

「うわああああッ！？」

真上から少女の声が飛んできて思わず頭を覆う桜。

恐る恐る見上げると、いつぞやの少女が逆さまの顔で覗きこんできた。

「私にバツ印ってのはどういうことですか！？　その紙見せなさいッ！」

「ああ、ちょっと！？」

文は霊夢から手渡されたメモを引っ手繰ると、文章を隅から隅までじいつと凝視した。

「むむむ……本当にバツ印なんか付けてある……他の方々には何に

も書いていないというのにどうして私だけ……」

「前の宴会の時も、先輩は写真撮りまくって迷惑かけてたじゃないですか？」

「私は記者ですよ！？ 写真を撮るのが生業で何が悪いってんですか！？」

「その生業が皆に迷惑をかけたりしてるんじゃない……」

「んま！ 椛のくせに生意気なッ！ いったいどの口がそんなこと言うんですかねえ！？」

「い、いひゃいでふ先輩ッ！？」

「あ、あはは……」

椛の口の端をぐいぐいと引っ張る文。

桜はただただ苦笑いを浮かべるので精一杯だった。

「それじゃ、私はこれで失礼しますね」

「あ、途中までお送りしますよ。道中他の妖怪に出くわしたら危険ですし」

「ありがとうございます、椛さん」

「私はちよつと野暮用が出来たんでこれで。死んでも行く所存だと霊夢さんにお伝えください！」

「は、はい……わかりました」

そして文は勢いよく蹴って空へと飛んでいってしまった。

・

巨木の森をゆつたりと歩きながら桜と椛は二人で山道を下っていった。

他愛のない話も織り交ぜながら歩いていると、ふいに椛の足が止まった。

「あれ？ 椛さんどうかしたの？」

「……少し、気配を感じたもので」

「気配？」

『……桜、近くに誰かいる』

「え？ ホントに……？」

周りを見まわしてみたが、大木ばかりで人など見当たらない。
それなのに、椛は太刀を握りしめ鋭い視線で一点を見据えていた。

「……誰です。隠れていないで、姿を見せたらどうですか？」

「ど、どこ！？ な、何がいるの？」

『正面に見えてる樹の後ろ……分かる？』

カホリに言われた場所に目を凝らしてみると、何やら紅いリボンが
ひらひらと揺れていた。

それを確認した椛はふうと息をついて太刀を収めた。

「なんだ、雛さんでしたか。そんなところで隠れてないで出てきた
らどうですか？」

すると、紅いリボンで髪を結わえた少女が顔を出した。

どこか儚げな表情の少女は、何故か警戒するように顔だけしか出さ
ずに、

「そ、そこにいる人、誰？ っていうか、人？ 妖怪？」

「……？ 桜さんのことですか？ 彼女は普通の人間ですけど？」

少女はゆっくりと桜に近づいてその顔をまじまじと見つめてきた。

「あ、あの……?」

「……………あなた、何者? 不思議な気配を感じるのだけど」

「え、えっと、私は桜って言います。天春桜。あなたは……?」

「彼女は鍵山雛さんです。人の厄を集める神様です」

「か、神様!？」

驚く桜だったが、雛は表情を変えずにジッと見つめたままだった。
やがて雛は桜から少し離れて息をついた。

「ふうん……気のせいだったかしら。ごめんなさい。てっきり私は
新しい神様がこの妖怪の山に来たんじゃないかと思って」

「何を言ってるんですか。彼女は真正銘普通の人間ですよ。ねえ、
桜さん?」

「ヘッ!？ あ、うん! そうそう、私はただの人間ですよ?」

とっさに嘘をついてしまったが、別に隠さなくてもよかったような
……

すると、雛はちゃんとドレスの裾をつまんで優雅に会釈した。

「初めまして、かぎやまひな鍵山雛よ。ごめんなさいね。勘違いしちゃって」

「いえいえ、お気になさらずに」

ホントは勘違いではないのだが。

雛は二人を交互に見つめると、

「ところで、お二人は何をしてるのかしら?」

「桜さんを山の入口まで送る途中です。彼女、博麗神社の宴会の招
待状を届けてくれたんです」

「へえ、神社の宴会ねえ……」

やや瞳を輝かせながら、雛は桜をちらと一瞥した。

「……よ、よかったら一緒にどうですか？」

「あら、いいのかしら？ 別にまだ何も言っていないのだけれど……」

目が言っていましたよ、と付け加えようとしたが口をつぐむ。

それは何となく失礼な気がした。

「そうね、じゃあ遠慮なく行かせてもらおうわ。時間はいつなのかしら」

「えっと、ちょっと待ってください……」

懐の便箋を取り出し一枚雛に手渡す。

便箋はまだ少し余裕があるし、多少なら渡しても構わないだろう。

「ふんふん……わかったわ。それじゃ、宴会楽しみにしてるわね」

そして雛は鼻歌交じりにくると回りながら山の奥へと消えていった。

「それじゃ、行きますよ。もう少しで出口です」

「……幻想郷って変わった人が多いよね」

「え？ 今何か言いました？」

「あ、いえ。何でもないです」

桜は柵に笑顔で返してから、目の前の参道に視線を移した。

次は……地霊殿へ向かわなきゃ。

第三十八話 宴会招待状御中 妖怪の山々（後書き）

ううん……短編かつ恋愛ものって難しいですね；
ちよつと詰まっています；

それと、いつもいつも誤字ばかりですいません；
確認はしてるんですが、どうしても見逃してしまう……

第三十九話 宴会招待状御中 〔地霊殿〕

いつか見た、地面にぽっかりと空いた大穴。

地獄の入口のようにも見えるその大穴のすぐそばで、桜は大穴の奥に広がる暗闇を覗いたり止めたりと挙動不審な動きをしていた。

『あの、だから飛んでいけばいいんじゃない？……』

「高い……高すぎるし、奥が全く見えない。前は霊夢と一緒にだったからまだ大丈夫だったけど……」

いざ一歩踏み出そうとするが、大穴の暗闇を目にした途端足が震える。

これはもう高いとかってレベルじゃないような……

「う、うう……」

『でもここ以外に道ないでしょ？ ほらほらさっさと飛んだ飛んだ』

「あ、あれだ。たぶんこの近くに地下に続く緑色の土管とかあるでしょ？」

『往生際が悪いなあ……何なら交代しようか？』

「う、ううん……」

いくら飛べるようになったとはいえ、それは決して高い所を克服したのといコールではない。

しかしやはり自分で飛ばなくては意味がない。

ここでカホリに代わってもらっても、それじゃやっぱり自分が成長しないような……

『桜って、けっこう優柔不断なんだね』
「もし失敗して落ちたら絶対死ぬもん」

『カッコつけて落ちてると思えばいいんじゃない？』
「それは全然違うような……で、でもさとりさんやこいしちゃんにはお世話になってるし」

『いっそ、無意識のうちに飛べたらいいのにね』

「無意識かあ……」

「難しそだねえ」

「ホントホント。何にも考えずに飛べるわけ……ん？」

今、カホリちゃん以外の声が聞こえたような。

無邪気な子供みたいなこの声はまさか、と振り返ろうとした瞬間急に目の前が真っ暗になって、

「だーれだッ？」

そんな声が耳元で聞こえた。

当然この声の主は知っている。

「こ、こいしちゃんッ」

「当たり前ッ。すごい、よく私だってわかったね？」

「そりゃ、こいしちゃんの声はよく覚えてるから……」

視界に光が戻ると、目の前でこいしがニコニコ微笑みながら桜の前に立っていた。

いつの間に現れたのだろうか。

と訊いたところで、答えは決まっているだろうけど。

「おねーさん、地霊殿に用事？」

「うん。この招待状を届けにね……って、あれ？ 今取り出そうとしたんだけど……」

「ふうん……博麗神社で宴会かぁ……」

「あ！ いつの間に!？」

「えへへ。無意識のうちに？」

油断も隙もない。

こいしはふんふんと何度もうなずいてから桜を見上げた。

「で、これを届けに来たんだ？」

「つても、もうこいしちゃんを受け取ってくれたんだし、後はさりさんに伝えてもらえれば……」

「そういうの、ちゃんとおねーさんが伝えたほうがいいんじゃない？」

「む、たしかに」

こいしの言うことも一理ある。

しかし、この大穴を飛ぶのは……

もう一度覗きこんで、刹那の速さで後ずさる。

とてもじゃないが、自分の意思でここを降りるのは不可能だ。するとこいしは桜の手を取って、

「私と一緒に飛んだげる。それなら大丈夫でしょ？」

「いや、でもやっぱし高いところは……あれ？」

ふと、桜は異変に気づいた。

おかしい。

今しがた大穴の縁でこいしと話をしていたはずだから今は地に足が

つくはずなのに、いつの間にか自分の足が宙をぶらぶらと揺れている。

……恐る恐る下を覗き込んで、桜は青ざめた。

「……へ？ きやあああああ！？」

桜の真下の大穴がまるで獲物を喰らう獣のように大口を開けている。桜の全身が重力に引かれ、車椅子ごと闇へと吸い込まれていく。

「なんでええええ！？ こ、こいしちゃん！？」

「ほらほら、飛んでるよー？」

「こ、これは飛んでるんじゃないかって落ちてるって言うのooooおおお！？」

悲鳴を響かせながら、桜は大穴の奥へと落ちていった。

・

「……それで、桜さんはそんなに疲れきっているのね」

地霊殿の玄関でぐったりしている桜を見て、さとりはため息をついた。

桜は顔を真っ青にしながら、車椅子の上でうなだれている。

その姿はまるで、試合で燃え尽きた後のボクサーみたいな格好だった。

「とりあえず、お入りください。お茶でも出しますから」

「す、すみません……」

さとのりの自室へ案内されると、早速紅茶の入ったカップを渡された。それを両手で慎重に握りながら一口つけると、桜の顔色が少しだけ回復した。

「ごめんなさいね。こいしが迷惑をかけたようで」

「へへへ……ごめんなさい」

「ああ、いいんです。とりあえずは地霊殿に来れたんだし……」

桜は懷に手を伸ばして招待状を取り出した。

こいしに取られたのと同じ便箋をさのりに手渡すと、さのりはそれを受け取り机の上に置いた。

「読まずとも、だいたい事情は分かりました。お世話になったから私達をお誘いしてくれるなんて、優しい方ですね。ありがとう」

「そ、そっか。心が読めるんだっけね」

『忘れてたの?』

「……ちよつとだけ」

するとさのりはクスクスと小さく微笑した。

「ふふ。一つの体で二つの意識を共有すると心が大忙しですね。見ていて面白いです」

「私も大変ですよ。まだ完全に慣れたわけじゃないですし」

『私の声もだだ漏れか……ちよつとフクザツ』

「別に変なこと言ってないんだからいいでしょ?」

『まあ、ねえ……』

「私はもう慣れちゃったよ」

「成長してるんですね、桜さんは」

「えへへ。それほどでも」

なんだか照れ臭くなって頬をかく桜。

まるで母親に褒められたような感覚がした。

目線は遥かに下だが。

「神社で待ってますから、絶対来てくださいね」

「ええ、もちろん……ですが、一ついいですか？」

突然、さとの瞳が鋭くなって桜を見据えた。

さっきまで見せていたものとは違うその冷やかな瞳に桜は思わず息を呑む。

「……その方をお誘いするつもりなのですか」

「あ……そ、それは、えっと……」

歯切れの悪いその返答にさとの語気が強まる。

「彼女は私達と違い危険な方です。あなただって一度襲われたでしょう？」

「そ、そうんですけど……さ」

忘れられなかった。

ほんの一瞬感じたただだったが、それが頭から離れなくなっていた。あの、寂しげな香りを。

「……警告はしました。では、今日はお引き取りくださいませ」

「玄関まで送ってくね」

「……あ、うん。ありがと。こいしちゃん」

そして、こいしに背中を押されながら部屋を出ていった。

誰もいなくなった部屋の真ん中で、さとりは小さくため息をついた。

「花園の妖怪を宴会に招待したいだなんて考えるだなんて……どうしたのかしら」

窓から玄関を見降ろすと、桜の姿はもう見えなくなっていた。

第三十九話 宴会招待状御中 〽地霊殿〽（後書き）

GWがスタートしましたね！

オレはいつも通りなのでたいして変わりなく過ごす予定ですがW

それと、予定ですが東方の恋愛系の二次創作のサンプルをもう少ししたら公開してみます。

あくまで、予定ですが……

第四十話 孤高の瞳

『桜ちゃん、ホントに行く気なの？ さとりさんに注意されたのに』

地霊殿から出て、桜は一度里へ寄って広場で休憩をしていた。

中天を過ぎた陽の光がまぶしく桜を照らしている。

茶屋で一服しながら、桜は答えた。

「行くよ。どうしても気になるからさ。それに、このチカラを上手く使えばなんとか和解出来たりしそうじゃない？」

『……でも、前に私がとんでもないことしたんだよなあ』

「とんでもないこと……？」

『もしかしたら怒ってるんじゃないかなあ』

「だ、大丈夫だよ。もし危なくなったら逃げればいいし」

『んん……まあ、桜に任せる。けど、ヤバくなったらすぐに交代してね？』

「もちろん」

店の女将に勘定を支払うと、桜は里の外れに向かって歩き出した。

・

里から歩いてすぐに目的地の花園が見えてきた。

以前見た時よりも、花々が生き生きとして見えるのはこの暖かな日差しのおかげだろうか。

目の前で鮮やかに咲き誇る花卉は陽の光をいっぱいに浴びて輝いて

いる。

麗らかな春風に乗って甘い香りまで漂ってきた。

『ううん……やっぱり花の香りっていいよね。私は大好き!』

「私も好きだよ。さて、あの人はどこかな」

花の間に出来た小道をゆっくり歩いていくと、目の前に小さな白いテーブルとティーセットを見つけた。

それは前に桜が訪れた時と同じようにポツンと置かれていた。

近づいて様子を見ると、カップには真っ赤な紅茶が湯気を出していた。

「これは、さっきまでここにいたって事だね?」

『……桜ちゃん』

「……ッ?」

視線を感じ振り返ると、白い日傘をさしながら少女がたたずんでいた。

赤茶の瞳が忌々しげに桜を見据えていた。

「……貴方、ここで何をしているのかしら」

「あ、えっと……幽香さん」

桜は懷から招待状を取り出し幽香に見えるよう掲げて、

「じ、神社で宴会をやるんです。それで、あの……幽香さんも一緒にどうかと思って」

「私が神社の宴会に……?」

鋭い瞳がいつそう細く鋭くなる。
そして口の端で小さく笑んで、

「冗談でしょ？ 私が宴会になんて行くわけないじゃない。そんなこと興味も無いわ」

「で、でもきつと楽しいですよ？ みんなで飲んだり食べたりとか……ッ!？」

幽香の殺気を肌で感じた桜は思わず言葉を止めて身構えた。
全身から吹きだすような殺気がまっすぐ桜に向かっていている。

「……私が雑魚と群れると思ってるの？ 仮に死んだとしてもお断りよ。虫唾むしずが走る」

「で、でも……」

「ちょうどいいわ。今私寝起きで少し空腹なの。この前は不覚をとったけど、今日は最初から本気でいくわ」

『桜、交代しないと!』

「ま、待って! もう少しだけ私が……」

桜は殺気立つ幽香の目の前へと、少しずつ近づいていく。

車椅子をゆっくり進めて、進めて、幽香の一手手前で止まった。

殺気に気圧されつつも凜とした表情で幽香を見返した。

「自分から喰われにきた、ということでもいいかしら」

「そ、その。前に会った時に感じたんです。あの時幽香さん、寂しそうな香りがして……」

「……寂しい？ 私が？」

桜の銀と黒の双眸がまっすぐ幽香を見つめる。

幽香は少し瞳を細めて微笑を浮かべ、

「何を言っているのか分からないわね。まさか命乞いのつもり？」
「あの香りを感じて私は幽香さんがホントは寂しいんじゃないかって思ったんです。だから」

「だから何？ そんなこと貴方には関係ないでしょう？」

「だから、私達と一緒に宴会で仲良く……」

「……煩い」

吐き捨てるように言って幽香は桜をにらみつける。

銀と黒の瞳は揺るがずまっすぐに幽香を見返す。

一歩も引くまいと、桜は両手を広げて、

「ホントは、ホントは幽香さんすごく良い人のはずです。私を喰らうつもりなら、あの時最初から私を喰ってしまえばよかったのになかったでしょ？」

「たまたまじゃない。貴方って馬鹿ね。そんなことで私を信用したとでもいうの？」

「そ、それは……っが!？」

冷たい微笑を浮かべたまま幽香は素早く手を伸ばして桜の首をつかんだ。

ぎりぎりと首を締めあげられ、思うように力が入らない。

「くだらない……ホント、どうしてあの時さっさと喰らってしまわなかったのかしら」

「ゆ、ゆう……か、さん……!」

『もう見てらんない。桜、代わるよ』

「ッ!？」

ギョッと瞳を閉じた瞬間、桜の全身に淡い光が宿ると幽香の手が振りほどかれた。

光に包まれた桜は宙に浮かびながら銀の双眸で幽香をにらんだ。

『か、カホリちゃん……!』

「……せっかく桜ちゃんが誘ってあげてるのに、どうして素直にならないのかしら。見ててムカツク」

「あの時の神様の登場か。でも、対策は抜かりないわよ」

不敵に笑いながら幽香が取り出したのは、灰色の大きなマスクで……って、

『は、反則くせえ!？』

「そりゃあ、また悪臭を撒き散らされちゃたまらないもの」

しっかりとガスマスクをかぶって戦闘態勢をとる幽香。

……しかし、その格好で恥ずかしくないのだろうか。

カホリは指を構えて幽香を見据える。

すると、カホリは幽香同様に不敵に微笑んで、

「私は香りを操るカミサマよ。ガスマスクなんかしてたって無駄だ
って教えたげる!」

『……あれ、よくガスマスクって分かったね?』

パチンと指を鳴らして高速の粒子を放つ。

幽香はそれを難なく傘で防いでみせて、

「無駄よ。そもそも、それに当たらなければいい話で……?」

幽香の言葉が止まる。

突然感じた鼻につくような異臭に目を見開いた。

その様子を見てカホリはニツと口の端をつり上げた。

「ど、どういふこと……!? マスクをしてるのに……!」

「私が出てる時なら別に粒子が直接当たらなくてもいいの。私のチカラが百パーセント発揮されてる状態なら、相手の嗅覚に香りを直接叩きつけることが出来るもの」

「そ、そんな……!？」

『私の時は、粒子がぶつかったとこじゃないと香らなかったのに……やっぱすごいなあ』

「ふふん。今のアタシは、阿修羅をも凌駕する存在だァッ!」

『……カホリちゃん、阿修羅って知ってる?』

「えっと……確かカミサマ」

「ば、バカな……グ、ゲホッ、ゲホッ……」

得意気に胸を張るカホリの前に崩れ落ちる幽香。

マスクを投げ捨て、再び忌々しげにカホリを見上げた。

「あ、そうそう。ラフレッシュもすごいけど、この世には世界一ヤヴァイ匂いの果物とかあるの知ってる? 他にも、腐乱臭とか毒素をもつ香りだってあるのよ?」

『か、カホリちゃんストップストップ! さすがにもう女の子が言うセリフじゃなくなってるよ!?』

「いいの！ さあて……それよりこれからどうしてくれようか」
『こ、交代するよ！？』

まるで悪役みたいな顔したカホリを無理やり抑え、銀と黒の瞳に戻る。

桜はすぐさま幽香に駆け寄って指を弾いた。

「……ミントの香り。どうして、私を助けるのよ」

「何となくです。それと、ちょっとやり過ぎちゃった気もするし」
『私はやり足りないぞー！？』

「……そう」

顔色が戻ると、幽香は日傘を拾い上げて立ちあがった。

そのまま無言で立ち去ろうとすると、桜が幽香の手をつかんだ。

「……なによ」

「これを」

桜は幽香の右手に宴会の招待状を握らせて微笑んだ。

「気が向いたらでいいから、来てください。私は幽香さんを待っていますよ」

「……………」

そして、幽香は特に何も言わずに花園の奥へと歩きだした。

桜はその後ろ姿を見つめながら、

『でも、ホントどうしてなの？ 私はアイツ呼んでも楽しくないよ
うな気がするんだけど』

「そうかな。でも、私はどうしても幽香さんが悪い人には見えなかつただけだな……」

『宴会の席で暴れたらどうする？』

「そんなこと、幽香さんはしないよ」

『お人好し、って言うんじゃないかなあ……それ』

「人を信じるってのは素敵なことだよ？　じゃ、帰ろうか」

そして人里の方へと向かって歩き出した。

・

「宴会の、招待状……」

小さな便箋をヒラヒラ弄びながら、幽香はぼんやりとそれを眺めていた。

招待状をくれたのは人間。

しかも、自分が喰らおうと思っていた人間。

淀みの無い澄んだ瞳の香る少女。

あの笑みを心の中で思い浮かべながら幽香はため息をついた。

「……………変なヤツ。どうしてこう、あの子の前だと調子が狂うのかしら」

幽香は便箋をポケットにしまうと日傘をさして歩きだした。

途中、一度だけ幽香は振り返って、

「桜、か……」

少女の名をつぶやいた後、幽香は花園の奥へと消えていった。

第四十話 孤高の瞳（後書き）

……後悔はしてない、が、反省してる。

ギャグセンス鍛えるのも難しいよなあ；

そもそも、あんまギャグシーンなんか書いてないんだけど；

テンポって大事だなあ……

第四十一話 宴会前夜

桜が博麗神社へ帰ってくると、神社の境内に一度で何十人もの食事を並べられそうなほど巨大な卓が何個も何個も並べて置いてあった。卓の間を縫うようにして抜けて部屋へと戻ると、霊夢がぐったりと横たわっていた。

「す、すごいね……アレ全部霊夢がやったの？」

「そうよ……桜が出て行った後紫が来て、紫の連中やら神奈子達やらも参加するから用意しておけて言われて……」

「えっと、今何人くらい誘ったっけ？」

「私は考えたくもないわね……もうクタクタよ」

「ご、ご苦労様……」

桜は霊夢のそばで車椅子を止めて小さく息をついた。

宴会は明日の夕方。

人は誘ったから、あと残っているのは食事や卓の支度だけだ。当日も霊夢を手伝わなくては。

「……桜」

ふと、霊夢が桜を呼んだ。

「ん？ 何？」

やや間をあけてから、霊夢は桜にごろりと背を向けて、

「その、宴会が終わったら……どうするの？」

「宴会が終わったら……か。ううん……」

少し考えてから、桜は素直に答えた。

「分かんない。とりあえず今は……何も考えてないよ」

「紫に頼めば、元の世界に帰れるわよ」

「……霊夢は、どうしてほしい？」

桜は茶化すつもりで言ったのだが霊夢はしばらく無言のままだった。
やがて、そっぽ向きっぱなしで霊夢が答えた。

「……別に。アンタが帰ろうが留まろうが、私には関係ないけど」

「……？ 霊夢？」

霊夢の言葉に桜は少し違和感を感じた。

いつもの霊夢なら、こんなこと言わないはず。

肩に手を伸ばそうとすると、霊夢はむっくりと起き上がって部屋から出て行ってしまった。

「霊夢……？」

『……どうしたんだろね？』

その後特に何事も無く夕食を済ませ床についた。

終始霊夢は無言だった。

・

その夜、桜はふと目を覚ました。

特別寝付けないというわけではなかったのだが、何となく目が冴えてしまっていた。

「あれかな、遠足の前日になるとドキドキして寝れないってヤツかも」

仕方なく、桜はこっそり部屋を抜け出していつもの丘で星空を見上げていた。

満天の星空は、まるで宝石箱をひっくり返したように光り輝いていた。

元いた世界では見たことがないほど、綺麗で、眩しい。

ふと、桜は霊夢のことを思い出した。

「そういえば、さっきの霊夢はどうしたんだろ。なんだか妙に元気がなかったというか、何というか……」

宴会の準備中になにかあったのだろうか。

テーブルを運ぶ途中に足の小指でもぶつけたのだろうか。

「……そりゃ痛いな」

想像してぶるっと体が震える。

……とはいえ、霊夢が小指ぶつただけでそこまで落ち込むだろうか。

「あら、女の子がこんなところで夜更かし？」

うんうん唸りながら考えていると、突然背後から声が聞こえてきた。振り返ると扇子を扇ぎながら紫が立っていた。

「違いますよ。ちょっと寝れなくて夜風に当たってたんです」

「そうなの。ま、ちょうどいいわ。話があるの」

「話？」

紫がうなずく。

「あなたのこれからについてよ。元といえば私が悪いのだからも
っと早くに言うべきだったのだけど……桜ちゃんも、そろそろ元の
世界に帰りたいでしょう？」

「元の世界……」

思えば、桜は紫の気まぐれでこの世界に来れたのだった。

そして霊夢と出会って、さとoryやこいし、他にも素敵な人たちと出
会えたのだ。

帰りたくない、と言えば嘘になる。

だが帰りたい、とも言えなかった。

精一杯考えた末、桜は答えた。

「えっと……保留って出来ます？」

「保留？」

桜は真剣な表情でうなずいた。

すると、紫は小刻みに体を震わせてクスクスと笑いだした。

「保留ね。わかった。それにしても……ふふっ、そんな返事が来る
なんて思ってたわ」

「まだ、迷ってるんです。帰りたいけど、せっかく仲良くなれたみ
んなと別れたくもないし。それに、カホリちゃんのこともあるし」

桜は胸をコンコンと示しながら言った。

返事はない。

恐らく眠っているのだろう。

「わかったわ。この件については保留ってことでいいわね。……何だかわ変わったわね、桜ちゃん」

「そうですかね……？ 自覚は全くありませんけど」

「病院で見かけた時と比べたら随分違うわよ。すぐく明るくなったわ」

「それは、紫さんが幻想郷に連れてきてくれたおかげです。ありがとうございます」

突然礼を述べられ驚く紫。

ちよっとだけ照れ臭そうに頬を染めながら答えた。

「ま、まさか急に礼を言われるとは思わなかったわ……」

「幻想郷に来てからずっとこうですよ。いろんな人に感謝しても足りないぐらい感謝してます。さとりさんもこいしちゃんも、紫さんだってそうだし守矢神社の人とか、もちろん霊夢も……こっちに來てからいろんな人にお世話になってますから」

「……そう。ふふ。霊夢が訊いたら喜ぶわよ？」

「あ、そういえば……」

桜は先刻の霊夢のことを紫に話した。

「急に元氣なくなっちゃってどうしたのかなって思ってた。紫さん、何か分かりませんか？」

すると、紫は突然表情を緩めて吹きだしてしまった。

「アッハハハ。霊夢ったら子供みたいねえ。まあ、気持ちとは分かんんでもないけど……ふふ」

「紫さん、何か知ってるんですか？」

「ええええ。分かりますとも。ふふふ。でも、私が言ってもつまら

ないから答えてあげない」

「ええー？ 教えてくださいよ？」

「ダメダメ。それより、あなたもそろそろ寝なさいな。明日は宴会の準備があるんでしょう？」

「ううん……わかりました。もう少ししたら寝ますよ」

「よろしい。それじゃ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

紫は桜に軽く手を振るとすき間の奥へと消えてしまった。

「そろそろ、部屋に戻ろうっと……ふわぁ……あ」

車椅子をターンさせ、桜は自室へ向かって歩き出した。

ふと、桜が空を見上げると漆黒の星空に流れ星が瞬いた。

第四十一話 宴会前夜（後書き）

最近BOのオンが楽しくてしょうがないですW
……つまあ、関係のない話はさておき。

そろそろ物語が終わりを迎えようとしています。
一日一話ずつだと何だかんだであっという間ですね。
そして次回作は……オリジナル書きたいかな？
まだ分かりませんがね；

第四十二話 ナイショの買い物

朝。

窓から降り注ぐ暖かな光に桜は目を覚ました。

「……ううん。まだちょっと眠いなあ」

『おはよ。今日は朝からみんな大忙しみみたいだよ?』

「みんな……? 大忙し……?」

何やら外が騒がしいような気がする……が、桜はとりあえず服を着替えて顔を洗って髪を整えた。

神社の外から人の話し声が聞こえるような気がする。

何かあったのだろうか。

車椅子に乗って部屋の戸を開けると……

「お! おはよう、巫女見習いさん!」

「はえ……?」

突然目の前で歩いていた筋骨隆々の男に元気よく挨拶された。

ふと神社の境内を見ると同じような男や、時には女の人の姿も見えた。

「えっと……これは?」

「ん? この神社の巫女さんに頼まれて準備しに来てるのさ。訊いてなかったのかい?」

「いや、何も……」

「そっか。ま、夕方までには終わるからそれまでのんびりしてな」

「は、はあ……」

男はニツと白い歯を見せると、大きな卓を持ち上げどこかへと歩いて行ってしまった。

……？

宴会はここで行うのではないのだろうか。

卓は何故か博麗神社の鳥居を越えてどこかへと運ばれている。

境内でも十分にサクラが咲き誇っているのだが、他に名所でもあるのだろうか。

「桜、ちょっといいかしら」

気になった桜が追いかけてようとすると、横から霊夢に声をかけられた。

昨日と違い機嫌は元に戻っているようだったが、

「……あ、霊夢」

「どうかしたの？ 人の顔ジツと見たりなんかして」

昨日と同じ雰囲気が残っているような……

桜はそれを口に出さず首を振って、

「ううん、なんでも。それより何か用事？」

「買い物よ。少しだけ付き合ってちょうだい」

「ああ、宴会用のだね。わかった」

作業している人たちの間を抜けて里へと降りる二人。向かったのは里の中心に位置する大きな酒屋だった。店先には酒の入った大きな樽がいくつも並べてある。

樽には張り紙が張っており、全て『博麗神社大宴会用』と書いてある。

「もしかして、これ全部運ぶの？　っていうか、私お酒は……」

パツと見ただけでも樽は十個以上あった。

頑張れば一人で一個ぐらい持てるが、二人で一個ずつ持っても何度も往復する必要がある。

物を運ぶ能力でもあれば話は別だが……

「心配しないでいいわ。私は勘定を払いに来ただけなもの」

「お金だけ？　でも、これはどうするの？」

「もう少ししたらわかるわ。ちよっと待ちなさい」

とりあえず、桜は霊夢に言われた通り店の軒先でしばらく待つことにした。

酒屋の店主から甘酒を振る舞われちびちびと飲んでいると、霊夢が腰を上げた。

視線の先に人影が二つ見えた。

片方はとても小さな女の子だった。

キャッキヤと笑いながらこちらに向かって歩いている。

そしてもう片方は、スラリとした長身の少女だった。

ただそれだけなら特にどうとも思わなかったのだが、頭上のそれを視認した瞬間桜は思わず目を見開いた。

「あ、れいむー！」

「来たわね。こういう時鬼ってのは助かるわ」

「お、鬼！？　じゃああれはやっぱりツノなの！？」

二人の頭上にはそれぞれツノが伸びていた。

子供の方には頭の左右に大きく伸びたツノが。

長身の女性には一角獣のように一本だけ伸びていた。

「れいむ！ お酒ちゃんと用意したのか？」

「そこを見なさいよ萃香。ご覧の通りよ」

「おお！ さすがれいむはフトモモだな！」

「萃香、それを言うなら太っ腹だ」

意外と野性味のある声で長身の少女が萃香と呼ばれた少女を窘めた。たしな
その少女は体操服にも似たラフで動きやすそうな恰好をしていた。

「二人とも、もちろん自分で飲む分くらいは運んでくれるでしょうね？」

「それで呼び付けたのか。やれやれ。鬼をこき使う巫女なんて厄介極りないったりやありやしないな」

「タダ酒飲めるだけマシでしょ。信仰しちゃってもいいのよ？」

「……ところで、ソイツは誰だ？ さっきから妙な気配を感じるんだが」

霊夢の言葉を見無視して、長身の少女が怪訝そうに桜を見つめた。

「さ、桜ですッ。天春桜……」

鬼に見つめられたせいなのか少し声が裏返って妙な自己紹介になってしまった。

しかし少女は特に笑うこともなくうなずいて、

「ふむ、そうか。私は星熊勇儀。ほしぐまゆうぎそしてこっちは友人の伊吹萃香だ。いぶきすいか」
「よろしくな！ ……って、ん？」

ニパーッと天真爛漫な笑顔を見せると、萃香は桜の周りをくんくんと匂いを嗅ぎだした。

「あう、えっと……」

「なんかお前、イイ匂いするな！ 香水か？」

「違うわ。その子の能力よ」

「なるほど。やはりただの人間ではないのか。能力を持っているのなら妙な気配もうなずけるな」

『鬼といえども、流石に私のことまでは分からないか』

「や、やっぱし鬼だったんだ。幻想郷には鬼までいるんだ……」

「それで、酒樽は……なんだこれだけか？ これじゃ私と萃香で一瞬で飲み尽してしまうぞ」

「ちっとは遠慮しなさいっての。でもま、その倍は頼んであるから平気でしょ。さ、神社まで運んでちょうだい」

「おー、まっかせろ！」

萃香と勇儀は酒樽を片手で軽々と持ち上げると、その上にまた樽を重ねていく。

すると、二人の手の平にあつという間に酒樽のタワーが出来た。

桜はポカンと口をあけてその光景を呆然と見つめていた。

明らかに子供としか見えない萃香の手に目の前にあった酒樽全てが乗った。

バランスを取りながら、二人はそのまま神社へ向けて歩き出した。

「途中で落としたり、こっそり飲んじゃダメだからね！」

「……鬼ってすごいな」

「さて、次は……あら」

酒屋に勘定を払って通りを歩きだすと小さな露店を目にした。

莫蔭くもかげの上には簪かんざしの類の小物が彩り鮮やかに並んでいた。

「へえ……珍しいわね。久々に露店なんて見たわ」

「いらっしゃい。何か買ってくのかい？」

「そうね……」

霊夢は莫塵の前でちよんとしゃがんで品物を吟味し始めた。

やがて品物が決まったらしく店主に指をさして勘定を払った。

桜には何を買ったのか少し見えなかったが、恐らく髪留めか何かだろう。

……あれ、霊夢は髪留めなんかしてただろうか。

「さて、それじゃ次はっと」

「霊夢？ 今何買ったの？」

「ナイシヨ」

「ケチ。ちよつとぐらい教えてくれないじゃんってあたッ！」

霊夢が手にした小包を取ろうと手を伸ばして手の平を叩かれた。

「ナイシヨったらナイシヨよ。さ、もう少ししたら神社に帰るわよ。

宴会を始めないとね」

「気になるなあ……」

『眠りを誘う香りでも使う？』

脳内で聞こえた物騒な提案に桜は首を振った。

「さ、さすがにやり過ぎ。……確かに気にはなるんだけどさ」

「置いてくわよー？」

「わ、待ってよ霊夢！」

気がつくといくど先へと進んでいた霊夢。
桜は慌てて車椅子を加速させて後を追いかけた。

第四十二話 ナイショの買い物（後書き）

今日は特に報告等はないです。
いつも読んでくれる方々、ありがとうございますね。

第四十三話 博麗大宴会 『上』

夕日が沈み、博麗神社に黄昏時が近づいたころ。

桜は部屋の中で一人緊張していた。

鏡の前で、何度も衣服の乱れがないか入念にチェックしている。

「うう、ドキドキするなあ……」

『どうしてさ？ 宴会だよ？ パーツと騒いで楽しめばいいんだよ？』

「こんな宴会初めてだからさ。すっごく緊張する」

『別に桜が芸を披露するわけでもないのに。桜はいつも通り、普通にみんなとお話して楽しめばいいの』

「そうなんだけど……」

「桜？ 用意できた？」

戸の外から霊夢の声がした。

もう一度身なりを整えると桜は答えた。

「えっと……うん、大丈夫」

「それじゃ、少し歩くわよ」

桜は部屋から出ると霊夢に車椅子を押されながら神社の坂道を降りた。

小さな分かれ道を右に曲がると、何やら賑やかな声や音が聞こえてきた。

そして宴会場へと辿り着いた瞬間、桜は思わず目を見開いた。

「うわあ……！」

最初に目に飛び込んできたのは宴会場いっばいに広がる満開のサクラだった。

そのサクラの真下で卓を囲んでわいわいと騒ぐ人や妖怪たち。

提灯の明かりでぼんやり照らされた宴会場は幻想的で、とても美しかった。

「なんだ。もう始めちゃってたの。しょうがないわね……っと、桜。呆けてないで行くわよ」

「あわ、ちょっと！」

せっかく宴会場の様子を眺めていたのに、霊夢はかまわず車椅子を押しだした。

会場の真ん中を突っ切って、この場で一番大きなサクラの真下へ向かうと、そこには『特別席』と小さく書き置きが置かれた卓があった。

「あれ、ここは？」

「私たちの特等席よ。さ、足を崩して座って待ってなさいな」

車椅子を降りて莫座の上に足を崩して座ると、霊夢がどこからか大量の寿司とお酒を持ってきた。

「えっと、私未成年だしお酒はちょっと……」

「何よ、もう飲む気？　まだみんな来てないでしょ？」

「いや、だから飲まないって……？　みんなって？」

不思議そうな顔した桜を見て、霊夢はぷっと吹き出して大笑いした。

「ちょっとちょっと！　自分で誘ったんでしょ？　もう忘れたの？」
「あ……」

みんな、とは宴会に招待した人のことだ。
桜は思いつきり霊夢に笑われて、顔を真っ赤にしながらうつむいてしまった。

『くすくす』

「も、もう！　カホリちゃんまで笑わないでよ！」

『ゴメンゴメン。さて、最初は誰が来るのかな？』

「ううん……誰だろうね？」

とりあえず桜はお茶だけもらって飲んでいると、トントンと肩を叩かれて振り向いた。

「こんばんわ」

「うわ！　紫さん！？」

最初に桜の前に現れたのは紫だった。

心無し、いつもより妖艶な雰囲気が強みを増しているような気がした。

……化粧品の匂いがするような気がする。

「そんな隙だらけな背中晒してたら危ないわよ？　ふふ」

「背中から出てくるのは紫さんだけで十分ですッ……って、その人たちは？」

紫の後ろに立つ二人の少女を見て桜は訊ねた。

紫が示す前に少女は一步前に出ると恭しく頭を下げてきた。

「お初にお目にかかる。私は八雲藍^{やくもらん}。紫さまの式神だ」
「初めまして！ 私は橙だよ！」

それにつられて頭を下げるもう一人の少女。
小柄で桜よりも少し背が小さい。
それより、桜が気になったのは両者の背で揺れる、

「……それ、尻尾？」

藍の背には黄金色に煌めく九尾が、橙には二つの尻尾がゆらゆらと揺れていた。

「そうだが、それがどうかしたのか？」

「あ、いや……なんでも」

「ふむ。おかしいな御仁だ」

「ダメよ藍ったら。彼女は私の大切な友人なのよ。失礼でしょ」

「も、申し訳ありません」

藍は紫には頭が上がないのだろうか、ひどくあっさり頭を垂れた。

「最初は紫か。んじゃ次は誰かしら？」

「誰だろねー？」

「……流石にこの流れは慣れたなあ」

いつの間にか桜の背中に覆いかぶさるようになってこいしが抱きついていて。

こいしがいるということはもちろん、

「すみません。私は止めたんですけど……」

「さとりさん、ホントに止めた？ 顔が笑ってるよ？」

「いいいえ。そんなことないですよ。ふふッ」

「さとりさま！ 私たちだっているんだからね！」

「そうだそうだ！」

遅れてやってきたさとりのペットたちも遠慮なく桜の卓に着いた。

地霊殿の人たちはこれで全員そろった。

後来ていないのは、

「お、ここか。って今年の宴会は妙な連中が混ざってるじゃねえか」

「あ、魔理沙さんだ」

魔理沙は桜の卓にいる人を一瞥してからため息混じりに呟いた。

「いいじゃん。人が多いほうが楽しいし！」

「知ってる顔ばかりなんだしいいじゃないの」

後ろから聞こえたのはアリスとあてなのこえだった。

三人はそのまま同じように桜の卓に座った。

「いやあ、宴会って何かドキドキするね！」

——ナニゴトモ、ハジメテノケイケントイウノハキンチヨウスルモノダ。

「……？ え、今誰がしゃべって……？」

辺りを見回すと、桜の目の前にあてなのぬいぐるみがちゃんと立って会釈してきた。

——シツレイ。ワタシハアテナノオモイデノ。

「ぬ、ぬいぐるみがしゃべったッ!？」

桜は仰天して可笑しな声を出してしまったが、だれも見向きもせず雑談を続けていた。

「みんな慣れちゃってるんだよ。最初は気味悪がってた人もいたけどさ」

「し、知らないなあそんなヤツ」

「す、すごおい……」

そして思わず手を伸ばしてぬいぐるみの頭を撫でる。
ふっかふかでもの凄く柔らかい。

——ムウ、テレルノダガ。

「すごいなあ……幻想郷ってホントにすごいなあ」

そして現在、十二名の少女が卓を囲んで雑談をしている。
卓にはまだ幾分かの余裕がある。
後來ていない人といえ……

「お、遅れましたッ!？」

「げ、うるさいパラッチが来たわ」

露骨に顔をしかめる霊夢。

視線の先には膝に手を当て肩で息する文の姿があった。

その後ろには、柵と雛がゆっくりと歩いてこちらに向かっている。

「別にそこまで急ぐ必要もないのに、先輩だけ飛ばし過ぎですよ」

「宴会かあ……誰か厄を零してるような人いないかしら？」

「雛さん、それはちよつと不謹慎では……」

「さあッ！ 私のカメラが光って唸りますよ！ スクープ掴めと轟き叫びまぐふうッ！？」

「余所でやれッ！？」

霊夢の飛び蹴りが文の鳩尾に直撃。

宴会場がまた一段と騒がしくなった。

けど、この騒がしさなら嬉しい気がする。

目の前で戯れる霊夢や文を見ていると自然と笑みがこぼれた。

ふと、宴会場の入口が騒がしくなって視線を動かすと、奥から三人組の少女が群衆の中から抜け出すようにしてやってきた。

「おお！ やってるやってる」

「博麗の地も満更でもないな」

「あ、あちらに桜さんたちの姿が見えますよ」

今度は諏訪子と神奈子、それと二人の巫女である早苗が桜の前に現れた。

その後ろの方で、里の人が両手を合わせて拝んでいる。

二人の神様のカリスマ性というヤツだろうか。

神奈子が軽く手を振るだけでどっと歓声がわき起こった。

「ふむ、宴会のついでにここに神社でも建てようか」

「良いお考えです、神奈子様」

「ドサクサに紛れてなに考えてんのよ！？」

「れいむはっけーん！」

「どれ、私たちも混ざろうか」

すると今度は、萃香と勇儀が酒樽を担いでやってきた。二人の全身からは既に酒独特の匂いが立ち込めていた。

「アンタたちもう呑んでたの」

「そこで二樽ほどな。なに、大した量ではないさ」

「お酒は匂いがきついなあ……ふう」

『交代しようか？』

「カホリちゃんだって生まれたばかりならお酒飲めないよ？」
『ええー！？』

そうして桜も霊夢たちとの雑談に興じていると、突然人々の喧騒がぴたりと止んだ。

「んん？　どうかしたのかな？」

「穏やかな気配じゃないが……誰だ？」

勇儀の目が鋭く細くなる。

人混みに視線を移すと、白い日傘がこちらに向かっているのが見えた。

喧騒はいつの間にかどよめきのような不穏な声に変わっていた。

「あら、もしかして桜ちゃんが呼んだの」

「私、警告しませんでしたっけ？　結局行ったのですか？」

紫とさとりが桜に詰め寄る。

さとりはやや険悪な表情を浮かべていた。

「だ、大丈夫だって！　え、えと、私が行ってくる！」

「あ！　ちょっと待ちなさいって！？」

車椅子に乗って日傘の方へと走っていく。
白い日傘の下には赤茶の目が桜を覗いていた。

「幽香さん、来てくれたんだ！」

何故か幽香は日傘で顔を隠しながら少し声のトーン低めに答えた。

「その、まあ、近くを通ったから顔を出そうと思っただけ……よ」

「ありがと！ ほらほらこっちこっち！」

「な、何も引っ張らなくても……！」

桜は強引に幽香の手を取って走り出すと、自分の席の隣に座るように促した。

おずおずと遠慮がちに足を崩して座る幽香。

何が恥ずかしいのか、幽香は席についても日傘を手放さなかった。

その異様な光景に霊夢は我が目を疑った。

「アンタ。一度は桜を喰らおうとしたのに、これはどういう風の吹きまわしかしら」

「……もう喰らおうとか考えてないわ。それだけ」

「まあまあ！ ほら、宴会なんだから細かいことは気にしないでさッ！」

桜の笑顔に負けて、霊夢はそれ以上追及しなかった。

「ここで無粋なコトをいうのも無粋よね。わかったわ。今日はもう何も言わない」

「こ、これこそまさに私が求めていたスクープですよッ！ 花園の大妖怪が博麗神社の宴会に現れ私の首筋に日傘があッ!?」

「……口は災いのもとですよ、先輩」

卓の豪勢な料理を食べつつサクラを見上げながら、桜はとても有意義な時間を過ごしていた。

「カホリちゃん、聞こえる？」

『ん？ なんだい？』

桜はカホリに呼びかけると小さな声であるお願いをした。

「ちょっとだけ、チカラ貸してくれないかな」

『あ、もしかして同じことを考えてない？』

「わかるの？」

『もちろん。じゃ、早速やろっか』

桜はうんとうなずくと、サクラの樹の真下に歩いて精神を集中させた。

どうせなら、私も何か協力したい。

サクラの枝に向けて指を弾くと、淡い桃色の粒子がサクラに降り注いだ。

……これで、よし。

「あら、この香りは……」

真っ先に反応したのは幽香だった。

杯を握りながら首を上げてサクラを見つめる。

その香りにほとんどの者が気づき一様に首を上げた。

「おお。何だか良い香りがするなあ」

「甘ったるいが上品な香りだ。こんな香りの酒でも呑みたいもんだ」
「この香り……」

霊夢には覚えがあった。

花のように甘いのが、どこか儚くて優しい香り。

それは、今となってはズいぶん前の話だが……

霊夢は桜に振り返るとサクラの樹を指差した。

「これ、桜たちよね？」

「そうだよ。ちよつとカホリちゃんに手伝ってもらってさ」

『ふふん！ 私のお気に入り香りの香りってヤツさッ』

「……この香りはね」

桜は少しもったいぶるように溜めてから口を開いた。

「サクラの香りだよ」

微笑む桜。

すると一陣の風が薙いで桃色の花吹雪が宴会場を包みこんだ。

第四十三話 博麗大宴会 『上』 (後書き)

今まで書いたお話の中で一番文字数の多いページです。
少し急ぎ足で書いたのでちょっと心配ですが……；

お気に入り登録、評価ポイントが再び上がりました♪
評価してくださった方、登録してくれた方、ありがとうございます。

第四十四話 博麗大宴会 『下』

華やかだった宴会も、終わりを迎えてしまえば途端にしおらしく見えてしまう。

そんなことを考えながら、桜は宴会に来てくれた人たちを一人一人丁寧に送っていた。

「今日はとても楽しかったです。また今度、機会があれば遊びに来ますね」

「ばいばいおねーさん！」

「私たちも楽しかったよ！」

「お隣、私まだ何も食べてないよ？」

「帰ったらまた食べればいいじゃん」

「そうだね！ お隣は頭いいな！」

「それじゃみんな、帰り道気を付けてね」

さとりたちはそのまま仲良さそうに笑いあいながら宴会場を後にした。

「さて、アタシたちも帰るか」

「そだね。アリス、今度は一緒に劇でもやろうよ」

「それは良い考えね。今度小道具でも用意しましょうか」

「人形とぬいぐるみの劇かあ……何だか楽しそうだね」

三人は桜に手を振ると、夜空に向かって飛び出した。

あ、そういえばぬいぐるみの名前訊いてなかったな……

「で、では、私たちはこれで……」

「失礼します。宴会、とても楽しかったです」

「私も久々に楽しめたわ。ありがとう、桜さん」

「いえいえ。私も楽しかったです。ありがとうございました」

満身創痍の文を抱えながら、椛は桜に一礼して宴会場を出て行った。

「そろそろ私たちも帰りましょうか」

「うむ、そうだな。新しい神社の建設予定地も決まったし」

「ホントに神社作るの神奈子？」

「そうだな……どうだろう、桜。我々の新しい神社の巫女になるというのは」

「だから勝手に侵略すんなんて言ってるでしょうがッ！」

「巫女かぁ……なってみてもいいかもって冗談だよ霊夢。冗談なんだからそんな恐い顔しなくてもいいじゃん」

暴れかけている霊夢を抑えながら桜は三人に別れを告げた。

「じゃあ藍に橙。私たちも帰るわよ」

「はい、わかりました」

「ばいばい！」

「それじゃ、おやすみなさい」

桜の挨拶を訊くと、紫たちはすき間からそそくさとどこかへと消えて行ってしまった。

残っていた幽香も日傘をさして歩きだしていた。

「幽香さんも、ありがとね。楽しかったでしょ？」

「……………まあ、それなりに」

そして日傘で顔を隠したまま一度桜に振り返って、

「そ、その……」

「ん？ なに？」

「……………さいね」

「へ？ 今何て言って……」

桜が訊き返そうとしたときには既に、幽香は宴会場を出て行ってしまった。

何を言っていたのか結局聞き取れなかった。

「しかし、よくもまああの幽香を誘ったわね。一度は襲われたってのに」

「あの人、どこか寂しそうな感じがしたから気になってたんだ。楽しんでくれたならいいけど……」

「……さ、そろそろ戻るわよ桜」

「でも、この片づけは？」

「別の人に任せてあるから心配無用よ。それと……」

「それと？」

「……後で、話すわよ」

「え……？ う、うん。わかった」

すると霊夢は顔を赤く染めながら桜の車椅子を押し始めた。

斜面を上る間、霊夢はずっと黙ったままだった。

何か気に障るようなことでもしたのかと、桜は気になって仕方がなかった。

・
宴会が終わって神社に戻ったころには、夜もすっかり更けて空には星が瞬いていた。

霊夢は桜を押したままいつもの丘へと登った。

車椅子を止めると霊夢は桜の横でちゃんと腰を下ろした。

「……霊夢、どうかしたの？」

「ち、ちよつと夜風に当たろうと思っただけよ。少しぐらい付き合いなさい」

「うん……？」

しかし、霊夢はどこかそわそわしている様子で落ち着きが無かった。あんまりにも気になった桜は思い切って霊夢に訊ねてみた。

「霊夢、どうしたの急に？ 昨日も元気無かったし、何かあったの？」

「そ、それはその……」

口ごもる霊夢は桜から少し目を反らしていたが、やがて何かを決心した様子で一度うなずいた。

「その、実は、桜に渡そうと思ってその……」

「私に渡そうって、何を？」

すると、霊夢は懷から小包を取り出した。それは昼間露店で買ったあの小包だった。

「それって、今日のお昼に買ってたやつだね？」
「そ、そうよ。ほら、開けてみなさいよ」

ぶっくらぼうに手渡された小包を丁寧に破ると、

「これは……」

『簪かんざしだね』

包み紙の中には小さな桃色の簪が入っていた。

サクラの花びらを模した装飾がとても綺麗な簪だった。

桜は簪と霊夢とを交互に見て、

「あ、でも、これはどうして……?」

すると霊夢は面と向かうのが恥ずかしいのか急に明後日の方向を向いて、

「その、御礼というかなんというか……んっと、ほら、桜も結構頑張ってたでしょう? だから何かご褒美でもしてあげようかと思っ
て、その……」

「れ、霊夢……」

思わず声が震えそうになるのを堪えて、桜は早速もらった簪を挿してみた。

「……えへへ。どうかな。似合う?」

「そんなの、鏡でも見ればいいじゃない」

「霊夢の意見が訊きたいかなあ、なんて」

すると、霊夢がやっと振り向いてくれた。

気のせいか目元が少し潤んでいるような気がした。

「まあまあね。悪くないってとこ」

「むう。そこは素直に似合ってるのか言っただけだったかな……」

「……そうね。まあ似合ってるわよ」

「ふふ、ありがと」

桜が微笑むと、霊夢は急に深刻そうな表情をして、

「……ねえ、桜」

「なに？」

「これからのこと、どうするか決めた？」

桜は少し迷ったような顔をして、霊夢に答えた。

「んと、前に紫さんに訊かれた時は保留って言っちゃったんだけど……さ。何となくだけど、やりたいことは見つけたつもりだよ」

「やりたいことって？」

星の瞬く夜空を軽く見上げて桜はつぶやいた。

「私、幻想郷を旅してみたいなって思ってる」

「旅？」

「うん。旅行って感じよりもちよつと真面目に。だから旅をしたいの」

「……そ、そう」

霊夢の声が急に沈んだような声音になった。

桜が振り向くと、霊夢の瞳は少し揺らいでいるように見えた。すると、霊夢は急に立ち上がってくりりと回れ右すると神社の方へと歩き出した。

「……霊夢？」

「そろそろ寝るわ。桜も、今日はもう疲れたでしょ」
「あ、うん……？」

霊夢の背中を追いかけながら、桜は斜面を駆け降りた。

第四十四話 博麗大宴会 『下』（後書き）

評価ポイント300pt越えましたッ！

ありがとうございます。

……時々書いてて思うんですけど、オリキャラの絵が見てみたいですねえ

ずっと前に一番最初の創作の主人公は書いてもらったけどそれっきりだったし……

もしも読者の方に絵描きの方がいて描いてくれるって優しい人がいれば……w

そして何故か、今日だけアクセス数が全体的に少し多くなってたのはなんでだろう？

第四十五話 涙の指切り

「なるほど。桜ちゃんは元の世界には帰らず、この幻想郷を旅したいのね」

次の日の朝。

ちょうど紫が神社を訪れていたので桜は自分のこれからについて話しかけた。

すると紫は柔らかな笑顔を浮かべて答えてくれた。

「いいじゃない。是非この素敵な幻想郷を自分の目で堪能してちょうだいな。それで、出発は何時かしら？」

「それはまだ決めてないんですけど、早ければ明日とかにでも」

「ふふふ。善は急げってことね。なら当然旅支度が必要ね。ヒマなら霊夢と一緒に里まで行って買ってきたら？」

紫の口から霊夢の名を訊いた途端、何故か桜は軽くうつむいて、

「……それが、今朝起きたら霊夢の姿が見当たらなかったんです。紫さん何か知りませんか？」

「そういえば姿が見えないわね。どこか出かけたのかしら」

「朝ご飯はちゃんと卓の上に出てたんだけど……」

「……あ、もしかして旅のこと霊夢にも言った？」

桜は不思議そうな顔してからもちろんとうなずいた。
すると紫が額に手を当てて、

「それが何か関係あるんですか？」

「大ありよ。もう、鈍感なのも大概にしなさいな」

「ど、鈍感って……」

「霊夢は桜ちゃんのこと、何だかんだで結構気に入ってるのよ。だから旅なんて訊いて寂しくなったのよ」

「え？」

霊夢が、寂しい？

私を気に入っている？

桜が目丸くしていると、紫はそのまま話を続けた。

「最初は本当に面倒くさがってたみたいだけど、桜ちゃんと一緒にいるうちに霊夢も満更でもなくなったんじゃないかしら。だから空を飛ぶ練習も付き合って、本気で桜ちゃんを助けたり、宴会の手伝いも事前に決めてたりして、桜ちゃんのこと結構大切に思ってたんじゃないかしら」

「……………」

『……桜、霊夢を探しに行かない？』

「あ……う、うん。行くよ。でも、何処へ行けばいいんだろ……」

「霊夢を探しに行くのね。だったら見当ついてるからそこへ行ってみたらどうかしら」

「見当って……？」

すると紫は、神社の奥の森を指差した。

・

博麗神社の奥にひっそりと存在する門のすぐ目の前で、霊夢は一人ぼんやりと空を見上げていた。

「……旅、か」

雲が春風に乗ってゆっくりと流れるのを見つめながら霊夢はつぶやいた。

つい数日まで一緒だった友人が、突然言ったあの言葉。

霊夢は正直訊きたくなかった。

本当は、このままずっと一緒にいられるんじゃないかと心の底で霊夢は思っていた。

最初は確かに厄介事だった。

でも、今となってはかけがえない友人として霊夢の心に浸透していた。

だから、あの一言が、別れを簡単に告げられたような気がして少し寂しかった。

……寂しかった、か。

「……馬鹿みたい。そこまで本気にしてないわよ。友人だと言っても、結局は他人じゃない」

他人。

結局桜は赤の他人。

突然紫が連れてきて、何だか香りをまき散らしながら妖怪に襲われて、高い所が苦手なくせに飛びたがる他人。

他人……なんだ。

「他人なら、別にどこへ消えたっていいじゃない……それなのに……」

膝に顔を埋めて小さく、かすれるような声で霊夢はつぶやく。
消えたっていいのに。

それなのにそれを拒絶する心が自分の中に確かに存在している。

こんな気持ち、霊夢は知らなかった。

「それなのに、どうして……どうしてこんなに、胸が苦しいのよ……」

経験のない痛みが胸を締めつける。

人と、友人との別れというものは、こんなにも苦しいものなのだろうか。

霊夢がほとんど泣きだしそうになっていたその時、突然近くの草むらが揺れた。

ハッと顔を上げて振り向くと、草の陰から桃色の巫女服が見えた。

「……ここに、いたんだ」

「さ、桜……ッ」

慌てて涙を腕で拭って立ち上がると顔を見られまいと背中を向けて、

「な、何しにきたのよ。こんなとこまで」

「霊夢を探しに。昨日言ったでしょ。旅に出ること」

「……………」

「私は、すぐに帰ってくるから」

桜は霊夢の背中に語りかけるようにして続けた。

「旅が終わればすぐに戻ってくるからさ。その間もしかしたら寂しいかもしれないけど、霊夢には私を待ってほしいな……なんて」

「……寂しいわよ」

「え……」

ゆっくりと桜に振り返ると、霊夢は震える声で叫ぶように言った。

「い、今まで一緒だったヤツに、あんな簡単に別れを告げるようなこと言われれば、そりゃ、寂しいに、決まって……」

「その……えと、ゴメン………」

「あ、謝らないでよ！ これじゃ、私が惨めじゃない……」

「霊夢……」

霊夢の頬に、涙が零れていた。

初めて見る霊夢の涙に、桜は言葉を失ってしまった。
と同時に、目の前の視界が滲んでぼやけ始めた。

「わ、私は帰ってくるから、絶対、博麗神社に帰ってくるから。……だからそんな、な、泣かないでよ霊夢……」

「だ、誰のせいで、こんな……」

ぼろぼろと泣きあう二人。

桜は霊夢の傍へと歩くと、そっと自分の小指を立てて霊夢に示した。

「や、約束する。絶対、神社に帰ってくるからさ。だから、指切りしよ？」

「そんな、子供騙しみたいなコト……」

「いい？ やるよ？」

半ば強引に霊夢の指をからめて、

「旅が終わったら私は帰ってくるよ」

「や、破ったらタダじゃ済まないから、覚悟しなさいよ！」

「うん。……いろいろありがとね、霊夢」

二人の指が約束の契りを交わすと、桜は精一杯微笑んで霊夢をひし

と抱きしめた。

大切な親友ともだち おもいでの香り、忘れないように……

・

「それじゃ、紫さん。いろいろとお世話になりました」

神社の入り口で、桜は紫に深く深く頭を下げた。

桃色の巫女服はそのままだが、背には大袈裟ではないかと思われるほど詰まったリュックサックを背負っている。

中には霊夢が最後に持っていけ持っていけど無理やり渡された食料やら替えの衣類やらでパンパンに膨らんでいた。

「霊夢は……来ないのね」

「一番最初に挨拶は済ませてきましたけど……それでも、やっぱり辛いのかな」

「そりゃ、ね。さて、他の子たちも来たみたいよ？」

「他の子たち……？」

『ほらほら桜！ あっちあっち！』

すると、カホリが示した方向にいくつかの人影が見えた。

手を振りながら歩くその姿は、

「おねーさーん！」

「あ！ こいしちゃんたち！」

道の向こうから、古明地姉妹が走ってやってきた。

桜のそばまで駆け寄ると、真っ先にこいしが飛び込んできた。

「はあ、ふう。さ、桜さんが旅立つと紫さんから訊いて飛んできました」

「おねーさん、ホントに行っちゃうの？」

「うん。こいしちゃんもさとりさんも、本当にいろいろお世話になっちゃって……ありがとう」

「心を読む必要も、ないですね。それにしても、何だか寂しくなりますね」

「でも、すぐに帰ってくるんでしょ？」

「旅が終われば、ね」

こいしを優しく離すと、桜は思いつきり微笑んで、

「二人してそんな顔しないでよ！ 泣き顔を見るのは一人で十分なんだからさ」

「へ？ 泣き顔……って？」

「……あら。ふふ、これは本人の名誉のため、黙っておきますね」

「あ、おねーちゃんずるい！ 教えてってば！」

「まあ、そのうちね」

二人はそのまま笑っていてくれた。

正直、こいしは泣きだすんじゃないかと心配していたが、それほどうやら杞憂に終わったようだ。

「それじゃ……」

そして、桜は荷物を背負い直して三人と向き直った。

「そろそろ行くよ。旅が終わればこの神社に戻ってくるから、それまでみんな元気でね」

「ええ、気をつけて」

「またお会いできる日を楽しみにしてますね」

「……うん、じゃあねおねーさん！　いってらっしゃい！」

三人の笑顔を見て、桜も笑って答えた。

「うん、行ってきますッ」

そして桜は歩きだした。

・

『これから、どこに行くのさ』

「わかんない。けど、とりあえず」

『とりあえず？』

「西に向かってみようかな……ほら、今西風が吹いてる」

『香りを操る私たちらしいね。風の向くままってヤツじゃん』

「風に乗って旅出来たら嬉しかったのにな」

『もし上昇気流とかに乗ったらどうするのさ』

「そ、それは……出来たら乗りたくない」

『相変わらず高いところダメなんだね』

「結局これだけは治らなかったな……まあ、いいけど」

車椅子を揺らしながら、桜とカホリは西へと向かって歩き出した。

この先に、何があるのかはわからない。

けど、絶対に見たことのない世界が広がっている。

「カホリちゃん」

『ん？ なに桜ちゃん？』

「これからも、よろしくね」

『もちろん。じゃあ……あ！ 桜！ 神社の方、見て！』

「神社の方って……あ！」

振り返ってみると、ちょうどいつも桜が登っていた丘の上に小さな赤い人影が見えた。

もう小さくて、手を振っているがやっと見える程度だったが、それは紛れもなく霊夢だった。

桜も、見えるかどうか構わずに手を大きく振ってみせた。

「……帰ってくるよ。絶対。私の、私たちの帰る場所は、あの神社なんだからさ」

『それじゃ、行こ！』

桜は、霊夢の姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。いつまでも、いつまでも……

第四十五話 涙の指切り（後書き）

次回、最終回……ですけど、まだ終わりません；
外伝が残ったまんまですからね。

あとがきも、最後の最後に書く予定です。

……しかし、物語の最後っていつも躊躇うんですよね；
こんなんでいいのかな？ とか、
ちよつと違和感があるような？ とか。

まだまだだなあ……はあ；；

終章 香る巫女は春風と共に

あれから、桜が旅に出てから幻想郷は四季が一巡した。

霊夢は以前と変わらず、神社の縁側でのんびりと四季の移り変わりを楽しみつつ過ごしていた。

……そして再び春が訪れるころ。

霊夢はやや物足りなさを感じながらひなたぼっこをしていた。感じている物足りなさは、

「……サクラ、か」

咲き誇るサクラの花びらを見つめながら、霊夢は感じていた。

このサクラには、香りが無い。

サクラはもっと、優しくて儂いような、上品な香りがするのに。

今日の前で咲き誇っているサクラにはそれがない。

里の人間に訊いてみると、サクラは普通に香ることは滅多にないとのことだった。

「アイツがいればすぐにでも作ってくれそうだけど……いないヤツに言ってもしょうがないか」

茶菓子をかじりながら霊夢はぼつりとつぶやいた。

傍には誰もいない、いつかと同じ光景。

友人が旅立って一年が過ぎた。

すぐに帰ってくる、と言っていたが結局手紙一つ寄越さない。

旅先で元気になっているのだろうか。

それとも、変な妖怪にでもつかまって喰われてしまったのだろうか。

「ずいぶんと勝手な妄想をしているのですね」

「……また来たの、さとり」

すると、庭先からさとりが顔を出した。

その後ろにくっつくようにして妹のこいしも一緒だった。

「おねーさん、まだ帰ってこないのかな」

「見ての通りよ。帰ってれば匂いでわかるでしょ」

「そうですね。今は何だか微妙に年寄りくさい匂いがしますもの」

「……ケンカ売ってんのかアンタは」

さとりはフツと目を伏せて、

「……一年。人から見てもさほど長い時というわけでもないのに、やっぱり寂しいですよね」

「私は静かになって清々してるけど」

「それが、本心ではないということぐらいわかってますけど？」

「……………」

茶菓子に伸ばしかけていた手を止めて、霊夢はふうと息をついた。

「何だかんだ、変な奴だったわよね。高いところは苦手なくせに飛びたがるし」

「イイ匂いのおねーさんだし」

「あの大妖怪までも和ませてしまったり……あ、そういえば、その幽香さんもすぐそこまで来てるんですよ？ 知ってましたか？」

「知ってるも何も、ついこの前鳥居の影に隠れてコソコソしてたわよ。何の用よって聞いたしたら、『貴方には用ない』ってさ」
「ふうん……」

さとりは霊夢のそばに腰掛けると皿の茶菓子をつまんだ。

それから、しばらく無言で時が進んだ。

太陽が中天を越えて日差しがいつそう強くなってきたころ、目の前の空間が歪んで“すき間”が開いた。

「こんにちはって、あなたまでそんな年寄りくさいこととしてどうしたの」

「いや……えと、何となく」

「はあ、しょうがないわね。霊夢、私にもお茶ちょうだい」
「アンタも飲むの!？」

霊夢が渋々湯のみを持ってきて茶を淹れると、四人で縁側に座り込んですすった。

「いいわね。こんな余生なら悪くないわ」

「いつぞやは思いつきりひなたぼっこ馬鹿にしてたくせに、いったいどういう了見なのよ」

「霊夢」

紫が急に真剣な表情になって霊夢を見据える。
突然のことで思わず霊夢はたじろいだ。

「な、なによ」

「良い報せと、悪い報せが一つずつあるの。どっちから訊きたい？」

「はあ？ 急に何なのよ……じ、じゃあ悪い方から訊こうかしら？」

「そろそろ、ひなたぼっこを止めた方がいいわよ」

「は？ どうして止めなきゃいけないのよ？」

「忙しくなるから、かしら」

紫の笑顔の意味が分からず首をかしげる霊夢。

「……？　じゃ、良い報せってのは何よ」

「あら、気づいていないの」

「何を……？」

すると紫は霊夢の鼻をちゃんと指をあてた。

「ち、ちょっと！？」

「ふふふ。一番寂しがってるくせに意外と鈍感なのね」
「だ、誰が寂しがって……ッ？」

ふと、暖かな春風が神社に吹き抜ける。

サクラの花びらを散らしながら、いつか感じたあの香りがふわりと漂ってきた。

あの、甘く、儂い香り。

「え、この香り……」

「もしかして！」

「あ、ちょっとこいし！？」

何を思ったのか、こいしは突然縁側を飛びだし駆け出していった。

それを慌てて追いかけるさとりは、一度霊夢を振り返って小さく微笑んだ。

「ほら、霊夢さんも」

「……しょうがないわね」

霊夢は渋々答えて腰を上げて歩き出したが、すぐさま神社の入り口に向かって駆け出した。

息を切らして、ひたすら走って、鳥居のそばのこいしを抜きさって

石段を一気に飛び降りた。

坂道を転げ落ちるような勢いで走っていくと、やがて目の前に小さな人影が見えた。

忘れもしない、桃色の巫女服。

髪に挿したサクラの簪は陽の光を反射して煌めいている。

人影はゆっくりと振り返って、微笑んだ。

「あ……霊夢」

「はあ、はあ……遅いじゃないの、まったく」

膝について息を整えて、霊夢は顔を上げた。

銀と黒の瞳が懐かしそうに霊夢を見つめていた。

「えへへ。いろいろあつて遅れちゃった。ゴメンね」

「い、いいわよ別に。無事に帰って来たんだし」

「……霊夢」

「なに、桜」

二人の間を、麗らかな春風が吹きぬける。

少し頬を染めながら霊夢に告げた。

「……ただいま」

「……おかえり」

二人して頬を真っ赤にしながら、霊夢は桜に向かって勢いよく飛び込んだ。

「旅のこと、霊夢に山ほど話したいことがあるの！」

「はいはい。しょうがないから訊いてあげる。車椅子、押してあげ

るわ」

神社へと伸びる坂道を、霊夢と桜はゆっくりと歩き出した。
頭上で咲き誇るサクラが春風に揺れると淡い香りが広がった。
そしてその香りは幻想郷中へと広がり桜の帰郷を告げた。

もしも、あなたが幻想郷で素敵な香りを感じたならば、まずは博麗神社に足を運ぶといい。

そこに行けばきっと、車椅子姿の一風変わった巫女が歓迎してくれるはずだから……

（Fin）

終章 香る巫女は春風と共に（後書き）

東方空想夢 \ D r e a m s o f s k y f a n t a s i a \

完結

相変わらず中途半端な終わり方で……;;

明日からは外伝を書いていきます。

引き続き読んでくれると嬉しいです。

評価、お気に入り登録等、いつもありがとうございます。

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第一話

霧雨魔法店。

魔法の森の中に位置する小さなお店。

しかし、一言に店と言っても商いを営んでいるといった様子はまるで見られない。

店主が常に常駐してるわけでもないし、かといって何か商品が陳列されているわけでもない。

あるのは何やら怪しい薬やらキノコやらと、そこらじゅうに散らばっているぶ厚い本ばかり。

そんなごちゃごちゃした部屋の二階で、一人の少女が裁縫をしていた。

若草色のローブに白いエプロン。

背まで伸びた青い長髪。

そして肩には、小さな白いクマのぬいぐるみがちゃんと乗っていた。少女は真っ白なカーテンを針と糸でちくちくと修繕していた。

「魔理沙の家に招待されたから何かと思ったら、まさかカーテン直してほしいからって……」

ビリビリに破れたカーテンを縫い終わって糸を噛み切ると、両手でバツと広げてみた。

穴はもう見当たらないし、少し刺繍で飾ってあるから前より見栄えが良くなっている。これなら大丈夫だろう。

あてなはそれを綺麗に畳んで抱えると、部屋のドアを開けて階段を下りていった。

・

「魔理沙？ カーテン直ったよ……って」

部屋に足を踏み入れた途端、あてなは大きくため息をついた。
目の前に広がる本の山、山、山。

そしてそのど真ん中で大の字になって豪快に眠る金髪の少女。
この霧雨魔法店の主、霧雨魔理沙。きりさめまりさ

魔理沙は本を枕とベッドにしながらよだれを垂らしていた。
何というか……だらしないし、はしたない。

あてなは魔理沙の体を揺すぶりながら、

「ほら、起きなよ魔理沙。頼まれてたカーテン直ったよ？」

「んにゃ……弾幕が……薄……だぜ、何やって……」

「どんな夢見てんだろ……？」

すると、肩のぬいぐるみが不意に玄関を指差して、
(ぬいぐるみなので指、かどうかは怪しいが)

――アテナ。ダレカガキタミタイダゾ？

「うん？ 誰かってアリスじゃないかな？ たまに来るって言うって
たし」

そして程なくしてコンコンと軽くノックする音が聞こえてきた。

来客なら早く出ないと失礼だろう。

しかし、当の主は大いびきをかいているし……

「しょうがない。ボクが代わりに出ようか。はい、ちょっとお待ち
くださいな」

本と本の間を軽々飛び越えながら玄関のドアを開く。
すると、ドアの前には仏頂面な少女が立っていた。

「えっと……ど、どちらさま？」

紫色の髪に、今すぐにでもベッドに入って眠れそうな格好の少女は怪訝そうな表情を浮かべてあてなを見つめた。

「まずは、自分から名乗るのが礼儀じゃないのかしら」

「あ、ゴメンなさい。ボクは糸柳しりゅうあてなって言います。それであの、あなたは……？」

「パチュリー・ノーレッジ。魔理沙に用があってきたのだけど、どうして貴方がここに？」

「え？　ボクは魔理沙に呼ばれてカーテン直しに来ただけだけど……？」

「そう。とりあえず、お邪魔するわ」

「あ、え、ちよっと……！」

ずかずかと遠慮無しに上がるパチュリーをあてなは慌てて追いかけた。

そのまま廊下を抜けて魔理沙が寝ている居間（と、魔理沙が豪語していた）に入りこんできた。

相変わらず本に埋もれながら眠り続ける魔理沙。

パチュリーは寝顔をじいっと見つめてから、少し頬を紅に染めて、

「……天使の寝顔ね」

「は？　い、今何て？」

「起きなさいよ魔理沙。ほら、そんな恰好していると襲う……コイツに襲われるわよ」

「し、失礼な！？　ボクにそんな趣味ないよ！？　ってか、今あな
たが襲うとかがッ？！」

無理やり口に百科事典を突っ込まれた。

あてなが百科事典と格闘していると、魔理沙がゆっくりと目を覚ました。

「うるさいな……昼寝ぐらいゆっくりさせてほしんだぜ……？」

「起きたわね魔理沙」

「ん？ パチュリー？ 珍しいなこんな時間にとわ！？」

「本を取り返しにきたのよ。今日という今日は貴方が勝手に持ち出した紅魔館の本全部回収させてもらうわ」

そう言って、パチュリーは魔理沙が布団代わりに下敷きになっていた本をさっそく抜き取った。

それから次々と本を回収して回収して……

「ば、バカ止めろって！？ その本まだ読んでないぞ！ おおい！

そ、それもダメだったのに！」

「うるさいわね。そんなに読みたければ図書館で読めばいいでしょ？」

「それだとお前がうるさいんだろ！ いちいち興味のない魔道書とか通販カタログだとか見せてくるんだろうが！」

「私の勧めた本が読めないっての！？」

「ち、がーうだろがッ！！」

「ああ、えっと……ぼ、ボク帰るね魔理沙。お邪魔しまし」

「あ、こら待てあてな！？ 逃げるなんて卑怯だぞ！」

「ボクには関係無いもん。んじゃねっておぶッ！？」

「きゃッ！？」

ドアを開けて前進した瞬間、何か柔らかいものと正面衝突した。その衝撃であてなは思わずぺたりと尻もちをついてしまった。

「あてて……な、何だいったい？」

「あら、あてなじゃないの」

「アリス！」

手を差し伸べたのはアリスだった。

その手を取って起き上がるとあてなはニツと笑って、

「久しぶりだね。どうしたの？ 魔理沙に用事？」

「ま、そんなとこよ。あなたも？」

「私は用事済ませて帰るところだよ」

「こら！ 帰っていいだなんていつてないぞ！？」

「もう。ボクはカーテン直したでしょ。そろそろお腹空いたし帰りたいんだけど……」

「……それと、どうして彼女がいるのかしら？」

アリスが睨みつけるような視線をパチュリーに向けた。
パチュリーも仏頂面で見返すと、

「あなたには関係無いわ」

「だったら今すぐ魔理沙から手を離したらどうなの？」

「それこそあなたには関係ないわ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「……えっと、おまえら？」

「ぼ、ボク帰るッ！」

「あ、コラ！ 逃がすか！？」

脱兎の如く駆け出したあてなに向かって、魔理沙はポケットから小さな物を取り出した。

それは六角形をした小さな炉であり、魔理沙にとっては武器であり大切な一品であるミニ八卦炉。

精神を八卦炉に一気に集め目標を定める。

もちろん、目標は逃げ出した脱兎^{あてな}。

「喰らえ！ マスタアアアアアスパアアアアクッ！！」

「へ？ いま、マスタースパークってにぎゃあああああ！？」

瞬間、魔理沙が放った激しい閃光があてなを一瞬で包みこんだ。

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第一話(後書き)

東方空想夢外伝『ワルプルギスの夜?』スタートッ。

これは本編十六話周辺でのサイドストーリー的な物語です。

はたして、あの時魔理沙の言っていたパーティーとはいったい何なのか……?

まあ、ちょっとした息抜きの軽いお話ですので、これからまた読んでくれたら嬉しいです。

……そして、お気に入りユーザーが一人減っちゃいました。ぐすん；でも、今まで登録してくれてありがとうございましたm（　　）m

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第二話

閃光が直撃して黒焦げになったあてなは渋々魔法店に戻った。おかげで肩のぬいぐるみ共々アフロヘアになってしまった。

「あのさ、その……普通それぶっ放す？」

「ついうっかりってヤツだよ。何度も謝ったじゃねーか」

——アテナ。オコッテイインダゾ？

しかしあてなはため息一つ吐いてソファに腰掛けた。

「……で、何でボクを呼びとめたのさ。カーテン以外にも何か直せってコト？」

「んにゃ、そうじゃなくてさ」

魔理沙は指をピンと立ててちょっと気取りながら話した。

「せっかくあてなは思い出のソイツと巡り合えたわけだろ？ だったらお祝いしてやろうかと思ってさ」

「お、お祝い？」

「へえ、魔理沙にしてはいい案じゃない」

「だろ？ だから今日はパジャマパーティーでもやろうと思ってさ」

『『ば、パジャマパーティー！？』』

ガガタッ！

派手な音を立てながらアリスとパチュリーが立ち上がった。

「なんだよお前ら血相変えてよ。ただのお泊り会ってやつだろ。ん

な大袈裟なもんじゃないって」

「ほえ……魔理沙の家にお泊りか。そういえば、魔理沙の家でお泊りなんて初めてだね」

「おお、そうだったな。まさに『初夜』ってヤツだな」

『『し、初夜ですってッ!?!?』』

ガタッ！ ガタッ！

「いちいち音を立てないと立ち上がれんのかお前ら。てかまた座ってたのか」

「でもさ、お泊りって具体的に何するの？」

あてなが興味津津といった様子で身を乗り出して魔理沙に訊ねた。

「ん？ そうだなあ……夜更かしとかして菓子食ったりとかだな」

「夜更かし……お菓子……」

あてなは頭の中で想像してみた。

魔理沙たちと一緒にお菓子食べて素敵な一夜を共にする。

……それなのに、何故か期待とともに一抹の不安を感じたのは気のせいだろうか。

恐らく原因はあてなに突き刺さる鬼気迫るような視線のせいだが……それでもあてなは笑ってうなずいた。

「な、何だか面白そだね！」

「だろ？ だけとお祝いなんだからやっぱケーキとかの方がいいよな……」

すると魔理沙は落ちていた帽子を深く被って箸を握りしめると玄関

へと歩いて、

「というわけで、ちょっとケーキ買ってくるぜ。たしか里に菓子屋があったよな」

「それまで、ボクたちは何してればいい？」

「そうだな……じゃあ」

魔理沙は床に散らばる本やゴミを適当に指差して、

「この部屋の掃除だな。とりあえずテーブルとイスを発掘しておいてくれ。じゃな！」

「は、発掘って……あ、ちょっと魔理沙!？」

そう言って魔理沙は箒に飛び乗って飛んでいってしまった。

ポツンと取り残されたあてなはくると振り向いて部屋の惨状をもう一度見た。

「まあ、お掃除は好きなんだけどさあ……」

——ソレヨリモ、アノフタリハドウスルンダ。

ぬいぐるみが凄い形相でにらみ合うアリスとパチュリーを指差した。

「掃除ですって。それじゃ、まずは目の前の粗大ゴミでも消し去りましょうか」

「あら。粗大ごみってのは貴方のことでしょうか？ 運ぶのも面倒なんだからさっさと自分でゴミ捨て場にでも行きなさいよ」

バチバチと火花を散らしながらにらみ合う二人。

まるでその背に龍と虎が互いに威嚇し合っているようなオーラがバリバリ出ているようだ。

まさに一触即発。

「……放っておいたらここが壊されちゃいそうだね」

——ダメツテカエレババレナインジャナイカ。

「だけど、せっかく魔理沙がお祝いしてくれるんだよ？ それに、ボクもすごく嬉しいんだし」

——ジャア、ヤツラヲドウスル？

「ん……そうだね。ちょっと強引だけどイイ考えがある」

するとあてなはポケットから術符を取り出し意識を込める。
スベルカード
そして二人が取っ組み合いを始めた瞬間、あてなは魔法の力が込められた術符を握りしめ二人の少女に向かって放った。

「二人とも、ちょっとの間ジタバタしないでよ？ 縫符『フィツチング・スレッド』！」

「なッ！？ あてな！？」

「な、なによコレ！？」

術符から放たれた光が一筋の糸となって掴みあう二人をあっという間にぐるぐる巻きにすると、二人はその場で無様に倒れてしまった。あてなは二人を見降ろすようにして、

「二人とも暴れてたら掃除出来ないから、しばらくそのまま動かないですよ？」

「あ、あてな！？ せめて私は自由にしてちょうだいよ！ コイツと一緒に巻き付けるのなんてひどいわ！」

「それはこっちの台詞よ！ ちょっと貴方も、こんな野蛮なオンナなんか亀甲縛りにでもしてちょうだいよ！」

「あなたこそ!？」

「なによ!？」

「……………物置とかないかな。とりあえずうるさいんだけど」

暴れまわる芋虫のような二人を見てため息をついてから、あてなはローブの袖をまくって部屋を軽く一瞥した。

「うっし、それじゃお掃除しますか。ゴミ山漁りの腕がお掃除にも応用できるって便利だね」

——ウム。デハハジメヨウカ。

そしてあてなは目の前の本の山に突貫した。

とりあえず、魔理沙が帰ってくるまでには終わらせておかないと…

…

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第二話（後書き）

ユーザー登録、ありがとうございます。

おかげでテンションも土ゼロって感じまで戻りました。

さて、外伝なんですが……完全にギャグテイストですW
そのかわりやっぱし地の文が少なえ……

ミクシィでとある人のお話を読んだんですけど（二次創作ではないんですけど）それでも圧倒的地の文で、オレのお話とは天と地ほどの差が；

オレもあれぐらい書けるようになりたいなあ……

あ、そうそう

一応オレミクシィに潜んでますよW
前にも書いたっけコレ？

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第三話

一方、所変わって魔理沙は人里の菓子屋を探して歩いていた。夕日が差し込む人里はどことなく寂しげな空気が漂っている。

「しかし、ケーキってどこに売ってんだかな……?」

適当に里を歩けども、ケーキ屋らしき建物なぞ見当たらない。和菓子屋ならいくらでも見つかったのだが……

「……ん? あの後ろ姿は」

魔理沙の視線の先に、もう何度見たか赤い巫女服姿の少女が歩いていた。

少女は小さなメモを片手に付近の店の前を歩いていた。軽く手を振ってみると、少女は少し眉をひそめて振り向いた。

「よお。何してんだこんなところで?」

「夕食の材料を買いに来たのよ。珍しいわね、こんな時間に魔理沙がここにいるなんて」

すると魔理沙はニツと白い歯を見せて笑って、

「今からちよっとしたパーティーなんだ。だからそれ用に何か使えそうなものを探しててな」

「へえ、パーティー……なかなか面白そうじゃない」

そう言う霊夢の表情はたいして興味無さそうだったが。

「霊夢も来るか？ どうせヒマなんだろう？」

「今日はムリ。神社で少しやることもあるし、私だけ楽しんじやっても悪いしさ」

私、だけ？

「……？ どういう意味なんだぜ？」

霊夢はくるりと振り返ると軽く手を振って、

「んじゃ、私は行くわよ」

「あ、おい！ 今年も宴会やるんだよね？」

「当たり前でしょ？ ま、用意が出来たらそのうち連絡するわよ」

「へへ、そっちも楽しみだな」

すると霊夢はため息をついて、

「魔理沙もたまには手伝いなさいっての。まったく、いつつも準備も後片付けも私だけじゃない」

ふと、魔理沙はあることを思いついてこんな提案を試してみた。

「そうだ、今年ももっと大量に人を呼ばないか？」

「は？ どうしてよ？」

用意する手間が増えるじゃない、と心底嫌そうな顔をして付け足した。

「たまにはいいだろ？ 宴会なら大勢の方が賑やかで楽しいじゃないか」

「具体的に、誰を呼ぶのかしら？　いつも来てるのはアンタと、それから霖之助さん、うるさい三人に、パパラッチとそのパシリ、あとは……」

と、霊夢は首を振って言葉を止めた。

まさか、それ以上思い出せなかったのか？

……ボケるには早すぎないかと魔理沙は心の中で少し心配した。

「ん？　そりゃ幻想郷中からありったけのヤツらを」

「神社が崩壊するわ。……それに、そんな人数を賄えるような食料はどこから用意するのよ」

「キノコでよければ提供するぜ？　この前も真っ赤なテングダケを見つけてさ」

「ほう、いったい誰が食べるのかしら？」

おかしいことを訊く霊夢だ。

魔理沙は少し首を傾げてから、

「あれ、霊夢はキノコ嫌いだったけ？」

「毒キノコなんて論外よ！　……というか、宴会で死人を出すようなことは止めてちょうだい」

「わかってるって」

魔理沙はもう一度笑って見せたが、霊夢はため息をするだけだった。

そして霊夢は再び歩きだそうかと背を向けると、

「まあ……そうね。たまには大勢で宴会やるのも、たまには……」

霊夢の言葉に、魔理沙は目を白黒させた。

普段の霊夢がこんなこというだろうか。

「お？ 珍しいな。お前がそんなこと言うの。どういう風の吹きまわしだ？」

「い、今アンタに言われてちょっとぐらいいならいいかもって思っただけよ。それに、私はあんまり騒がしいのは好きじゃないし」

じゃあ何でいつも宴会で大はしゃぎしてるんだ？

という言葉葉を飲み込んで、魔理沙は霊夢に背を向けると、

「ふうん……？ ま、いいや。んじゃまたなー」

そして霊夢とは反対方向に向かって歩き出した。

今回里にきた目的はあてなのケーキを買うことだ。

寄り道している場合ではない。

「つかしいなあ……たしかこの辺で見たような気がするんだが」

行けども行けども洋菓子屋の類は見当たらない。

見当違いだったか……と、魔理沙が引きかえそうかとした瞬間、

「おー、魔理沙じゃないか」

「あ？ この聞き覚えのある声は……」

すると、レインコート姿の少女が手を振りながらこちらに向かって走ってきた。

少女の手には何やら奇妙な機械を抱えていた。

「どうしたんだ？ こんなところで」

「ん、にとりか。実は今ケーキを探しててな」

「ケーキ？ それならその店のことか？」

にとりが魔理沙の真後ろを指差した。

そこにはデカデカと洋菓子店らしいケーキやクッキーを模した看板が立ててあった。

まさに灯台下暗し。

魔理沙はあちゃーと手で顔を覆って天を仰いだ。

「……情けないぜ」

「でも、なんでケーキだ？ 何かの記念とか？」

「まあそんなとこだ。……で、おまえの持ってるソレなんだ？」

「ああ、これ？ これは私の新発明さ。娯楽用のプロジェクターって感じかな」

「ぶ、ぷろ……プロシユート？」

「どうしてそこで肉が出てくるのさ」

「ん？ 兄貴のことなんじゃないのか？」

「……………」

「……こほん。で、どんな機械なんだ？」

魔理沙が訊ねるとにとりは得意気に胸を張り、

「これは、近くに存在する物体に干渉して、どんなものでも娯楽用のオモチャにしてくれる装置さ。機械が干渉した後バーチャル空間を形成して云々」

説明の内容はまるでチンプンカンプンだったが、魔理沙はこれは使えると思う早速手を伸ばした。

「へー。面白そうだな。ちょっと貸してくれよ」

「っておい！ いきなり引っ手繰るなよ！？」

「細かいことは気にすんなって。ちょっと借りるだけだって」

「……おまえ、その台詞の後返したこと、あるのか？」

「過去は振り返らない主義だぜ」

「……まあ、いいけどさ。未完成品なんだから壊さないでくれよ？」
「わかってるわかってる」

そして奇妙な機械を抱えたままケーキ屋で買い物を済ませると、魔理沙は箒に飛び乗って、

「んじゃまたな」

「うむ。それじゃな」

簡単な挨拶の後、まるで流星のような速さで魔理沙は空へと駆けていった。

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第三話（後書き）

究極の手抜き回……やべえ!;

そして水面下ではオリジナルを一つと二次創作を考案中

なんかこう、勢いに任せて書いてますw

外伝が終わったら両方公開できるかなあ……

このお話、何にもプロット書いてないから自分でもどうなるかわからないんですよえw

今のところほぼイメージと脳内だけでこのお話は出来てます。

ああ、早くあとがきが書きてえッ!

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第四話

「おおーい！ 今帰ったぞって、どうしたお前ら」

魔理沙が玄関を開けてすぐ目の前に、細い糸のようなものでぐるぐる巻きにされたアリスとパチュリーが転がっていた。

二人は魔理沙の存在に気がつくのと頬を真っ赤にしながらじたばた動いて、

「な!?! 魔理沙、あの! これは違うの!」

「あ、あてなの仕業よ! あの子ったら急に私たちを縛りつけて……って、ちょっと! 今どこ触ったのよ!?!」

「貴方なんか触るわけないでしょ!?! 変な言いがかりはよしてちようだい!?!」

キャンキャン吠えあう犬みたいな二人をまたいで居間に足を踏み入れた途端、思わず魔理沙は絶句してケーキの袋を落としかけた。

「な……! んな……ッ!?!」

「ん? あ、お帰り魔理沙」

わなわなと体を震わせていると、居間の奥からホコリまみれのあてながひよいと顔を出した。

魔理沙は震える指先で部屋のあちらこちらを示して、

「こ、これは……!?!」

「掃除しろって言われたからさ。ちゃっちゃと片づけちゃった。これでもけっこう大変だったんだよ?」

——アテナハエライ。ミロ、コノセイリセイトンサレツクシタコノ

ヘヤヲ。

ぬいぐるみの指先が示す。

まずは本棚。

魔理沙が読んでいたありとあらゆるジャンルの本が、綺麗に整頓されて本棚の中に綺麗に収まっていた。

綺麗、なんて言葉では足りないくらいだ。

ジャンル、作者、本のタイトル、完璧なまでに整理された本棚は美しいとさえ思えるほどだ。

そして次に示したのはこの居間。

あれだけ本まみれで汚かった居間はもう消え失せていた。

この家のどこにあったのか、本人ですら分からない洒落たアンティークのテーブルとイス。

ソファも丁寧に並べてあるし、床にはホコリの欠片一つ見えない。それどころか、鏡のように自分の顔を反射しているではないか。

「す、すげえ……。まるで新築の家みたいだぜ」

「さて、そろそろ二人の魔法を解かないと。……。んしょ」

ポケットから小さなハサミを取り出すと、あてなは二人に巻き付いていた糸を切って解放した。

「んじゃ、せっかく綺麗になったんだしケーキでも食べようぜ。：

ほら、お前らにもらみ合ってねえでこっち来いよ」

「……一時、休戦にしましょうか」

「不本意だけど、いいわ」

四人が椅子に腰を掛けると、魔理沙は早速買って来たばかりのケーキを取り出し箱を開けた。

「うわぁ、美味しそッ」

「チーズケーキにショートケーキ、モンブランにガトーショコラ……なかなかのセンスじゃない？」

「だろ？ んじゃアタシは……」

そして、四人同時に手を伸ばした。

「チーズケーキな」

「あ、ボクチーズケーキがいい」

「私はチーズケーキをもらうわ」

「じゃあ、チーズケーキをいただこうかしら」

・
・
・
・
・

一度魔理沙がケーキの箱を閉じて深呼吸。
そして、軽い咳払いの後、

「……まあ待て。まず、最初を選ぶのはアタシでいいよな？」

「えーッ！？ これってボクのお祝いなんじゃないの!？」

「それもそれで不公平じゃない？ こういうのは平等に決めないと」

「パチュリー、そもそも貴方は今回のパーティーには関係無いでしょう？ それなのにどうしてまだここにいるのよ」

「いいじゃない。ちょうどケーキは四つあるんだし、私だってケーキ食べたいわ」

「ああ、待った待った！ これじゃ一向に決まらねえじゃねえか!？」

バシバシとテーブルを叩いて二人の論争を止める魔理沙。

正直、このまま騒いでいても埒があかない。

何かいい方法は……ん？

ふと、魔理沙はにとりから借りたあの怪しげな機械を思い出した。たしか、帰って来たときに玄関の辺りに置いたんだっけ。魔理沙は玄関へと飛んでいって機械をテーブルの上に持ってきた。突如現れた怪しげな機械に一同が怪訝そうな表情になる。

「魔理沙、それ何？」

「にとりから借りたぶ、ぷろ……なんとかだ。コイツに何かを近づけると、近づけたそれを娯楽用のオモチャにしてくれるんだとか何とか……だったっけ？」

何故か視線をパチュリーに泳がせる魔理沙。

もちろん、機械なんぞ触れたこともないような人間が分かるわけも無く、

「私に分かるわけないでしょう。それに近づけたものって意味が分からないわ」

「おい、アリス。お前の人形貸してくれ」

「いくら魔理沙の頼みでもそれはお断りするわ。怪しすぎる」

「んじゃ」

——ダガコトワル。

「ボクも嫌だよ」

あてなもぬいぐるみも数秒の間も無く答えた。

「即答かい……じゃあ、これなんかどうだ？」

すると魔理沙は適当な本を一冊取って三人に示した。

それはいたって普通の魔道書だった。

魔理沙はそれを機械のそばに置いて数歩後ずさって様子を見た。

……そのまま二分経過。

特にこれといった変化は無かった。

「……何も、起こらないわね」

「故障か？　そういえば未完成品だとか何とか言ってたような……」

「こういうのって叩けば治るんじゃないかな。ガラクタの機械とか叩くと機能することあるし」

「あ、おい」

あてなは本の乗った機械を適当に見てから、恐らく叩いても大丈夫そうな平ったい部分をバシバシと叩いてみた。
反応はまるで無かった。

「ダメか。それじゃ次は……？」

もう一度叩こうかと手を振り上げた瞬間、怪しげな機械が突然ゴトゴトと揺れ動きだした。

そして今度はピーピーと機械音が鳴り響き白いランプが点滅し始めた。

「お、おい！？　あてな、離れろッ！？」

「わ、わわわッ！？」

魔理沙が手を伸ばした瞬間、機械が眩い光を放ちこの家全体を包みこんだ。

そして、魔理沙たちの意識が閃光の中へと吸い込まれていった……

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第四話(後書き)

アクセス数……減ってきてる……;

この外伝が足を引っ張ってるのか、いやいや、本編最終話で最後みたいなこと言っちゃったから読者が減っちゃったんや……;

と、とにかく外伝頑張ります……

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第五話

いつの間にか、魔理沙は仰向けに倒れていた。

そして重い体をゆっくりと起こし、手近な場所に落ちていた帽子を拾い上げ深く被る。

あの閃光のせいか、視界がぼやけて上手く見えないが近くで誰かが倒れていることは何となくわかった。

「つててて……。みんな、だいじょ……。ぶ……。ッ？」

視界が元に戻ると、目の前の光景に魔理沙は我が目を疑った。

「な、なんだ……。コレ？」

目の前には、背丈の何倍もあろうかという大きさの本がいくつもいくつも積み重なっていた。

おかしいことに、何故か縦長の長方形の本ばかりで、しかもその本は規則正しく三冊ずつ、互い違いに綺麗に積み重なっていた。

最初の段は横向きに、そして次の段は縦向き、その次は横向き、といった具合だ。

これ、どっかで見たような形だな……。なんだっけ、こういうオモチャで昔遊んだことがあるような……。?

「う、ううん……。あれ、ここは？」

「お、おいあてな!? 大丈夫か？」

「魔理沙……。? うん、何ともないけど……。?」

——ダイジョウブだ、モンダイナイ。

肩のぬいぐるみもうなずいた。

ホッと胸をなでおろすと、魔理沙はすぐさま他の二人の体を揺すって起こした。

「……ん、いったい何が起こったのよ」

「パチュリー！ アリス！ お前らもこれ見ろよ！」

そして体を起こした二人も、魔理沙同様に積み上げられた本を見上げて言葉を失った。

ただ、魔理沙と違って二人は冷静に分析しようと試みた。アリスが本の背表紙に触れる。

ザラザラとした感触が手に伝わってくる。

「……これ、普通の本と同じ材質ね」

「だけだよ。そんなバカでかい本なんてあるかよ。紅魔館でも一度も見てないぞ。なあ、パチュリー？」

パチュリーは本ではなく、この場そのものを調べていた。

魔理沙はたいして気にはしていなかったのだが、

「この空間……、魔法か何かの類と似てるわね。異空間にでも飛ばされたと考えるのが妥当かしら」

「あん？ 異空間って、ここアタシン家だろ？」

確かに魔理沙の言うとおり、今いるこの場は積み上げられた本以外はほとんど魔理沙の居間と同じだった。

アンティークなテーブルとイス。

整理された本棚。

玄関には人数のブーツが転がってるし、テーブルにはケーキの箱がちゃんと乗っている。

だが、パチュリーは怪訝そうな表情のまま窓に近づき開けようと手

を伸ばして、

バチィッ！

「……ふむ」

「な、なんだ今の！？ 窓開かないのかよ？」

「言ったでしょう。ここは異空間だって。恐らくその機械が作用して擬似的な異空間を作り出したんだと思うわ。機械……、というより、魔法のそれと似ているのが不思議なのだけだ」

「ああもう！ さっぱりわからんぜ！？ いったいどうなってるんだよ」

「つまり、簡単にはここから出られない、と」

アリスの言葉にパチュリーがうなずく。

そしてアリスも同じように本を示しながら言った。

「それと、この本なんだけど。どうしてこんな積み方してるのかしら。これじゃまるでジェンガと同じじゃないの」

「ああ！ それだソレ！ この積み方に見覚えがあるなあって思ったら、それと似てるんだ！」

分からない人のため、簡単に『ジェンガ』について説明をば。

ジェンガとは長方形の積み木を三つずつ積み重ね、一つずつその積み木を抜いていくというよくあるパーティーゲームの一種。

特にこれといったルールはないが、基本的には崩したプレイヤーの負けである。

「……あの機械、娯楽用のオモチャに変えると言ってたわよね魔理沙」

「ああ、言ったぜ？」

「だからなのかしら。魔理沙が本を近づけて、機械が作用したから、こんな馬鹿みたいにデカイ本が積み重なってそびえてる……」

「そういえば、あてなの姿が見当たらないのだけど……」

アリスに言われて魔理沙も気づく。

そういえば、さっきからまったく姿が見えない。

あてなだけ異空間に飛ばされなかったのか。

それとも、まさか機械の誤作動とかで別の次元に飛ばされて……？

「おーい！ みんなー！」

すると、魔理沙の頭上から声が聞こえてきた。

軽く首を傾け見上げてみると、本の上の方からあてながローブの裾を抑えながらふわりと舞い降りてきた。

軽快に着地すると、ニコニコしながら駆け寄ってきた。

「あてな！ お前上に行ってたのか？」

「みんな起こしても起きないからちょっと登ってみたよ。魔理沙の家ってあんなに天井高かったっけ？」

「んなわけないだろ……で、それはなんだ？」

魔理沙があてなの抱えていた物を指差した。

あてなにはまったくもって似合わないであろうその物体。

「ああ、これ？ 一番上にあったから持ってきたの。使えるんじゃないかと思って」

「……これがか？」

ひょいとそれを奪い取ると、魔理沙はそれをしげしげと見つめた。赤い柄の持ち手と、それにくっついた黄色いパーツ。

浮輪に空気入れる時に使うあの黄色い部分が赤い棒の先端にそのまま二つくっ付いたようなデザイン。

叩けばピコッ！ とか良い音しそうなそれを魔理沙は握りしめ、

「つてコレただのピコハンじゃねーかッ!？」

「痛い痛いッ!？ 落ち着いてよ魔理沙!」

ピコピコ間抜けな音を立てながら魔理沙はあてなの頭を何度も叩いた。

さすがにコブは出来てないが、あてなは涙目になりながらしゃがみ込んだ。

「うう……ったいなあもう。気絶したらどうすんの!？」

「しかしこんなもん見つけても役に立つわけないっての。アレか、これで叩くと本が吹っ飛んでくってか？ いやいやそれはないだろ。ハハハ」

ピコッ！ と小気味のいい音を立てながら魔理沙は巨大な本を叩いた。

すると爆音にも似た音を立てながら本は明後日の方向へと消えていった。

呆然とそれを見つめる魔理沙。

「……………」

「お誂え向きにピコハンは人数分あるみたいね。どうする？ 魔理沙」

「こ、こんな異空間にいられるか!？ アタシは出ていくぞ!？」

あまりにもデタラメな空間とおかしな本に憤慨した魔理沙はずんずんと歩きだし、愛用の炉を構え力を込める。

こんなヘンテコな空間にいられるか。

いっそマスタースパークで吹き飛ばしてしまえばいいじゃないか。出口が無ければ、作ればいい。

どっかの豆粒ドチビだって言っていた。

ここは同じ金髪キャラとしてそれを踏襲させていたかどうかではないか。

「ぶっ飛ベッ！ 本日二度目のマスタースパアアアッ！！」

「あ、そうそう魔理沙。この空間から出ようとして魔法なんてぶっ放さないでよ？ さっき試してみたけど、魔法が反射して大変なことに……」

「……へ？」

時すでに遅し。

パチュリーの言葉が終わるその直後、魔法は完成し炉から放たれた鋭い閃光は見えない壁に弾かれ、まっすぐ魔理沙に向かって返ってきて、

「んぎゃああああああ！？」

「……上手に焼けたわね」

全身真っ黒焦げの魔理沙の前にしゃがみ込むと、パチュリーは心底楽しそうに頬を突っついていた。

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第五話（後書き）

雨ばかりで気分まで落ち込むぜえ；

そして、雨が降ると小傘の短編が頭を過ぎる

書いてみたいような、いやでも別に書かんでもいいような……

気まぐれな人間だもんで、書きたくならないとまったく書かないんだよなあ……オレ；

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第六話

「恐らく、このゲームをクリアしないとこの空間からは出られないわね。……って魔理沙、訊いてるの?」

「そういうの、早く言ってほしいんだぜ……」

全身黒焦げの魔理沙は煤を払いながらため息をついた。

……あてなの気持ちも分からんでもない。

魔理沙は渋々ピコハンを握りしめ、積み上げられた本を静かに見据えた。

現在、下から二番目の段の右端だけ本が無い。

これは今しがた魔理沙がうっかり飛ばしてしまったものだ。

今のところバランスを崩して倒れる……ということはないようだ。

「さて、やるからには真剣にやろうじゃねえか。まずは順番だな。どうする?」

「これは別にじゃんけんとかでもいいでしょ。ただ」

「じゃーんけーん」

「ちょ!?! 人の話を訊きなさいってのに」

「ほい」

「はい」

「そい」

「え、えいッ」

魔理沙はパーで、あてながチョコキ。アリスもパーを出し、パチュリーも同じくパーを出す。

「やった。一人勝ちだ!」

——ウム。イチバンテハアテナダナ。

「んじゃ残りも決めるぞ。じゃーんけん……」

結果、あてなが一番手、次いでアリス、魔理沙、パチュリーの順番で本を消していくことになった。

じゃんけんの後、あてなは積み上がった本を指差して、

「で、何するの？」

「……あれだ。とにかくこの本の山を崩さないように一冊ずつこのピコハンで消してけばいいんだよ」

「そっか。んじゃ簡単だね」

「ねえ、魔理沙。一ついいかしら」

「何だ？」

アリスが心配そうな表情で魔理沙に訊ねた。

「やっているうちに、当然誰かがこれを崩すわよね」

「ああ、そうだな」

「……崩したプレイヤーはどうなるのかしら」

「どうなるって……」

普通、こういったゲームで負けた場合は何か罰ゲームだと相場が決まって……

そこまで考えて魔理沙は途端に青ざめた。

「……ば、罰ゲーム」

「いったいどんな罰ゲームなのかしら……？　とっても楽しみね」

「ま、負けなければいいだけだぜ！　でも、逆に勝ったヤツはどうなるんだろうな？」

「あ、じゃあさじゃあさ、勝った人からあのケーキを選ぶってのはどう？」

「それは良い案ね」

「私もそれで構わないわ」

「キーキをかけた巨大ジェンガってか。まあ、たまには悪くねえか。うっし、じゃあスタートだぜ」

ピコハン抱えたあてなが勇みよく本の前へと歩いていく。

「そうそう。最初は上の方から抜いていくのがセオリーなんだよな」

「地方ルールだとかだと上から二段目を最初に抜くのよね」

「二本抜きとかもありなのかしらね？」

妙に詳しい魔女三人。

そう。

基本的にこのゲームは上から少しずつ抜いていけばいい。

経験者なら最早暗黙のルールとなっているだろうその法則を、もちろん未経験のあてなが知ってるわけがなく、

「いやあ、ボクって左右対称じゃないと気が済まない性格でさあ」

「……は？ おい、おいおいおいあてな！？ そこは今さっきアタ

シが吹っ飛ばした段の」

「んっじゃ、いっくよお……ッ！」

「待て待て待て待てえーッ！？」

「そいやーッ！」

魔理沙があてなに飛びかかろうとした刹那、ピコハンが長方形の本を薙いで吹き飛ばす。

支えを失った本の塔は当然バランスを失いグラグラとその体を震わせる。

と、同時に体を震わせる三人の魔女達。

固唾を飲んで見守っていると、やがて塔の揺れはゆっくりと治まっ

ていった。

あてなはふうと息をつき、一仕事終えたような爽やかな顔をして、

「はーッ、スッキリした！」

「何やってんだあてなッ!? このゲームは崩したら負けなんだぞ!? それなのに最初っからそんな危ないトコを叩かんでも……」

「いやだって、片方だけ穴が開いてたら気になるじゃん」

「こ、こんなにゃろお……!?!」

激昂する魔理沙だったが、その後ろでは対照的に冷静な瞳で分析する二人の魔女達。

「なるほど……。彼女は天然を装って私たちの選択肢を潰しに来た、ということかしら」

「最初に会った時から思ってたけど、あの子やっぱり侮れないわ……」

「……お前ら」

「さて、次は私の番ね」

アリスはいつ出したのか、上海人形にピコハンを持たせひよいと軽く飛んで上の段の本に目がけて振るった。

もちろん難なく本が消えてクリア。

「お次はアタシだぜ! いきなりピンチな気もしたが、こっから上だけを狙って消していけば大丈夫だぜ」

アリスと同じく上の段へと飛んでいき、アリスが消した本の反対側の本を消してクリア。

本の塔は微動だにしなかった。

「ほら、次はパチュリーの番だろ？」

「わかってるわよ。……でも、いちいち高い所に飛ぶのも面倒ねえ……？」

「まさかあなた……ッ!？」

「……今日のアリスとパチュリーはノリノリだな。妙に生き生きしてら」

不敵な笑みを浮かべると、パチュリーは下から上までの段の数を確かめながら周囲をぐるりと回って歩きだした。

どうやらこの本は十八段あるようだ。

そしてそのうち下から二番目の右と左、そして上から二段目の左と右が消えてなくなっている。

正直、残った下の段が奇跡的に厄介だ。

上の方から行こうが下から抜こうが、このままだとかかなりの確率で崩れてしまう。

「……無難なのは真ん中ね」

そしてふわふわと飛んでいくと、ちょうど塔の真ん中あたりの本をピコハンで小突いた。

軽く小突いただけで本は消えてしまった。

ピコハンの力加減は関係無いらしい。

それにしても、ピコハンで消してしまうというのもどうなのだろうか。

ふとパチュリーはそんなことを心の中で思った。

このゲーム、本来は指で抜くものだ。

こんな簡単に消せては正直ゲームになるのかどうかさえ怪しい。

機械の作者が手を抜いているのか、それとも……？

そこまで思考を巡らせ、パチュリーは首を振った。

「考えすぎね。作者にそんな頭脳は無いもの」

「おーいパチュリー？ 終わったのか？」

下から魔理沙の声が響いてきた。

「ええ、今行くわよ」

そしてふわりふわりと綿毛のようにゆっくりと着地した。

そして一度本の塔を振り返る。

微妙に欠けた本の塔は滑稽な姿をしていた。

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第六話(後書き)

長い長いあとがきを書き終えました。

そして現在、恋愛モノのヒロインを考えてます。

ううん、みよんとチルノどっちにしようかなあ……

まあ、半分ぐらいは決まってるんですがね；

後は主人公か……

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第七話

そして四人が次々と本を消していった。本の本は文字通り間の抜けた形状となっていた。
上から下までほとんどスカスカで横から小突いただけであっさり崩れそうだった。

「……ねえ、魔理沙」

「……何だ、パチュリー」

肩で息をしながら魔理沙が答えた。
気のせいかな、魔理沙の頬が少しやつれているように見えた。

「おかしいと思わないコレ。あてなの最初の一撃以来、まったく揺れなくなってるわ」

「そう言われればそうだな……。けっこう際どい場所も叩いてるんだが……」

「ボク疲れちゃったや……。はふう」

ぺたりと座り込んでしまうあてな。
魔理沙同様、少し疲れたような表情をしている。

「それにさっきから妙に肩が重いよね。あてなも貴方も、顔色悪いわよ?」

「そ、そういえば体が重いような……。でも何でだ?」

「どう考えても、原因はこれよね」

アリスが指で本の本を示した。
本が抜けてスカスカなくせにどっしりとそびえるそれを見上げながら

ら、魔理沙はため息をついた。

「これじゃ、ゲームどころじゃないよな……」

「これ、もう少し調べてみてもいいかしら？」

魔理沙は首だけ動かして答えた。

そしてパチュリーは本の周りをぐるっと一周して塔を観察した。

一見して、特に変わったところは見つからなかったのだが、パチュリーはふと眉を寄せた。

「……微かに、魔力を感じる？」

小さな魔力の波を感じたパチュリーは本の表紙に触れてみた。ザラリとした羊皮紙の感触と共に、歪な魔力が伝わってきた。

魔理沙達が疲れているのはこれのせい……？

「魔理沙、機械にあてた本ってどんな本だったの？」

「ああ……、えと、覚えてないぜ」

「それが、どうかしたのう……？」

「あら、貴方はわかるの？」

「う、うんっと……」

べったりうつ伏せのままあてなは思考を巡らす。

あの本はたしか……、たしか……

「ゴメン……、思い出せないやあ……」

「……でもま、だいたい予想はついたわ」

「パチュリー、どうする？」

パチュリーは額に手を当てながらつぶやいた。

アリスはぐったりするあてなと魔理沙に寄り添いながらパチュリーを見上げた。

「どう考えても呪いの類ね。恐らく魔理沙が適当に選んだ本が呪われた本の類だったのよ。呪いの類を扱ったことのある私たちは多少耐性があるけど、彼女は恐らく皆無でしょうね。一番辛そうでもないわね」

「……さて、そうとわかればやることは一つ」
「この空間からの脱出、ね」

アリスとパチュリーは二人でうなずき合った。
すると、あてなと魔理沙もフラフラと立ち上がって、

「て、手伝うよ……」
「あれを壊せばいいんだろ……？ それならアタシにおまかせだぜ」
「でも、まだ根源がつかめてないわ。呪いの本体的な何か……」
「そういうの、一番下とかじゃないかな……？」

あてなが本の塔の一番下の真ん中の本を指差した。
何の変哲もない茶色い表紙の本だったが、パチュリーはそれを見てもうなずいた。

「それじゃ、片っ端から崩していこうじゃない」
「その役は私がやるわよ」

アリスは片手を躍らせながら術符を取り出して掲げた。

「出番よ、上海。騎士『ドールオブラウンドテーブル』」

術符から解き放たれた光と共に、十二の人形が各々の獲物を手に本の塔に突っ込んでいく。

そして次々と本を吹き飛ばし、最下段を残してあっという間に本を消し去ってしまった。

すると、中央の一冊だけがカタカタと小さく揺れるとふわりと宙を飛んだ。

「アイツが呪いの本体ね。それじゃ私が焼き払ってあげるわよ」

パチュリーは白い術符を高く掲げて唱える。

「日符『ロイヤルフレア』」

白く輝く焰が本に目掛けて一直線に伸びる。

直撃かと思われた瞬間、その本は機敏な動きでそれを回避してしまった。

「チッ……。思ったよりすばしっこいのね」

「じゃ、じゃあボクが止めるッ」

——ン、アテナ。アレヲヤルノダナ。

肩のぬいぐるみを掴み、あてなは本に向かって全力で投げた。

ぬいぐるみの手には、いつの間にか術符が握りしめられていた。

「お願い！ 縫符『フィッチング・スレッド』」

本が回避したその瞬間を狙って、ぬいぐるみの手から光が放たれる。それはアリスとパチュリーを縛ったあの術符だった。

光の糸はあっという間に本をぐるぐる巻きに縛り付け、その身動きを封じた。

やがて本がぱたりと地面落下。それでもしぶとく暴れて逃げようとした。

が、それを魔理沙が踏みつける。

「コイツを消せばいいんだよな？」

ミニ八卦炉を本の表紙に押し付け、魔理沙は笑んだ。

「ゼロ距離ってヤツだッ！ 吹き飛びやがれええええッ！！」

灼熱の光線が本をあつという間に飲み込み消し飛ばす。

しかし魔法の反動で魔理沙も大きく後ろに吹き飛んでしまった。仰向けにひっくり返ったまま、魔理沙は達成感に満ちた表情になって、

「ッ、だぁーッ！？ これで終わったぜ！？」

「ええ、これでお終いね。あー、疲れた」

「呪いの本なんて物騒なもん、さっさと処分しなさいよ」

「分かってるって。……お、何だか空間が戻ってくみたいだぜ？」

巨大な本はだんだんと薄くなって行って、やがてその姿を消した。だんだんと霧雨魔法店の姿に戻っていく。

そしていつもの、本だらけの居間に戻っていった。

・

「……あ？」

そして気がつくと、魔理沙は何故か自室のベッドの上に転がっていた。

起き上がって鏡を見ると、いつもの白と黒のローブ姿だった。
……ん？

「あれ、今アタシはあてなたちと巨大ジェンガをやってたんじゃない……」

思い出そうと腕を組んで思考を巡らせる。
たしか、にとりからあの機械を借りて、それから……

「下に行けばわかるだろ。うん」

魔理沙は部屋を飛び出し階段を駆け降りる。
そして、目の前の惨状に目を疑った。

「……ど、どういうことだぜ？」

居間は本とホコリまみれの汚い空間となっていた。
おまけに若干焦げ臭い。

居間の中央には焦げた謎の物体が転がっていた。
……どこかで、見覚えのある物体だ。

「……あ、あああああッ!？」

そして、魔理沙は全てを思い出した。

昨晚、あてな、アリス、パチュリーとでパジャマパーティーなるものをやっていたのだ。

その時、にとりから借りていたあの機械を取り出し、作動させたら大爆発して……

「……で、収集がつかなくなったからアタシは部屋に戻って寝たん

だっけな。アハハ……、ふわぁ……ッ」

軽い笑い声と共に、小さな欠伸が出た。
もう一眠りぐらいしてもいいだろう。

魔理沙は髪をがしがしかきながら自室へと戻っていった。

それからほんの少し、時間が過ぎて……

「ごめんくださーい。霧雨魔理沙さんいらっしやいますかー？」

魔理沙は少女の声に起こされ目を覚ました。

……そして、本編三十七話に続く。

外伝 『ワルプルギスの夜?』 第七話(後書き)

む、無理やり夢オチ;;

大変申し訳ない……m () m

そして、この30分後にはあとがきを公開します。
ちよっとお待ちを

このたびは『東方空想夢』｝ D r e a m s o f s k y f a n t a s i a を読んでいただき、ありがとうございます。

前作の倍以上の文字数、およそ十二万文字！（外伝込みでいかがでしたでしょうか？

閲覧者数もかなり増えて、お気に入り登録件数も週間アクセス数も前作よりもかなり伸びました。

もちろん、感想の方もいっぱいいただきました。ありがとうございます。

とっても嬉しかったですよ。

二次創作も三作目。

前より腕が上がっているような、いや気のせいかな、とか毎日考えながら書いておりました。

今回の出来は50点ちよっとって感じですよ；

さて、恒例の元ネタ公開

『東方空想夢 ｝ D r e a m s o f s k y f a n t a s i a ｝』

まずはこのお話の主人公から。

・オリジナル主人公

『天春 桜』

きっかけは友人の買い物に付き合っていた時。香水のコーナーに立ち寄った時にオレが桜の香水を手にとったのがきっかけです。

香水、といっても一般にイメージされるような液体ではなく練り香水（オロナインみたいな感じのヤツ）だったんですが、すごく良い

香りがして一発で好きになりました。

そんな時に『香りを自由に操れたらいいなあ』とふと思いついたんです。

だから『香りを操る能力』人物が出来上がったというわけです。この能力はもう少し後で解説しましょう。

次に、名前。

桜はもちろん香水の元が桜だったから。

天春って名字は特に意味は無いんですが、『春』という漢字を使っている変わった名字は無いかと探していた時に見つけたものです。いっちゃん最初の原案の時では『香坂』という名字だったんですが、何となく平凡だったから止めました。

（それと、その時見ていた某アニメの兄妹の名字と音が被るから、というのもありましたw）

キャラとしてのイメージは『車椅子で虚ろな瞳で空を見上げる病弱な少女』

実際序章ではそれを強く表すように書きました。

……ホントは、けっこう悲しいお話になりそうだったんですけどね；病弱の設定も消し、途中で路線を変えました。

性格も、最初は卑屈で暗いキャラを考えていたんですが、成長する過程を分かりやすくするため、そこまで気難しいキャラにはせず、ただ人見知りだけど、根は優しくてイイ子、となりました。

車椅子、というものに関しても正直いろいろ悩んでいました。

ちょうど十話あたり、永琳が登場する時点が、実はプロット上ではお話の分岐点だったんです。

どういうコトなのかと言いますと、あの時の桜の足が『治る』選択肢と『治らない』選択肢があったんです。

結局中の人の影響で歩くルートは無しになりました。

もし治っていたら、あの後どうなっていたか……作者のオレでも見

当がつきませんねw

基本、勢いだけで書いてるんで；

あ、ちなみに桜が車椅子キャラとなった理由の大元は俺の大好きなとあるライトノベルのヒロインです。

そして桜の夢である『空を飛ぶこと』

東方のキャラは空を飛ぶのがデフォですから、霊夢たちがみても、そんなことが夢なの？　ってレベル。

しかし桜は極度の高所恐怖症で……

この設定は後付けです。

結局高所恐怖症だけは克服できませんでしたね；

さて、能力について。

今回使った『香りを操る程度の能力』

……もの凄く地味ですw

前回のあてなもそうですが、とても弾幕ごっこに向いているような能力ではないです；

この能力は、自身が記憶している香りを呼び覚まし漂わせる、という能力です。

ただ香りが漂っただけで何になるのか。

最初は悩みましたね。

悪臭だけ放って戦うシーンも考えはしましたが……FFのモル○ルじゃないんだから女の子がそんなことしないでしょ、と断念。

結果、悪臭は二度も使うことになりましたが……

この能力の本当の狙いは『場を和ませたり、人を癒す』ことです。アロマセラピー的な能力なんですね。

故に人の最期を看取ったり、誰かを癒したり、なんてコトをしてたんです。

そしてこの能力の副作用として、人の纏う雰囲気を感じ取る、ということも出来るようになります。

雰囲気、というのは案外匂うものです。

雨の匂いが何となく沈んだような気持ちにさせるのはきっと、そんな香りが漂ってるからじゃないでしょうか。

そして、この能力の大元である桜の内なるカミサマ『カホリ』の存在。

八百万も神があるのなら、香りを司る神がいたっておかしくない。という紫の台詞から生まれたキャラです。

つまり、あとから出てきた人ですw

桜単独でもよかったのですが、能力の元をハッキリさせるために追加しました。

最初は恐怖していても、自分と同じ存在と認め同化して覚醒する。桜が天春の姓を含めて呼んだのは、自分と近い存在、家族として認めたからですね。

術符

香符『ポプリ・ボム』&香符『バッド・ポプリ・ボム』

本編でも書いた通り、ポプリとは室内香のこと。

そしてそれをモチーフに作られた爆弾タイプの術符。

桜自身が使っても、知っている香りだけをまき散らすことしかできませんが、カホリの手が加わって出来た術符は相当質の悪いものに

関係無いですけど、書いていて『サモンナイトエクステーズ』をちょっただけ思い出しましたねw

一つのカラダに、二つのココロ、ってね。

ちなみに、香りを司る神、というのは明確には存在していないようです。

『香りを司る 神』なんてググルと、この小説が出ますよw

さて、次は桜に関係するものだから次は……花言葉ですかね。

キンモクセイ
・金木犀

選んだ花言葉は『初恋』

他には、『謙遜』『真実』『陶醉』……などがあります。

レンゲソウ
・蓮華草

選んだ花言葉は『私の幸福』

他には、『心が和らぐ』『感化』『あなたは私の苦痛を和らげる』

……などがあります

・ラベンダー

香りだけ登場

花言葉は『期待』『私に答えてください』……などなど

・サクラ

特に劇中花言葉を用いていませんが、『優れた美人』『純潔』なんて花言葉があります。

それと、品種によって一部異なります。

・ラフレシア

花言葉は……『オマエなんか大っきらい！』

さて、ちょっと解説を。

ラフレシアってのは世界最大の肉食植物である巨大な花です。

第二十一話のあとがきで花言葉が無い、と書いてありますが、これはまず花言葉の意味を知らなくてはなりません。

花言葉というものはそもそもプレゼントする人、プレゼントされる人を現す時に意味を成すものなんです。

つまりプレゼントに好まれるような花にしか花言葉はありません。

(とはいえ、この解釈はちょっとずれてます。道端に生えている野草にも花言葉があったりしますし)

ラフレシアなんて花を恋人にプレゼントする奴は……ちょっと見てみたい気もしますが、大抵失恋するでしょう。

ラフレシアは別名コープスフラワー(死体の花)とも呼ばれます。

……コープスパーティーだとオレは嬉しいですケドね。

おっと、失敬。

死体の花といわれるほどに強烈な腐敗臭がするんですね。

だからそんな花を贈るってことは、相手のことがよっぽど嫌いなのだろう。

という皮肉を込めて、一部の人は『腐った死体』だとか『秘めたる嫌悪』という花言葉を用いるそうです。

カホリは最初幽香をひどく嫌悪していたので、そう言い放ったのでしよう。

それと、実際の匂いは……興味のある方だけ調べてみてはどうでしょう。

オレはもう二度と御免ですが……

花言葉だけでずいぶん書いちゃった；

次は、東方のキャラ。

今作に登場したキャラは以下。

『博麗霊夢』

『八雲紫』

『水橋パルスィ』

『古明地さとり』

『古明地こいし』

『火焰描燐』

『霊烏路空』

『藤原妹紅』

『蓬莱山輝夜』

八意永琳』

『鈴仙・優曇華院・イナバ』

『因幡てゐ』

『霧雨魔理沙』

風見幽香』

『東風谷早苗』

『八坂神奈子』

『洩矢諏訪子』

『アリス・マ

ーガトロイド』

『パチュリー・ノーレッジ』

『犬走椋』

『射命丸文』

『鍵山雛』

『八雲藍』

『橙』

※恐らく登場順。そしていちいちフルネームで書くのはオレの性分です。

総勢二十四名！

桜やカホリ、あてななんかも足すと二十七名に。

いやはや多い……ちょっと多すぎやしませんか？w

一人一人……書いてたら読んでる人もだるくなっちゃいそうなんで、メインだけを。

・博麗霊夢

メイン、其の一。

結局一番桜との絡みが多い主人公的ポジション。

当初はめんどくさがっていたものの、最終的には桜と親友となる。何だかんだで面倒見が良く、やたらツンデレで人気でしたねw

・八雲紫

メイン、其の二。

このお話の発端。

二次創作で主人公が幻想入りするのはだいたいこいつの仕業。書いてて都合の良すぎるキャラってのは意外と扱い悩むものです。

・古明地姉妹

メイン、其の参。

桜の能力にいち早く気づくこいし。

心情を読み取り桜の相談相手になるさとり。

心読めるってのはホントに助かる。

台詞書かなくていいんだもんw

・風見幽香

メイン、其の五。

早苗さんの次に好きなキャラです。次点で椛。

香りを操る能力の、対極の存在。

最強の妖怪ってわりにはけっこう負けてる。

ガスマスクとか、わりと卑怯だったりする。

まあ、最終的にはデレるんですけどw

プロットでは旅立つ桜に仙人草を渡すシーンがあったんですけどボツにしました。

ちなみに仙人草の花言葉は『旅の無事』『安全』

・守矢一家

メイン、其の六。

オレの……いや、皆まで言うまいて。

とはいえ、そもそのメインは二柱の神の方で、結果早苗さんはオマケ的な立ち位置に。

同じ神として桜とカホリに助力する神奈子。

しかし同じ神なのに諏訪子の出番はまるで無し……

ま、こんな感じかな。

書いてるオレも疲れてきた；

あ、タイトルのこと書いてないや。

『東方空想夢　～Dreams of sky fantasia
～』

『空想夢』というのは『空を想う夢』というこのお話のテーマから。Dreams of sky fantasiaも→の英語版です。元は霊夢と紫のテーマ曲であるネクロファンタジアを足して漢字、英語に直したものです。

そして、こっからは外伝『ワルプルギスの夜?』のあとがき

こんなの絶対おかしいよ！

と言わんばかりの壮絶な夢オチです。

これ、プロットも書かずに書いたもんで、書いている最中に時系列にズレが生じたんです；（作者として究極の失態

だから強制的に終わらせました。

世間一般的には打ち切り、とも言います。

前作の主人公『糸柳あてな』をメインに魔女達の夜会を書く予定だったんですが……

結局わけの分からないジェンガをやっただけで終わっちゃいました；

さて、キャラについて。

・あてな

思い出を求めるあの一件以来の登場。

あれから成長したらしく、やや強かな少女に成長しています。

左右対称じゃないと気が済まないってのは今回より追加。

きつとで冒頭で直していたカーテンはきっちりシンメトリーに違いないw

縫符『フィッチング・スレッド』

英語で仮止めの糸、という意味です。

フィッチング、は仮縫いという意味の言葉ですが。

・魔理沙

相変わらず書いてて楽なキャラw

ボケたり、ツッコミ入れたり大活躍。

どこことなく天然も入ってます。

・パチュリー

若干危ないキャラになってますが、結局それ以上発展しませんでしたw

無理やり終わらせたというのが若干アレでしたね。

ちなみに作者はアリマリでも、パチェマリでもどちらでもありません。

・アリス

あてなとはしっかり友人感覚。

本編では一緒に人形劇をやるのかとい話までしてますし。

『ワルプルギスの夜』とは。

ヨーロッパで行われている伝統行事的なもの。

とあるアニメの影響か、知名度はちょっと高くなったみたいですね
正確には、ヴァルプルギス、と言うそうです。

ギャグは……今回はお休みしましょうかw

これ以上長く語っていてもしかたありませんし；

こんなあとがきの最後の最後までお付き合いしてくださった読者の方々、それと感想、評価等をしてくれた皆様、お気に入り登録やユーザー登録までしてくださった方々全て含め、本当にありがとうございます。

書き手として、感想を貰えたり、評価してもらえるとすごく嬉しいです。

文章、ストーリーどちらも平均5pもだなんて高評価で感動しています。

完結した後でも、読み終わったとか、ここおかしくない？ と言った誤字報告とかでも、なんでもいいのでまた声を訊かせてもらえたら嬉しいです。

これからまた、未熟者のオレの作品を読んただけなら幸いです。成長してるんだか謎の小説家志望のヘタレ、夜斗をこれからよろしく願います。

・あとがき・ 東方空想夢 (Dreams of sky fantasy)

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

次回作は早ければ月曜日とかかな？

それだけでなく、来週には公開したいですね。

では、次回作でまた会いましょう！

読者の皆様、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8110r/>

東方空想夢 ～Dreams of sky fantasia～

2011年7月6日21時26分発行